

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ

泉南市文化財調査報告書 第二十七集

1995. 3

泉南市教育委員会

序 文

平成6年9月4日、わが国初の24時間空港である『関西国際空港』がようやく開港いたしました。これに伴い私達のまち泉南も、今後大きく変貌を遂げようとしております。

しかしながらそれまでの空港建設あるいは関連開発による民間企業等の開発ラッシュは凄まじいものがあり、今後もこの勢いはとどまることなく続いていくものと予想され、必然的に埋蔵文化財の緊急発掘調査も年々増加の一途をたどっているのが現状であります。

このような状況のもと、本市では先人の残した貴重な文化遺産を後世に伝えるという責務を果たすべく、緊急発掘調査を随時行ないその成果を本年度も『泉南市遺跡群発掘調査報告書』として刊行させて頂きました。

本書により、泉南市の新たな歴史の姿を垣間見て頂くと共に、そこから蘇る時空を越えたロマンをより多くの皆様と享受することで現代人が忘れかけた「心のゆとり」を回復して頂ければ幸いかと存じます。

また平成3年度から進めて参りました国史跡海会寺跡の整備も、おかげさまでもちまして無事終了し、今春「史跡公園」としてオープンする運びとなりました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と深く感謝申し上げます。次第です。

末筆ではございますが、本調査報告書の作成にあたりご指導・ご協力頂きました皆様にこの場をお借り致しまして心から御礼申し上げますとともに、今後とも倍旧のご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成7年3月

泉南市教育委員会

教育長 赤 井 悟

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成6年度国庫補助事業として計画し、社会教育課が担当・実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会社会教育課、仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文を担当者として、平成6年4月1日着手し、平成7年3月31日終了した。
3. 調査及び整理の実施にあたっては、田上信一、土井憲代、松下徹をはじめ、渥美威、油野健介、阿部聖子、飯田大樹、石川和男、岩本亮、植田哲也、上野亜紀子、氏田英利、馬原祐介、江尻美代子、大多和恵、大野良子、奥田和史、奥田邸史、小野泉、家治愛子、梶本禎之、亀田大介、川口真一、河村公美子、岸本高幸、喜多渉、久世佐紀子、蔵田弘幸、河野司明、高力佳子、才田知香子、阪井美穂、佐藤和美、下尻順子、真珠久美、高岡伸枝、高木謙次、田川康弘、田所克庸、田中仁郎、谷本典子、玉置由紀、時松恵里、徳田二美、仲内美絵、中野信孝、長谷典彦、八羽康代、平山健、藤野渉、牧浦寿江、牧野由起子、松下武嗣、松田靖、松村洋史、松本久美、松本真規子、真鍋紀美子、真鍋久美、丸谷昌史、南憲和、宮沢薫、宮下明子、宮本真治、村上佳子、森本貴子、森本めぐみ、安井健悟、安尾貴弘、山下英俊、山田恵、横井佐絵子、横井佐和子、横石孝明、吉田朋子諸君らの協力を得た。
また、広瀬和雄、森村健一、土井孝之、鈴木陽一、向井俊生、谷美光の諸氏からも有益な助言・協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆は岡田・石橋・岡・城野が行なった。執筆の分担は目次に記した。編集は仮屋・岡がおこなった。
5. 出土遺物の写真撮影は、立花正治氏の手を煩わせた。記して感謝の意を表する次第である。
6. 遺物実測は土井憲代、真珠久美、横井佐絵子、大多和恵、河村公美子らが行い、図版作成は石橋・岡・城野が行った。
7. 本調査にあたっては、写真・スライド等を作成した。広く利用されることを望むものである。

凡

例

1. 各調査区には個別の番号をつけている。番号の基本構成は「遺跡略称（記号）－年度－通し番号」である。遺跡の略称は、男里遺跡－ON、光平寺跡－KH、長山遺跡－NG、前田池遺跡－MD、幡代遺跡－HT、岡中遺跡－OK、本田池遺跡－HN、中小路西遺跡－NKW、岡田遺跡－OKD、大苗代遺跡－ONS、兎田遺跡－US、キレト遺跡－KR、海宮宮池遺跡－KG、中小路南遺跡－NKSである。調査年度をあらわす場合、元号年度は西暦年度に読み替え、上位2桁を省略して表現した。なお本報告書では報告文は遺跡毎に章だてしているため、基本的に各章中では遺跡名称を省略している。
2. 図中の方位は、各調査区位置図・地形図及び図版P.L. 1～3では真北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。ただし、NKW93－2調査区における遺構平面図は、国土座標第Ⅺ系に基づく座標北をあらわしている。
3. 本文および図版中に示したレベル高は、すべてT.P.＋値(m)である。
4. 遺構名称はアルファベットと任意の数列の組合せで表している。アルファベットはSB－建物、SD－溝、SK－土坑、SX－性格不明遺構、Pit－柱穴をそれぞれ表す。
5. 遺物実測図版では、断面の表示を便宜上、須恵器－黒塗り、土師器・陶磁器－白抜き、瓦器・瓦質土器－トーンのように塗り分けた。
6. 瓦と瓦以外の出土遺物にはそれぞれ通し番号を付した。なお、遺物実測図版および挿図と写真図版では、遺物番号は統一している。
7. 第5表とP.L. 1・2の番号は一致させた。

目 次

第1章 調査の経過	(岡田)	1
第2章 男里遺跡の調査		6
第1節 既往の調査	(城野)	6
第2節 94-1 区の調査	(城野)	8
第3節 94-2 区の調査	(石橋)	9
第4節 94-3 区の調査	(岡)	10
第5節 94-4 区の調査	(石橋)	11
第6節 93-7 区の調査	(岡)	13
第7節 93-8 区の調査	(岡)	14
第3章 光平寺跡の調査		17
第1節 既往の調査	(岡田)	17
第2節 94-1 区の調査	(石橋)	17
第3節 93-2 区の調査	(石橋)	19
第4節 93-3 区の調査	(石橋)	24
第4章 長山遺跡の調査		26
第1節 既往の調査	(城野)	26
第2節 94-1 区の調査	(城野)	27
第3節 94-2 区の調査	(石橋)	29
第5章 前田池遺跡の調査	(城野)	31
第1節 既往の調査		31
第2節 94-1 区の調査		31
第6章 幡代遺跡の調査		34
第1節 既往の調査	(城野)	34
第2節 94-2 区の調査	(城野)	35
第3節 94-3 区の調査	(岡)	39
第4節 94-4 区の調査	(岡)	40
第5節 94-5 区の調査	(石橋)	40

第7章 岡中遺跡の調査	(岡)	43
第1節 既往の調査		43
第2節 94-1区の調査		44
第3節 94-2区の調査		46
第8章 本田池遺跡の調査	(石橋)	48
第1節 既往の調査		48
第2節 94-1区の調査		49
第9章 中小路西遺跡の調査	(石橋)	51
第1節 既往の調査		51
第2節 93-2区の調査		52
第10章 岡田遺跡の調査		56
第1節 既往の調査	(城野)	56
第2節 94-1区の調査	(城野)	57
第3節 94-2区の調査	(城野)	60
第4節 94-3区の調査	(岡)	62
第5節 94-4区の調査	(城野)	63
第6節 94-5区の調査	(石橋)	64
第7節 93-3区の調査	(石橋)	65
第11章 大苗代遺跡の調査	(岡)	67
第1節 既往の調査		67
第2節 94-1区の調査		68
第12章 兎田遺跡の調査	(石橋)	70
第1節 既往の調査		70
第2節 94-1区の調査		71
第13章 まとめ	(岡田)	72
報告書抄録		巻末

挿 図 目 次

第1図	男里遺跡94-1・94-2区地形図	8
第2図	男里遺跡94-3区地形図	10
第3図	男里遺跡94-4区地形図	12
第4図	男里遺跡93-7区地形図	13
第5図	男里遺跡93-8区地形図	15
第6図	光平寺跡94-1区地形図	18
第7図	光平寺跡94-1区出土の丸瓦・平瓦	19
第8図	光平寺跡93-2・93-3区地形図	20
第9図	光平寺跡93-2区出土の平瓦・軒丸瓦	22
第10図	長山遺跡及び前田池遺跡調査区位置図	26
第11図	長山遺跡94-1・94-2区地形図	27
第12図	前田池遺跡94-1区地形図	32
第13図	幡代遺跡調査区位置図	34
第14図	幡代遺跡94-2・94-4区地形図	36
第15図	幡代遺跡94-3区地形図	39
第16図	幡代遺跡94-5区地形図	41
第17図	岡中遺跡調査区位置図	44
第18図	岡中遺跡94-1・94-2区地形図	45
第19図	岡中遺跡94-1区出土の平瓦	46
第20図	本田池遺跡調査区位置図	49
第21図	中小路西遺跡調査区位置図	51
第22図	中小路西遺跡93-2区地形図	52
第23図	中小路西遺跡93-2区出土の平瓦	55
第24図	岡田遺跡調査区位置図	56
第25図	岡田遺跡94-1・94-2・94-3・94-4・93-3区地形図	58
第26図	岡田遺跡94-2区出土の丸瓦	61
第27図	岡田遺跡94-2区採集の石器	62

第28図	岡田遺跡94－5区地形図	65
第29図	海宮宮池遺跡及び中小路南遺跡及び大苗代遺跡調査区位置図	68
第30図	大苗代遺跡94－1区地形図	69
第31図	兎田遺跡調査区位置図	70

表 目 次

第1表	発掘および試掘届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	5
第5表	文化財一覧表	75

図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡・光平寺跡・キレト遺跡調査区位置図
PL. 4	男里遺跡調査区
PL. 5	光平寺跡調査区・長山遺跡調査区①
PL. 6	長山遺跡調査区②・前田池遺跡・岡中遺跡調査区
PL. 7	本田池遺跡94－1区平面図及び断面図
PL. 8	幡代遺跡調査区・岡田遺跡調査区①
PL. 9	岡田遺跡調査区②・大苗代遺跡・兎田遺跡調査区
PL. 10	中小路西遺跡93－2区平面図及び断面図
PL. 11	各調査区出土の遺物
PL. 12	光平寺跡93－2区出土の平瓦
PL. 13	光平寺跡93－2区出土の丸瓦・道具瓦
PL. 14	男里遺跡94－1・2区

- PL. 15 男里遺跡94－3区
- PL. 16 男里遺跡94－4区①
- PL. 17 男里遺跡94－4区②
- PL. 18 男里遺跡93－8区①
- PL. 19 男里遺跡93－8区②・93－7区
- PL. 20 光平寺跡94－1区・93－2区①
- PL. 21 光平寺跡93－2区②
- PL. 22 光平寺跡93－3区
- PL. 23 長山遺跡94－1・2区
- PL. 24 前田池遺跡94－1区
- PL. 25 幡代遺跡94－2区①
- PL. 26 幡代遺跡94－2区②・94－3区
- PL. 27 幡代遺跡94－4・5区
- PL. 28 岡中遺跡94－1・2区
- PL. 29 本田池遺跡94－1区
- PL. 30 中小路西遺跡93－2区①
- PL. 31 中小路西遺跡93－2区②
- PL. 32 岡田遺跡94－1・2区
- PL. 33 岡田遺跡94－3・4区
- PL. 34 岡田遺跡94－5区・93－3区
- PL. 35 大苗代遺跡94－1区・兎田遺跡94－1区
- PL. 36 光平寺跡93－2区出土の瓦①
- PL. 37 光平寺跡93－2区出土の瓦②
- PL. 38 光平寺跡93－2区出土の瓦③
- PL. 39 光平寺跡93－2区出土の瓦④
- PL. 40 光平寺跡94－1・93－2区出土の瓦
- PL. 41 光平寺跡93－2区及び幡代遺跡94－2区及び岡中遺跡94－1区出土
の遺物
- PL. 42 長山遺跡94－1区及び中小路西遺跡93－2区出土の土器

PL. 43 中小路西遺跡93－2区出土の遺物

PL. 44 岡田遺跡94－1・2・3区出土の遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅱ

第1章 調査の経過

平成6年9月、多くの歳月を費やしついに関西国際空港が開港した。これまでの間に泉州地域では官民を問わず、空港関連とされる事業が数多く実施された。この空港効果とでもいうべき開発の急増により、埋蔵文化財の緊急発掘調査も増加の一途をたどってきた。この状況及びその成果は近年の報文に記してきたとおりである。言葉を重ねるが、近年の当地域における開発、そしてこれに伴う発掘調査は「激増」の言葉がふさわしいほどに増加・増大してきたのである。

そして空港開港を迎えた今日、当泉南市域ではなおもその「余韻」が続いている。いや、これはけして余韻ではなく序曲なのかもしれない。行政による都市基盤整備がその成果をあげつつあるなか、本格的な開発行為はこれからも増大していくのだから。

このようななか、今年度も市域において個人住宅建設等に伴う調査を多数実施した。少し以前からの傾向とも言えるが、行政の道路新設による土地買収が近年盛んにおこなわれてきたが、この近辺での調査が増大するようである。男里・幡代・岡中・岡田の各集落周辺での調査が増加していることからうかがえる。土地売却益をもって住宅新築をおこなうのか、あらたな交通の益を求めて沿道に居を構えるのかわからないが、道路買収がおこなわれた地域に個人住宅新築が集中する傾向にあるようだ。もちろん我々が看取することができるのは、遺跡内での発掘調査の数的変化とその分布だけであり、あくまで推測、いや憶測ということにしておきたい。

あらたな傾向としては、これまで調査がさほどおこなわれなかった、換言すれば個人住宅の建設さえさほどおこなわれなかった地域での調査が増えてきたことがあげられよう。大苗代・兎田等の調査例がこれにあたるが、これらの遺跡の絶対面積が小さいことももちろん勘案する必要があるが、近年のあらたな

現象と言えるのではなかろうか。新空港の効果か、当市における流入人口がわずかずつだが増加していることもあり、市内各所にて個人住宅建造が増加していることからもうなずけよう。

なお、民間・行政の各種開発行為に伴う調査については、件数・面積とも年々肥大する傾向にあることは言うまでもない。

とまれ、今年度も市域において多くの調査を実施した。我々はこの中で多くのあらたな知見を得、わずかばかりだが地域の歴史情報を明らかにすることができた。以下にその成果を報告していきたい。

第1表 平成6年度発掘及び試掘調査届出一覧表

平成7年2月28日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件 数	面 積(m ²)	件 数	面 積(m ²)	件 数	面 積(m ²)
6年・3	2	456.05	3	5,262.56	5	5,718.61
4	3	11,825.00	6	5,974.04	9	17,799.04
5	6	49,151.22	2	10,471.95	8	59,623.17
6	6	1,644.90	3	6,224.87	9	7,869.77
7	1	338.16	4	5,649.01	5	5,987.17
8	5	6,268.64	3	4,993.94	8	11,262.58
9	6	2,435.42	3	9,949.95	9	12,385.37
10	8	27,423.19	3	2,846.26	11	30,269.45
11	9	175,358.54	2	1,009.50	11	176,368.04
12	5	13,252.16	3	2,340.11	8	15,592.27
7年・1	5	1,653.10	2	11,426.10	7	13,079.20
2	7	2,010.14	5	8,374.04	12	10,384.18
合 計	63	291,816.52	39	74,522.33	102	366,338.85

第2表 発掘調査一覧表

平成7年2月28日現在

No	遺跡名	地区名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	94-1区	男里		375.75	住宅新築	6年4月	本書掲載
2	男里遺跡	94-2区	男里		193.60	住宅新築	6年12月	同上
3	男里遺跡	94-3区	男里		270.16	工場付事務所	7年1月	同上
4	男里遺跡	94-4区	男里		1,067.54	宅地造成	6年11月	同上
5	男里遺跡	94-5区	男里		110.00	水路改修	7年2月	別書掲載
6	男里遺跡	93-7区	男里		314.55	住宅新築	6年3月	本書掲載
7	男里遺跡	93-8区	男里		406.10	住宅新築	6年3月	同上
8	光平寺跡	94-1区	男里		58.10	住宅新築	6年12月	同上
9	光平寺跡	93-2区	男里		156.32	住宅新築	6年3月	同上
10	光平寺跡	93-3区	男里		167.82	住宅新築	6年3月	同上
11	キレット遺跡	94-1区	男里		414.00	専用住宅	6年12月	トレンチ3カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。(PL.3)
12	天神ノ森遺跡	94-1区	男里		100.27	分譲住宅	7年2月	現在整理中
13	長山遺跡	94-1区	馬場		1,767.00	宅地造成	6年5月	本書掲載
14	長山遺跡	94-2区	馬場		700.00	宅地造成	7年1月	同上
15	前田池遺跡	94-1区	馬場		393.83	住宅新築	7年1月	同上
16	幡代遺跡	94-1区	幡代		58.00	道路改修	6年5～6月	別書掲載
17	幡代遺跡	94-2区	幡代		338.16	住宅新築	7年1月	本書掲載
18	幡代遺跡	94-3区	幡代		756.87	農業用倉庫	6年10月	同上
19	幡代遺跡	94-4区	幡代		1,043.24	住宅新築	6年11月	同上
20	幡代遺跡	94-5区	幡代		252.00	事務所	6年10月	同上
21	岡中遺跡	94-1区	信達岡中		109.88	住宅新築	6年10月	同上
22	岡中遺跡	94-2区	信達岡中		177.39	住宅新築	6年10月	同上
23	本田池遺跡	94-1区	樽井		10,000.00	公園造成	6年5～6月	同上
24	上代石塚遺跡	94-1区	信達牧野		3,882.57	大規模店舗	7年2月	別書掲載
25	海宮宮池遺跡	94-1区	信達大苗代		3,931.61	マンション建設	6年12月	トレンチ9カ所設定したが遺構・遺物は検出されなかった。(第29図)
26	中小路西遺跡	93-2区	中小路		10,617.00	宅地造成	6年1～2月	本書掲載
27	中小路南遺跡	93-1区	中小路		7,577.20	共同住宅	6年8～10月	別書掲載
28	岡田遺跡	94-1区	岡田		108.31	住宅新築	6年5月	本書掲載
29	岡田遺跡	94-2区	岡田		105.09	住宅新築	6年5月	同上
30	岡田遺跡	94-3区	岡田		100.77	住宅新築	6年10月	同上
31	岡田遺跡	94-4区	岡田		277.14	住宅新築	6年7月	同上
32	岡田遺跡	94-5区	岡田		406.98	住宅新築	6年8月	同上
33	岡田遺跡	93-3区	岡田		110.97	店舗付住宅	6年2月	同上
34	氏の松遺跡	93-1区	岡田		11,228.00	道路新設	5年11～6年3月	別書掲載
35	大苗代遺跡	94-1区	信達大苗代		482.83	住宅新築	6年6月	本書掲載
36	兎田遺跡	94-1区	兎田		223.52	住宅新築	6年12月	同上

第3表 試掘調査一覧表

平成7年2月28日現在

No	遺跡名	位 置	申 請 者	面積 (㎡)	用 途	調査年月日	備 考
1	範囲外	信達大苗代		546.91	分譲住宅	6年3月16日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	男里		496.44	共同住宅	6年4月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	虎田		2,709.49	作業場	6年4月8日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	樽井		2,310.13	宅地造成	6年4月19日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	信達市場		565.27	共同住宅	6年4月25日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	馬場		7,538.01	病院増築	6年5月17日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	男里		645.87	共同住宅	6年5月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	北野		1,092.75	給油取扱所	6年5月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	樽井		478.39	事務所	6年6月2日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	樽井		2,933.94	宅地造成及び分譲住宅	6年6月7日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	新家		2,901.65	宅地造成	6年6月16日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達市場		2,947.77	分譲住宅	6年6月19日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	新家		1,736.78	共同住宅	6年7月15日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	樽井		375.45	分譲住宅	6年7月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	樽井		413.53	分譲住宅	6年7月26日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	男里		1,477.5	宅地造成	6年8月1日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	樽井		1,161.18	分譲住宅	6年8月17日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	新家		3,000.00	公園整備	6年8月22日～24日	トレンチ2カ所設定したが、明確な遺構は確認されなかった。
19	範囲外	信達牧野		1,132.86	宅地造成	6年8月29日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	新家		2,699.90	分譲住宅	6年9月12日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	樽井		470.97	店舗新築	6年9月19日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範囲外	樽井		8,613.00	住宅建替	6年9月30日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
23	範囲外	信達市場		1,907.20	共同住宅	6年10月14日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
24	範囲外	新家		443.12	宅地造成	6年11月1日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
25	範囲外	北野 岡田		492.04	道路築造給排水管埋設	6年12月12日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
26	範囲外	樽井		865.98	共同住宅	6年12月13日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
27	範囲外	樽井		330.58	倉庫付事務所	6年12月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
28	範囲外	樽井		517.46	道路築造給排水管埋設	6年12月26日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
29	範囲外	新家		2,055.49	分譲住宅	7年1月27日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
30	範囲外	中小路		646.31	寺院建築	7年2月8日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
31	範囲外	樽井		496.00	共同住宅	7年2月17日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
32	範囲外	馬場		617.71	共同住宅	7年2月22日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
33	範囲外	信達市場		9,370.61	共同住宅	7年2月27日	トレンチ7カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成7年2月28日現在

No	遺跡名	位置	申請者	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	岡田西遺跡 氏の松遺跡	岡田		200.81	電話地下線	6年6月6日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	男里遺跡	馬場		330.03	個人住宅	6年6月7日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	本田池遺跡	樽井		620.16	下水道	6年7月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男里遺跡	幡代～男里		48,000.00	道路	6年8月1日 ～9月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	フキアゲ山東遺跡	栗田		166.00	道路	6年8月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	フキアゲ山東遺跡	栗田		36.40	倉庫	6年9月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	フキアゲ山東遺跡	栗田		62.37	デビッコホーム	6年9月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	氏の松遺跡	岡田		182.22	下水道	6年9月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	根来街道	信達童子畑		1,224.00	ガス管埋設	6年10月5日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	高田山古墳群	幡代		436.65	分譲住宅	6年10月5日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	高田山古墳群	幡代		340.00	分譲住宅	6年10月12日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	戎畑遺跡	信達市場		58.92	下水道	6年10月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	戎畑遺跡 男里遺跡	男里		937.40	下水道	6年11月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	男里遺跡	馬場		50.00	道路	6年11月24日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	岡田遺跡	岡田		300.00	道路	6年12月1日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	高田山古墳群	幡代		205.38	個人住宅	6年12月7日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	増田池	信達岡中		400.00	堤体工 余水吐工	6年12月21日	遺構・遺物は確認されなかった。
18	芦谷池	信達市場		406.00	堤体工 取水設備工	6年12月27日	遺構・遺物は確認されなかった。
19	本田池	樽井		2,700.00	ため池改修	7年1月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
20	本田池	樽井		10,000.00	堤体及び導水路新設	7年1月16日	遺構・遺物は確認されなかった。
21	根来街道	信達六尾		1,000.00	道路	7年1月23日	遺構・遺物は確認されなかった。
22	牧野新池	信達牧野		80.00	堤体工	7年1月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
23	男里遺跡	男里		830.71	下水道	7年1月31日	遺構・遺物は確認されなかった。
24	岡垣池	信達六尾		344.00	堤体工	7年2月8日	遺構・遺物は確認されなかった。
25	高田山古墳群	幡代		433.67	個人住宅	7年2月10日	遺構・遺物は確認されなかった。
26	高田山古墳群	幡代		1.10	ガス管埋設	7年2月22日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1～3）

市域の北西縁で阪南市との境を流れる男里川、その東岸に男里遺跡は立地する。その範囲は東西に約1.3km、南北に約1.5kmを測り、市域でも最大の規模を持つものとなっている。現行の行政区画でいえば男里と馬場、そして幡代の一部をその範囲におさめるほどである。

地形分類的には遺跡の中央を男里川の旧河道が通り、旧河道を中心にして氾濫原が大きく広がっている。遺跡の東側では沖積段丘面がよく発達しており、また西側には自然堤防がある。現在、沖積段丘面や自然堤防上には集落が営まれており、残る氾濫原の大半が耕作地として活用されている。

当地が遺跡として知られるようになるのは古く昭和初期のことで、弥生土器などの遺物が偶然発見され、報告されたことに始まる^①。その後も地元研究者の積極的な踏査研究によって多くの遺物が採集され、遺跡の範囲が確定されていった。その後、1975年以降には行政機関による発掘調査が開始され、遺跡の範囲や内容は一層明確になっていくこととなった。こうした発掘調査は小規模なものではあるが、現在までに相当数の地点で調査が実施されており、多くのデータの蓄積が進んでいる。また近年では、遺跡を南北に縦貫する形で大規模な道路が敷設され、道路建設に先立って行われている発掘調査では非常に多くの情報が得られている。今日までにこれらの調査によって知り得た知見を述べていきたい。

現在、人類の足跡が最初に認められるのは縄文時代晩期のことである。遺跡の北西部で検出された遺構に伴い多くの土器が出土した。他に当該期では遺跡の中央付近からも若干の遺物の検出があるが、いずれも単発的な感が強く、有機的に歴史環境を復原するには至っていない。弥生時代においても前期では、前代と状況は変わらず、遺物が散見されるにとどまる。続く弥生時代中期は男里遺跡が広く知られるきっかけとなった時代で、遺跡の中央にある双子池の南側の水田からは多くの土器や石器などが採集されている^②。また発掘調査にお

いても複数の竪穴住居や掘立柱建物^③、木棺墓群^④など非常に数多くの遺構が検出されており、双子池の南西側を中心として地域の拠点的な集落の存在が確実視されている。

弥生時代後期から古墳時代に属する遺構や遺物が検出された例はあまり多くない。双子池の周辺では弥生時代終末期の他、6世紀～7世紀代の遺物が採集されている。また遺跡の北西縁辺部においては古墳時代後期の水路^⑤や7世紀代の小石室^⑥が検出されており、双子池の周辺以外にも若干の活動範囲の拡大を示している。

古代では双子池の西側に隣接した地点で奈良時代と平安時代の掘立柱建物^⑦がそれぞれ検出され、集落の存在をうかがわせる。近年の北縁部における調査^⑧では平安時代の複数の掘立柱建物のほか、建物に隣接する遺物廃棄土坑が検出されている。また平安時代末期には遺跡の北西部に光平寺が創建される。

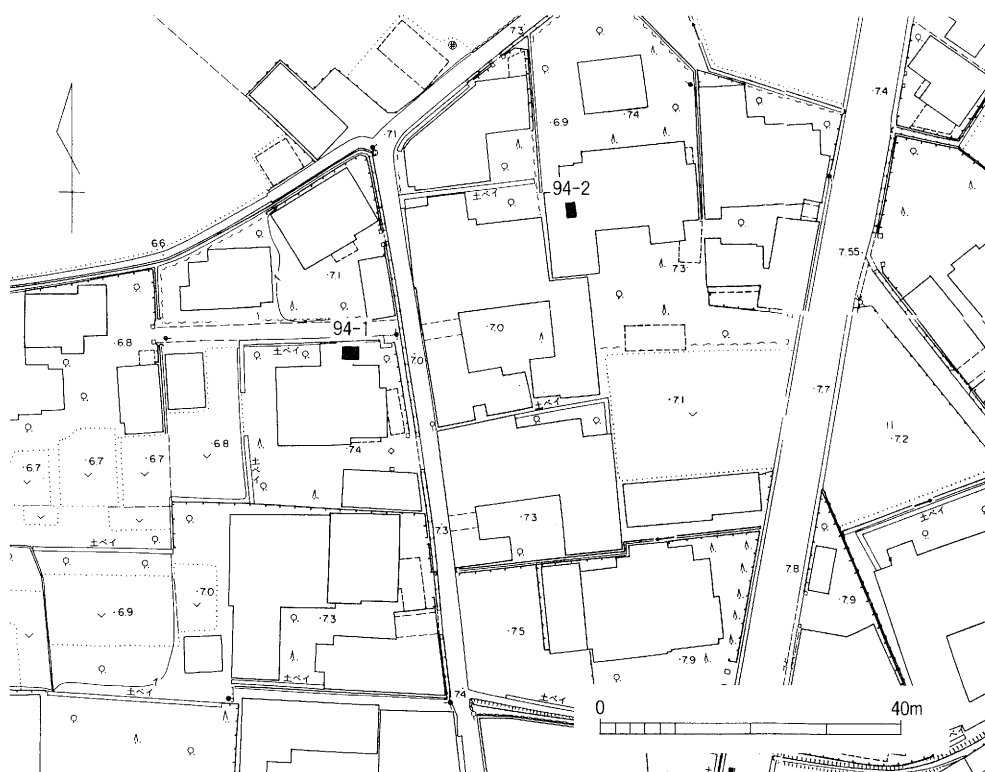
中世以降では、現在の男里集落付近に生活の中心が移ってくる様であり、北西部の調査では鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。他にも先に述べた北縁部の調査で検出された平安時代の集落域は中世以降には耕作地となることが確認されており、土地利用の定着化を示している。現在も見られる様な形で集落域と耕作域が明確に分れる様相は、中世以降に整えられたものと考えられよう。

以上、手短に男里遺跡の概要を述べてきた。今日までに少しずつ積み上げられたデータによって、遺跡が包含する歴史情報の概略は述べることができるようになった。しかし、各時代の細部にまで言及することは難しく、想像の域を出ないものも数多くある。地域の歴史を更に解明していくためには、今後も引き続き行われるであろう発掘調査の結果を有機的に結合していかなければならず、またそうすることによって男里遺跡を含めた周辺地域の歴史がより一層鮮やかに浮かび上がるものと期待する。

第2節 94-1区の調査

1. 位置 (P L. 3、第1図)

調査区は遺跡の北西部に位置しており、府道堺阪南線の「男里」交差点を北北西へ約220mほど入った地点である。地形分類上では男里川の東岸に発達した自然堤防上に立地している事になる。近隣の調査では南へ50mの地点で中世の遺物包含層と土坑やピットなどの遺構が確認されている。



第1図 男里遺跡94-1・94-2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・14)

調査では、第Ⅰ層・盛土(約30cm)を除去すると、第Ⅱ層・暗灰色土(約15cm)、第Ⅲ層・黄褐色土(約5cm)がある。第Ⅱ層と第Ⅲ層は旧耕作土とそれに伴う床土層であると考えられる。その下には第Ⅳ層・黒褐色土のブロックを含む褐色土(約18cm)があり、第Ⅴ層・黒褐色土(約14cm)第Ⅵ層・黒褐色混

じり褐色土と続く。第Ⅵ層上面で遺構が検出された。また、第Ⅵ層に若干の遺物が混在していたので、40cmほど掘り下げたが変化は認められなかった。地山は検出されなかった。第Ⅳ層から土師器が出土し、また第Ⅴ層・第Ⅵ層からは須恵器などの遺物が少量出土した。しかし、いずれも激しく摩滅しており、また細片のため図化できなかった。

3. 遺構（P L. 4・14）

第Ⅵ層の上面でピット（Pit 1・2）を検出した。

Pit 1はトレンチの北端で検出されたピットで、一部が調査区外に広がる。ほぼ正円形の掘方を持つものと考えられ、長径は約40cmを測る。最深部では約20cmの深さがあり、中心部に直径約10cmの柱痕跡が認められる。Pit 2はトレンチのほぼ中央、Pit 1の南側に隣接して検出されたピットである。南西方向に頂点が向いたいびつな楕円形の掘方で、長径は約38cmを測る。最深部では約12cmの深さがあり、掘方の東隅部に直径約18cmの柱痕跡が認められる。埋土はともに暗灰褐色土であった。Pit 1の掘方の埋土より須恵器が、またPit 2の柱痕跡の埋土より土師器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

検出されたピットは掘立柱建物を構成する可能性もあるが、今回の調査では建物と呼べるだけの確証は得られなかった。また、隣接する2つのピットは掘方の埋土がほぼ同一であり、出土する遺物からも明確な時期差は認められず共存していた可能性もある。

第3節 94-2区の調査

1. 位置（P L. 3、第1図）

調査区は、現在の男里集落の北東部分にあたる「男里北」交差点より北へ約150mの地点である。地形的には、男里川の氾濫原に立地するものと考えられるため、これまでの付近の調査では礫層が検出される場合と、比較的安定した黄褐色系のシルト層が検出される場合に分けられる。そしてシルト質の面が検出されると、遺構が遺存している場合が多いことが明らかになってきている。

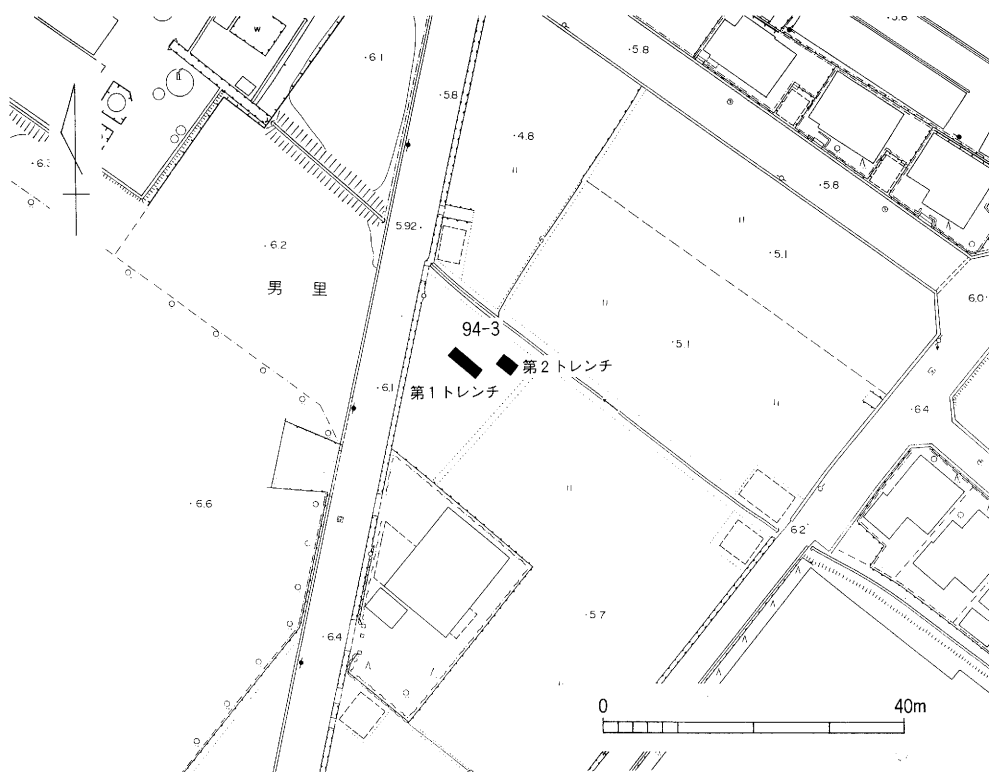
2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・14）

盛土や現代の滋味土、床土を約50cm除去すると、灰黄色や黄灰色の旧耕作土と考えられる層が約20cm程介在する。これらの下層には、灰黄褐色のマンガンを多く含んだシルト層が約4cm程みられ、暗灰黄色のシルト層に至る。この層は、灰色のシルトを部分的に含んでいるため、地山かどうかの確認のため掘り下げてみたが、下層ではやや黄色が強くなるだけで変化することなく、地山と判断した。遺物は旧耕作土中や鋤溝から、中世の所産のものがごく僅かに出土しているが、図化できるものはなかった。

第4節 94-3区の調査

1. 位置（P L. 3、第2図）

調査区は遺跡内において最北端に位置しており、地形分類上では男里川の氾



第2図 男里遺跡94-3区地形図

濫原上に立地している。これまでの調査例では、当調査区の東側に隣接する地点において弥生～中世に至る遺物包含層が確認されている⁹⁾。トレンチは2カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・15)

層序は両トレンチ共にほぼ共通している。第Ⅰ層の現代耕作土(約10cm)の下は第Ⅱ層・茶色混じり黄褐色土(約10cm)、第Ⅲ層・灰色混じり黄褐色土(30cm)、第Ⅳ層・褐色混じり灰色土(約30cm)、第Ⅴ層・灰色粘質土(約10cm)と続く。第Ⅵ層は地山の黄褐色粘土である。両トレンチにおける層序の違いは第2トレンチにおいては第Ⅱ層が確認されず、また地山直上に暗黄褐色土(約10cm)が看取される点が異なる。遺物・遺構は共に認められなかった。

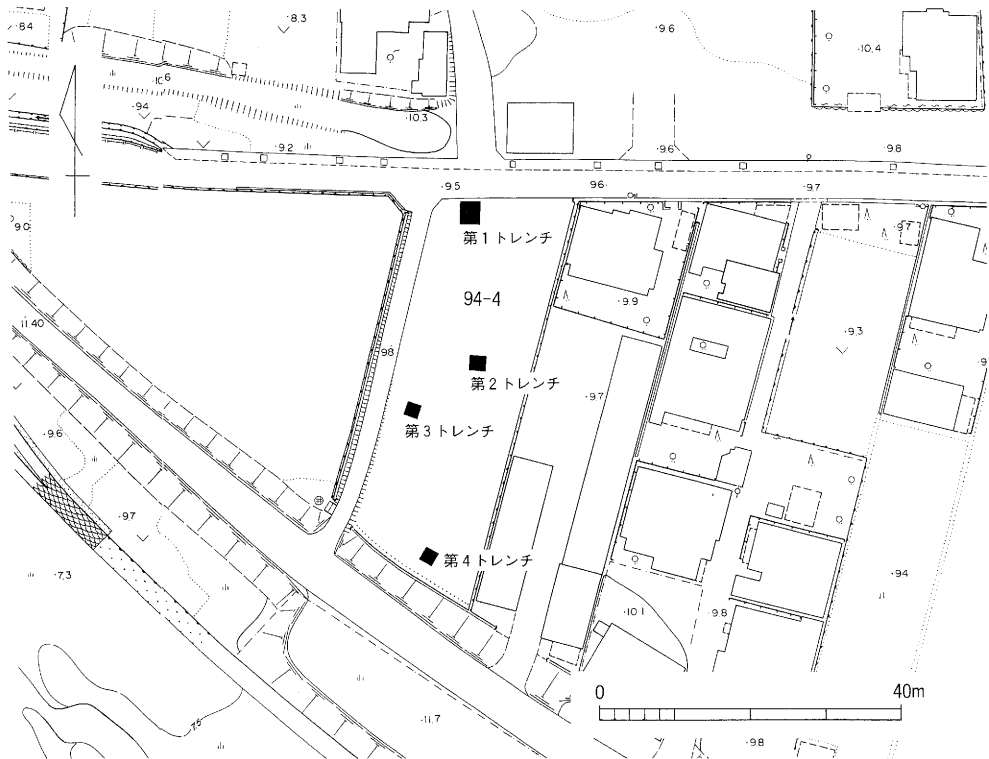
第5節 94-4区の調査

1. 位置 (P L. 3、第3図)

調査区は、遺跡の西端に位置する。南西側約50mで、阪南市との市境である男里川と金熊寺川が分離する地点である。また、男里遺跡内にある中世寺院光平寺跡の南端にも道をはさんで隣接している。ここより、北側約50mの光平寺跡93-2区では、寺に関連した大量の瓦と土坑が確認されている。地形的には、男里川の氾濫原もしくは、自然堤防上に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・16・17)

トレンチは、北側から南側に向かって4カ所設定した。第1トレンチでは、現代の滋味土を除去すると褐色系のシルト層が約70cmにわたって認められる。粘性がほとんどなく砂質である。また、水平堆積を示さず層が入り組んでいる。この下層には明黄褐色の礫層が約30cm堆積し、かなり径が大きく密度の高い黄灰色の礫層に至る。第2トレンチでは、滋味土・床土の下層には、褐色粗砂が約30cm、黄褐色のシルトが約20cmあり。灰褐色の礫層に至る。第3トレンチでは、第2トレンチとほぼ同じ層位を示し、滋味土・床土の下層は、褐色粗砂



第3図 男里遺跡94-4区地形図

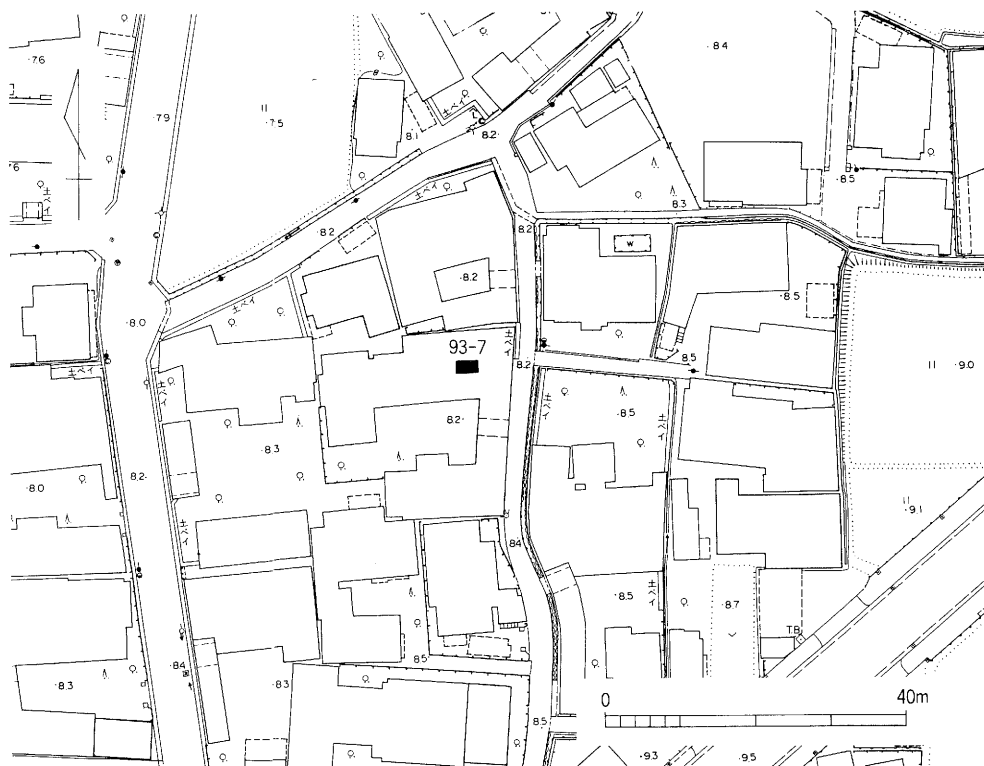
(約20cm)、黄橙色シルト(約10cm)、灰黄色シルト(約20cm)が確認され、暗褐色の礫層に至る。第4トレンチでは、他のトレンチとは様相が異なり、粗砂層や礫層が約20cmの単位で数層堆積し、約70cm程で暗褐色の礫層に至る。

いずれのトレンチも、粗砂やシルト層が目まぐるしく変わる層位を示すことから男里川の氾濫の作用によるものであることは間違いない。また、第1トレンチがシルト層が多く見られるのに対し、第4トレンチになるとほとんどが砂層になるのは、第1トレンチから第4トレンチに向かうにつれて川へ近づいているということからも理解できるだろう。どのトレンチも最終面は、礫層が検出され、これより下層は、ほとんど変化することなく礫層が続くことが明らかになっている。また、遺構・遺物は確認されなかったが、最終面の礫層より上層は、かなり新しい層のように見受けられる。

第6節 93-7区の調査

1. 位置 (P L. 3、第4図)

調査区は府道堺阪南線から北側約50m、現在の男里集落の東端に位置する。地形分類上では氾濫原に立地している。当調査地周辺は遺跡内において調査例が少ない地域に相当し、資料の増加が期待されている地点である。トレンチは1カ所設定した。



第4図 男里遺跡93-7区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4・19)

層序は、第Ⅰ層・現表土(約30cm)、第Ⅱ層・暗灰色土(約10cm)、第Ⅲ層・暗茶褐色混じり灰色土(約30cm)が確認される。第Ⅳ層の灰褐色土(約20cm)はトレンチの西部のみ堆積し、トレンチの大部分では第Ⅲ層直下に第Ⅴ層・茶褐色混じり黄褐色土の地山に至る。遺構は第Ⅴ層の地山面で検出した。また、

トレンチの東部では攪乱が地山面まで及んでいたものの幸いにも遺構は良好に遺存していた。

3. 遺構（P L. 4・19）

検出した遺構はピット3カ所（Pit 1～3）、土坑（S K01）1基である。

Pit 1はトレンチ外に広がるためその全形は知り得ないが、長径50cm以上、短径50cmを測り、おそらく楕円形になるものと考えられる。柱痕跡は径約20cmで深さは30cmを測る。埋土は掘方が暗茶褐色混じり灰色土、柱痕跡が灰褐色土である。遺物は柱痕跡から土師器の細片が少量出土した。Pit 2は径20cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。Pit 3は長径40cm、短径20cmの楕円形を呈する。深さは約20cmを測る。埋土はともに暗茶褐色混じり灰色土で、遺物は土師器の細片が出土している。

S K01は長径1m、短径50cmの楕円形を呈し、西部分はPit 3によって切られている。埋土は各Pitと同じく暗茶褐色混じり灰色土であるが、土師器の細片が密に混じる点が異なる。深さは5cm程度で断面は皿状を呈する。

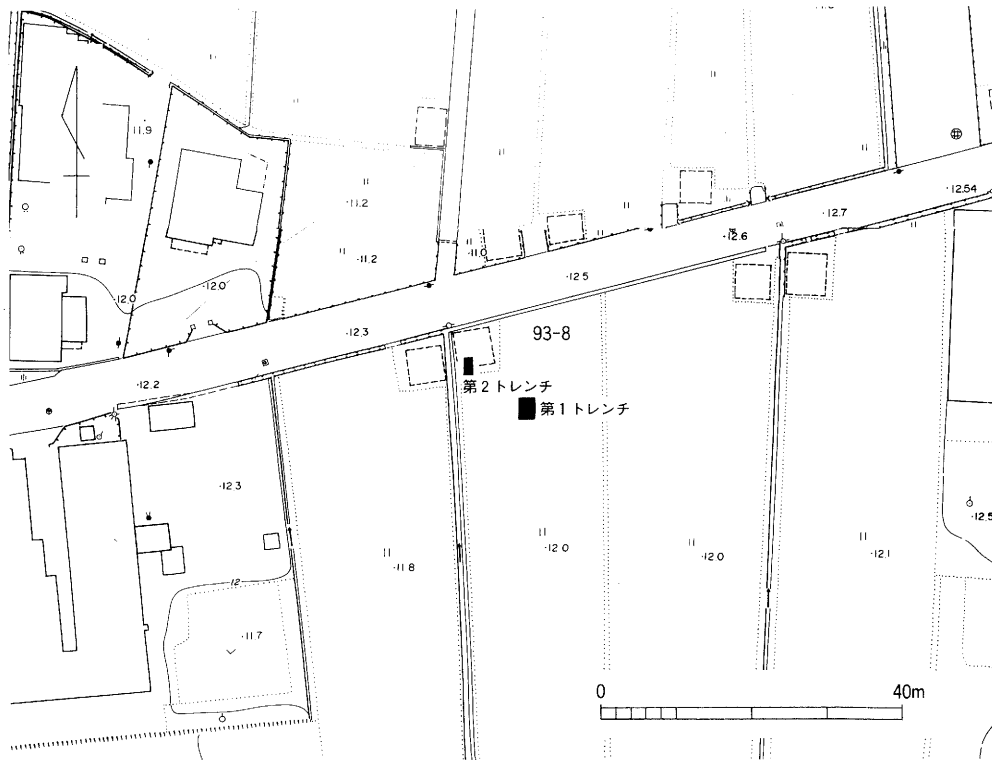
第7節 93－8区の調査

1. 位置（P L. 3、第5図）

調査区は双子池の上池東側に位置している。当池を挟んで西側では奈良時代の掘立柱建物が検出されており^⑩、双子池周辺の遺構分布範囲を知る上で新たな資料の獲得が期待された。トレンチは休耕田に2カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4・18・19）

基本的な層位は第1トレンチ・第2トレンチともにほぼ同じで、第Ⅰ層・耕作土（約20cm）、第Ⅱ層・灰色混じり黄褐色土（約10cm）が堆積する。第Ⅲ層は褐色混じり灰色土であるが、褐色の濃淡によって2層に細分される。上層の第Ⅲa層（約10cm）に比べて下層の第Ⅲb層（約15cm）がやや褐色が濃い。第Ⅳ層はマンガン混じり褐色土（約10cm）、第Ⅴ層・礫及びマンガン混じり褐色



第5図 男里遺跡93-8区地形図

土である。第Ⅴ層はT.P. +8.2m付近まで掘削した結果、変化があらわれなかったが、土師器の細片を極少量ではあるが含んでいることから地山とは考えられない。当調査区が旧男里川の氾濫原上に位置することを示唆するものであろう。

遺物は第Ⅲb層から中世須恵器が、第Ⅳ層から土師器が出土したがいずれも細片のため図示できなかった。

3. 遺構 (P.L. 4・18)

第1トレンチの第Ⅲa層上面で耕作痕を3条検出した。幅は約20cm、深さ約3cmを測り、ほぼ南北方向に伸びる。埋土は灰色土である。遺物は出土しなかったが、中世から近世にかけて形成されたものと考えられる。

- 註 ① 藤岡謙二郎『泉南郡雄信達村弥生遺跡』大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第12輯（1932）
- ② 泉南市史編纂委員会『泉南市史 史料編』（1982）
- ③ 1993年度（財）大阪府埋蔵文化財協会による発掘調査。
- ④ 1983年度 大阪府教育委員会による発掘調査。
- ⑤ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』（1993）
- ⑥ 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）
- ⑦ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
- ⑧（財）大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1994）
- ⑨ 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）
- ⑩ 註⑦と同じ。

第3章 光平寺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1～3）

蛇行しながら市域西部を貫流する金熊寺川は、その下流で菟砥川（おおむね阪南市域を流れる）と合流し川幅を拡げる。ここから河川の名称が変わり、大阪湾までの約2 kmが男里川と呼ばれている。光平寺跡はちょうどこの河川合流地の右岸に位置し、地形分類的にはこれらが形成した自然堤防上に占地していることとなる。

当地の調査には、市域の発掘調査の中では比較的古い昭和52年に大阪府教育委員会がおこなったものがある。この調査では平安時代後期の所産となる瓦群が検出されている。しかし、絶対面積が小さいせいにかこれまでの間、開発の波にあらわれず調査もほとんどおこなわれなかった。それゆえに中世寺院遺跡の実態解明はなされぬまま近年に至っている。あまりにもデータの蓄積が少なく、推定されている寺域の確認もままならぬのが現在の状況である。

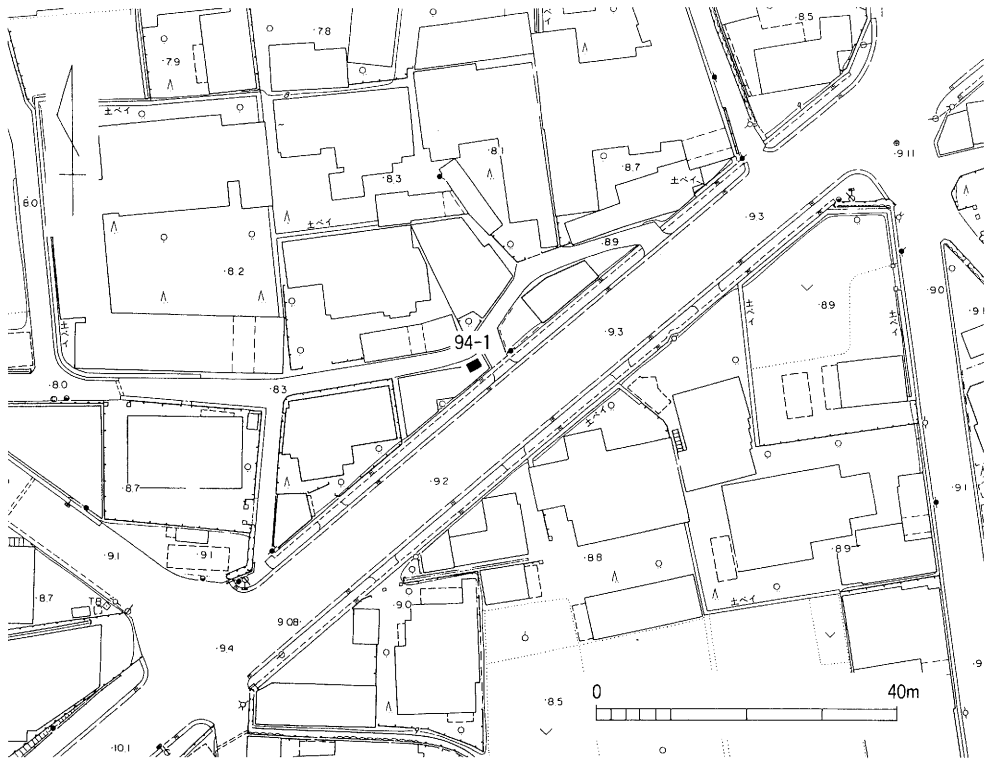
しかし、昨年度には遺跡内北部で調査がおこなわれ、久方ぶりにあらたな知見を得た。光平寺の初源にさかのぼることはできないものの、中世の所産となる土坑を確認することができたのだ。これについては昨年度の報文にあらわしたとおりである。

このように光平寺跡ではわずかずつではあるが、その内容も明らかになりつつある。今後の調査の増加に期待したい。

第2節 94-1区の調査

1. 位置（P L. 3、第6図）

調査区は府道堺阪南線に面し、男里交差点から和歌山方面へ約50mである。道をはさんだ南側約20mでは、安定したシルト面と土坑が検出されている。遺跡内での位置としては、当時の光平寺の伽藍が推定される部分のやや北側にあたる。地形的には、男里川の氾濫原または自然堤防上に立地すると考えられる。



第6図 光平寺跡94-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 5・20）

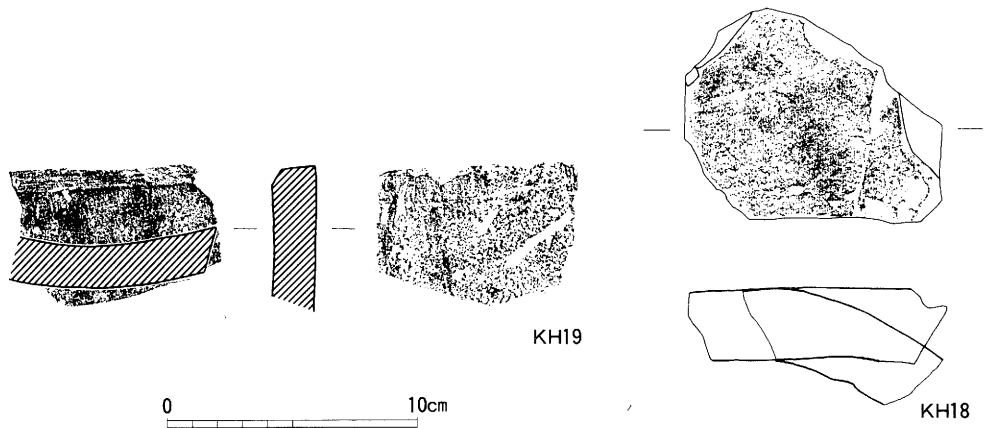
現代の表土を約20cm除去すると、褐色の礫を含んだシルト層と礫層がそれぞれ15cm程認められる。いずれも近現代の遺物を含んでおり、旧建物の盛土であろう。これらを掘削すると黒褐色のシルト層が約30cmにわたって確認された。焼土や炭化物を大量に含み、それらはブロック状をなしている。また焼土塊は、スサを多く含み赤色を呈し、すべて酸化焼成の土色である。この層もある時期の整地層と考えてよいだろう。この下層には、氾濫原になると思われる暗褐色の砂礫層になり、安定したシルトの面は確認できず、遺構は確認することはできなかった。

遺物は、黒褐色シルト層より中世後半以降の瓦、須恵器などが出土している。このことから、この時期以降に付近でかなり大規模な火災などが起き、その後これらの廃材を含んだ土を整地したと考えることができるだろう。また、地山が砂礫層であったということは、ここには光平寺の伽藍は及んでいなかったと

考えてよいだろう。

3. 遺物（P L. 11・40、第7図）

遺物は、すべて黒褐色シルトからの出土である。18は、丸瓦である。凸面はナデ、凹面には糸切り痕が明瞭に認められる。二次焼成を受けていると考えられ、橙色を呈している。19は、平瓦である。凹・凸面ともハナレズナが認められる。端縁の凹面部分には、ヘラケズリを施し、面取りを行っている。2は、須恵器の甕である。大きく外反する口縁部で、端部をやや垂下させる。二次焼成を受けており、赤灰色を呈する。



第7図 光平寺跡94-1区出土の丸瓦・平瓦

第3節 93-2区の調査

1. 位置（P L. 3、第8図）

調査区は、現在の光平寺の敷地の南側すぐに隣接しており、中世の時期の光平寺の伽藍のほぼ中心と推定してもよいだろう。地形的には、男里川の自然堤防上に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 5・20・21）

盛土及び滋味土を約1m除去すると、黄橙色の床土が約10cm程認められる。



第 8 図 光平寺跡93- 2 ・ 93- 3 区地形図

この下層には、黄褐色の安定したシルトの面が確認された。この層は部分的にはシルトではなく微砂の部分もあり、男里川の氾濫による水性の堆積と考えてよいだろう。遺構は、上面の床土から切り込む遺構と、この黄褐色シルト層からの 2 面が確認された。遺物は、遺構から大量の瓦などが出土している。

3. 遺構 (P L. 5・20・21)

Pit 1 は、S K01の埋土に切り込む遺構である。径約50cm、深さ約17cmを測り、埋土は灰黄褐色の砂質シルトである。遺物は、近世の染付 (1)、瓦 (20)、鍬先と考えられる鉄製品や、腐食のため判読不可能な貨銭 2 枚など、比較的完形に近い形で出土している。これらはいずれも意図的な埋納と考えられることから、地鎮のような性格を持ったピットの可能性がある。

S K01は、黄褐色シルト層より切り込む大型の土坑である。平面形は、トレンチ南側で回り込み、北側へ大きく開いて調査区外へ伸びる。断面形は、ほぼ

まっすぐに落ち込む。検出長は2 m、最深部では約46cmを測る。上面は焼土や炭等がびっしりと詰まった状態で検出され、このなかに瓦も大量に混じっていた。下層になるにつれて、焼土はかたまりとなって出土するようになる。焼土は、スサを大量に含んだもので、赤褐色の酸化したものもあるが、灰色を呈し、還元または半還元されているものも多くあった。遺構の底面付近では、焼土塊が部分的にへばりつくようなところも認められる。この焼土塊は、北側の調査区外へ伸びる部分に向かう程多く出土している。

このS K01から出土している焼土塊は、窯体であるといってもまったく問題のないものである。また、出土した瓦は、焼き歪みや火膨れしたものや、窯体が還元された状態で瓦に付着したものも多く認められ、これらは明らかに焼成段階での不良品である。そのためこの土坑を、かなり損なわれているものの瓦窯であるという積極的な評価を与えることも可能である。

一方、焼土塊が還元・半還元・酸化などの層位だったものは、まるで確認されず、遺構の底面や壁面には加工を施した痕跡が確認できなかったこと、さらに当該期の瓦窯の構造は不明な部分が多いということも瓦窯の可能性を低くさせる要因ともなることが指摘できる。

4. 遺物（P L. 11～13・35～41、第9図）

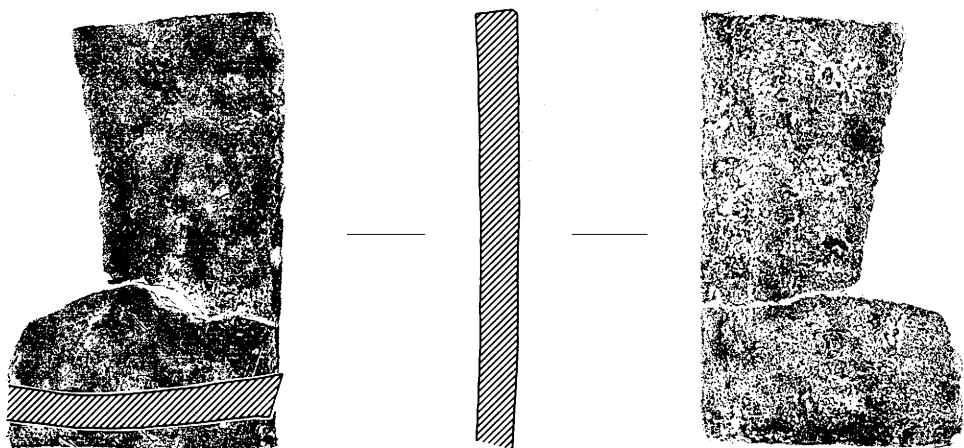
遺物は、Pit 1 から出土したものと、S K01より出土したものがある。

以下は、Pit 1 の出土である。1 は、ほぼ完形で出土した染付の椀である。内面には重ね焼きの痕跡が認められる。波佐見焼系と考えられる。20は平瓦である。両面ともほとんど平坦で側縁、端縁ともに面取りが鋭くなされる。

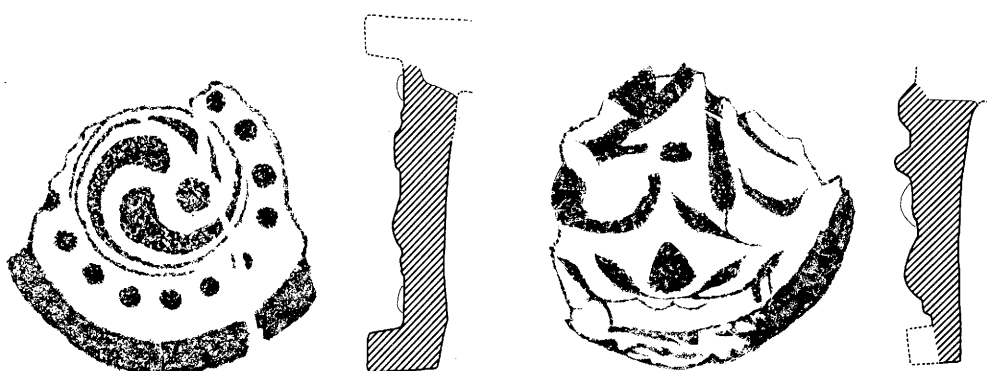
S K01からは、コンテナ約3箱分の瓦と焼土塊などが出土した。出土した瓦は、軒丸瓦・平瓦・丸瓦・雁振瓦などがある。また、軒平瓦はまったく出土していない。

21と22は、軒丸瓦である。

21は、梵字文を持つ軒丸瓦である。外区、内区の区別をなさず、大きく梵字があしらわれる。文字は上部を欠損しているが、「阿克」と判読してよいだろう。この梵字の下には、蓮台が配置され、どちらも非常に肉厚である。瓦当断

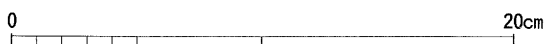


KH20



KH22

KH21



第9図 光平寺跡93-2区出土の平瓦・軒丸瓦

面には、粘土の充填痕が認められる。焼成は比較的良好であるが、摩滅が著しい。

22は、左回りの巴文である。巴の先端はわずかに尖り、尾部が大きく伸びて圏線をなす。外区には珠文がめぐる。巴・珠文の肉は薄く、瓦当断面には粘土の充填痕が認められる。焼成は軟質で、摩滅が著しい。

平瓦は先述のとおり、火膨れして歪みのあるものや窯体とおぼしきものが付

着したものなどが数多く出土している。凹凸面の調整や焼成の違いでいくつか分類が可能である。

1は、凸面に並行の粗いタタキ目を有し、凹面は糸切り痕がわずかに認められるもので、この1点だけの出土である。端縁凹面側には、幅約2cmのヘラケズリを施し、面取りを行う。焼成は比較的良好で、砂粒を多く含んでいる。

(A型式)

2は、凹面に糸切りの後、布目痕が認められるものである。また、布目痕の上には指頭痕が多数みられる。凸面は、ナデ調整で、ハナレズナがわずかに認められる。端縁凹面側には約1cmのヘラケズリの面取りが施される。焼成は軟質で、砂粒はほとんど含まない。(B型式)

4は、凹面に糸切り痕のみと、凸面にはナデ調整で、ハナレズナが認められ、焼成は硬質のものである。全体に焼き歪みがあり、凹凸両面に窯体と考えられるスサの入った粘土が還元され、瓦本体と同じ硬質の状態が付着している。

(C型式)

3・5～9は、凹凸面ともナデ調整を施すものである。(D型式)

これらもさらに分類が可能である。端縁凹面側をヘラケズリによって面取りを行い焼成が硬質のもの(3)と軟質のもの(5)がある。これらのヘラケズリの範囲は、3は約2.5cm、5は約1.5cmを測る。さらにヘラケズリによる面取りを行わないで、焼成が硬質のもの(6・7)と軟質のもの(8・9)などがあげられる。

このうち硬質系の7は、焼き歪みが著しくひび割れをおこしている。また、同じ硬質でも、6は7よりぶ厚いものである。同様に、軟質系のものでは8と9でかなり厚さが異なる。他方、8は、凸面にスサの入った粘土が付着するが、4のそれとは異なり酸化焰火焼成のものである。

丸瓦は、窯体が付着しているものは確認されなかった。いずれも半裁した円筒形を呈し、玉縁を有するものである。側面側の端部には幅の広いヘラケズリを施し、側縁部分にも同様にヘラケズリによって面取りを行っている。これらはさらに凹面の調整と玉縁の形態から3種類に分類が可能である。

10～12は、凹面に糸切り痕を有するものである。これらは、玉縁の端部が斜

め下方にまっすぐ伸びる型式のものばかりであった。凸面の調整はいずれも不明である。焼成は、いずれも軟質で、胎土も粗いものばかりである。（A型式）

13・14は、凹面に布目痕を有するものである。またこれらはすべて玉縁の端部がやや丸みを帯び、凹面側にわずかに垂下する型式のものである。いずれも焼成は良好なものばかりで硬質である。（B型式）

15は、内面に糸切り痕と布目痕の両方を有するものである。玉縁部分が遺存したものは出土しなかったため玉縁の形態は不明だが、焼成は硬質で、胎土とともにB型式と相似する。（C型式）

16・17は、調整は、平瓦のD型式とほとんど同じであるが、側縁部分の形態がまったく異なり、雁振瓦と考えられる。焼成は硬質で、胎土はほとんど砂粒を含まない。

第4節 93－3区の調査

1. 位置（P L. 3、第8図）

93－2区の東側約10mに位置する調査区である。同様に、現在の光平寺の敷地の南に隣接する。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 5・22）

層位的には、93－2区とさほど離れていないにもかかわらずやや異なる結果となった。

盛土を約80cm除去すると、滋味土と床土が、それぞれ約10cm程存在する。また、床土の上面では、近代以降の褐灰色の砂質シルトの落ち込みが確認されている。これらを除去すると、層位は一変して、径20～30cmの川原石がびっしりと詰まった暗褐色のシルト層になる。約40cmの厚さで堆積して瓦、瓦器碗など中世の遺物を少量含んでいる。しかし、93－2区において大量に出土した、スサの入った焼土塊はまったく出土しなかった。さらに下層には、灰褐色の粘性土が約20cmみられる。非常に堅く締まっており、人為的に貼りつけたような土質である。上層と考え合わせるならば、川原石を積み上げた層を粘土で固定し

たものということが可能になるであろう。

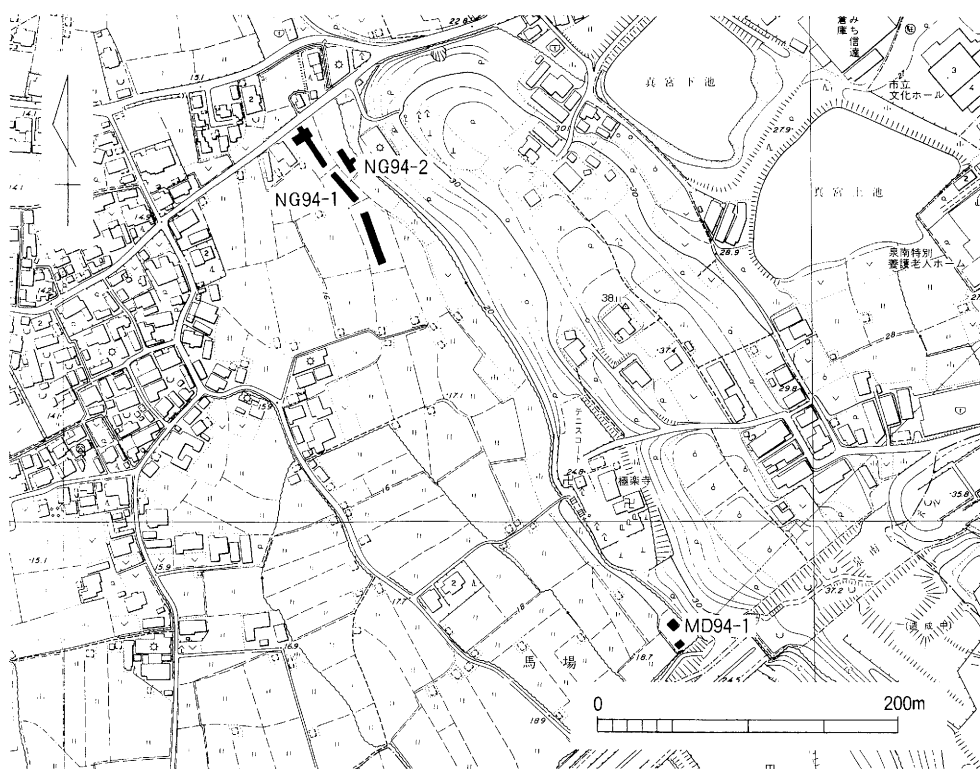
これらを掘削した最下層には、黄褐色の非常に安定したシルト面が確認される。ほぼ、93-2区におけるS K01を検出した面に対応すると考えてよいだろう。

93-2・93-3区の層位を比較すると、遺構を検出した黄褐色シルト層のレベルは、93-2区で約8.1m、93-3区は7.7mを測る。また、93-3区の暗褐色の礫混じりシルト層は、上面が8.2mと93-2区の黄褐色シルト層と対応することがわかる。このことと、層位の状況を考えると3区においては、元の地面に川原石などを粘土と混ぜあわせ、盛りあげた整地状の遺構であるということが言えるだろう。時期については、この整地状遺構から出土した瓦は、2区のS K01から出土した瓦とほとんど同じであり、光平寺の創建当初のものではなく比較的新しい時期の整地といえるが、いずれにしてもかなり大掛かりな土木工事であったと考えられる。

第4章 長山遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第10図）

市域では基盤山地である和泉山脈から派生して、平野部へと伸びる幾稜かの丘陵があるが、そのうちの一つであり通称「長山丘陵」と呼ばれる丘陵上に遺跡はある。遺跡の範囲は東西に120m、南北に650mを測り、地形分類上では丘陵部の先端と丘陵の西側に広がる沖積段丘及び洪積段丘中位面の上に立地するものと考えられている。周辺には男里遺跡や幡代遺跡などがあり、市域でも歴史的情報の非常に豊富な地域に属する。しかしながら、発見されてから本格的な発掘調査は今日まで行われておらず、遺跡の詳しい内容は分からない。中世から近世の遺物が採集されているのみである。

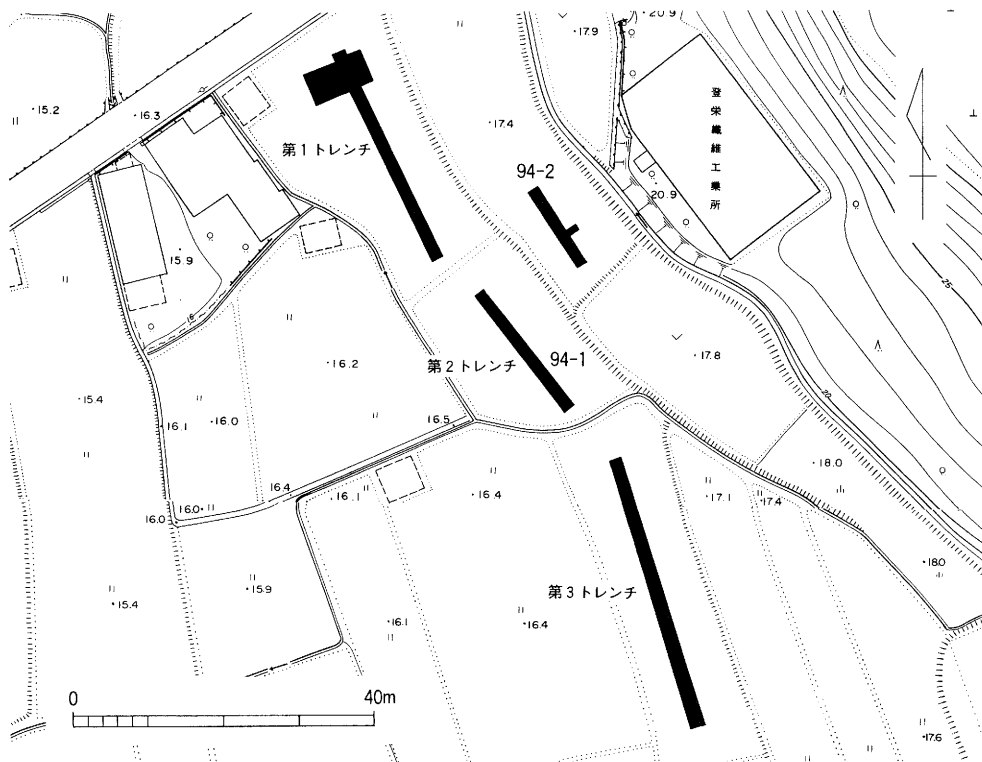


第10図 長山遺跡及び前田池遺跡調査区位置図

第2節 94-1 区の調査

1. 位置 (第10・11図)

調査区は遺跡をのせる長山丘陵の先端部のすぐ西側に位置しており、丘陵のすそに広がる耕作地が対象であった。地形分類上では沖積段丘面または洪積段丘中位面に立地しているものと考えられる。トレンチは3カ所設定した。



第11図 長山遺跡94-1・94-2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 5・23)

調査地全域にわたって基本的に水平堆積の層序が認められるが、調査地が南北に長く、またもとが別々の耕作地であるために若干の相違がある。最も北部の第1トレンチでは現代の耕作土(約20cm)を除去すると第II層・灰色土(約5cm)、第III層・暗黄褐色土(約5cm)、第IV層・褐色混じり暗黄褐色土(約10cm)、第V層・マンガン粒混じり灰色土(約15cm)とつづき、トレンチの南半

では地山である褐色土となるが、北側にのみ第Ⅵ層・マンガン粒混じり褐色土（約10cm）がある。トレンチ北端部の地山面で遺構が検出された。

第2トレンチでは現代の耕作土と床土を除去すると地山である灰黄褐色粘土が露呈する。ここでは遺構や遺物は確認されなかった。

最南に位置する第3トレンチでは現代の耕作土と床土の下には、第Ⅲ層・灰褐色土、第Ⅳ層・黄褐色混じり灰色土、第Ⅴ層・茶褐色混じり暗黄褐色土、第Ⅵ層・茶褐色土があり明黄色粘土の地山にいたる。平面的には遺構は検出されなかったが、断面観察では部分的に第Ⅴ層の下でピットや溝状の遺構が確認された。遺物は第Ⅲ層より瓦器の細片が出土した。

3. 遺構（P L. 5・23）

第1トレンチで検出された遺構は落ち込みが1基、溝3条、杭穴群、小溝群である。

落ち込み（S X01）は北から南に伸びる一辺が、南西方向に屈曲する肩を持つものである。しかし、南西方向に伸びる一辺は途中からS D02に切られており、また北側が調査区外へ伸びるため全形はわからないが、方形の区画であると考えられる。検出長は長軸が約7m、短軸が約3.5mを測る。肩部は緩やかに落ち、フラットな底部を持つ。最深部での深さは約33cmを測る。

埋土は2層であり、上層が第Ⅵ層で下層が明黄褐色土である。第Ⅵ層より若干の遺物の出土があった。明黄褐色土は後述するS D02の底部では明確に地山の土と分かれており、そのラインは落ち込みの西側の範囲を示すものと思われる。

また明黄褐色土の上面では北西から南東方向に伸びる小溝群が検出された。これらの溝は非常に浅く規模も小さいもので、いわゆる鋤溝であると考えられる。

落ち込みの輪郭にそうように杭穴群が2カ所検出された。特に東側で検出された一群は北北西から南南東方向に向かって直線的に整然と並んでいる。

S D01はトレンチ中央部で検出されたもので、北東から南西方向に直線的に伸びる溝である。溝の東端が破壊されているため全形はわからないが、検出長

3.5m、幅0.7～1m、深さ13～17cmを測る。断面形状は浅いお椀形を呈する。埋土は1層で、第Ⅴ層である。埋土から瓦器などが出土した。

S D02はトレンチの南隅部で検出されたもので、溝の南端と西端が調査区外へと伸びる。検出長は南北に60cm、東西に1.2mを測り、10cm程度の深さを持つ。埋土は1層で茶褐色混じり灰色土である。遺物は出土しなかった。

S D03はS D01の南側に隣接して検出された溝である。S D01と平行して伸びており、西端は調査区外へ伸び、東端は破壊されている。検出長2.3m、幅20cm、深さ6cmを測る。埋土は1層で暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

以上、述べてきたように第3トレンチで検出された遺構は、S X01については、下層の埋土上面でいわゆる鋤溝が検出され、また下層の埋土が床土層と考えられることなどから、耕作に伴う段である可能性が強い。

またS D01は、前代の地割りを踏襲した耕作用の溝と考えることができ、S D02と03は落ち込みと同時期に設けられたもので、落ち込みよりも若干早く埋没したものと捉えることができる。また杭穴群についても、落ち込みと溝のどちらに伴うものかはわからないが区画を示すためのものと考えることができる。

4. 遺物 (P L. 11・42)

出土した遺物は小さな破片が多く、図化できたものは3点に限られた。すべて第1トレンチのS X01から出土したものである。

3は土師器の小皿である。平らな底部でやや内弯しながら立ち上がり、軽く外反する口縁を持つ。復元口径は6.4cmを測る。4、5はともに瓦器碗である。5は口縁部を欠くが、断面が逆台形をした高台が付き、高台径は5.2cmを測る。外面はユビオサエで、見込みには斜格子状暗文が施される。4は体部下半を欠くものである。やや内弯しながら立ち上がる体部に外反する口縁がつく。

第3節 94-2区の調査

1. 位置 (第10・11図)

調査区は、長山丘陵の麓にあたり、現在の馬場集落から東へ約100mの地点

である。94－1区より一段丘陵より上がった水田である。地形的には、長山丘陵へ続く中位段丘面上に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 6・23）

層位は、非常に単純なものであった。約30cmの現代の滋味土を除去するとすぐに赤褐色の粘性シルトの地山が露呈した。94－1区においては比較的厚い旧耕作土が確認されているが、当地区では床土さえも確認することができなかった。また、遺物はまったく出土していない。

3. 遺構（P L. 6・23）

土坑とピットが1基ずつ検出された。S K01は、平面形は楕円形、断面は緩やかな凹面形を呈する。径45cm×38cm、深さ7cm程とかなり浅いものである。埋土は、灰褐色の粘性シルトである。

Pit 1は、径10cm、深さ4cm程で杭穴と考えられる。埋土は、褐灰色粘性シルトである。いずれの遺構からも遺物は、出土しなかった。

第5章 前田池遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第10図）

長山遺跡をのせる長山丘陵の南西側に接する前田池を中心とする東西180m、南北250mの範囲が遺跡とされている。国道26号線の敷設に伴う分布調査によって発見された遺跡である。しかし、市域の遺跡の多くがそうである様に、当遺跡も本格的な発掘調査は今日まで行われていない。古墳時代を中心とする石器類や須恵器などの遺物散布地として知られるのみである。地形分類上ではため池を中心として、男里川東岸に広がる沖積段丘上に立地している。また前田池は男里川の支流である金熊寺川旧河道の痕跡とされ、周辺の子環境を知るうえで興味深い。

第2節 94－1区の調査

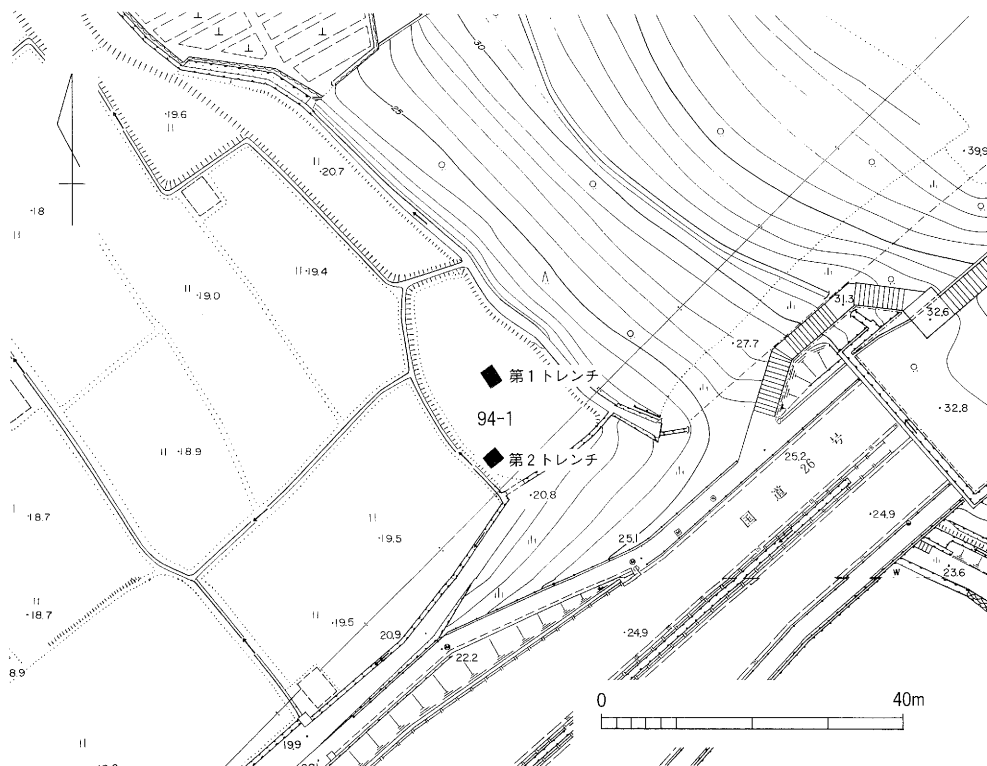
1. 位置（第10・12図）

調査区は遺跡の北端部に位置しており、東側には国道26号線の泉南トンネルがあり、北東方向には長山丘陵が伸びている。丘陵の南東裾部に調査地は位置している。地形分類上は丘陵地または沖積段丘に立地しているものと考えられる。トレンチは2カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 6・24）

第1トレンチで確認された層序は基本的に水平堆積をしている。まず表土を除去すると褐灰色土があらわれる。すでに除去されている現代の耕作土に伴う床土層であろう。その下に灰黄褐色系の土層があり、旧耕作土である暗灰褐色シルトとつづく。この層からは瓦器の細片が出土した。暗灰褐色シルトの下に地山である淡黄褐色粘土が露呈する。地山面において遺構が検出された。

第2トレンチでは基本的に11層の層序が確認された。表土を除去すると明黄褐色土があらわれ灰黄褐色土、灰褐色土と続く。ここまでの層序は第1トレン



第12図 前田池遺跡94－1区地形図

チとほぼ共通するものである。つづいて淡黄褐色土があり、この層は4層である灰褐色土がブロック状に混入するもので整地層と考えられる。その下には暗灰褐色土、暗灰褐色シルト、暗灰黄褐色シルトと続く。これらの3つの層は旧耕作土と考えられるものである。旧耕作土の下には暗黒灰色シルトが拡がっており、やや不安定な堆積状況を示す。その下には明黄褐色シルトがあり、明黄褐色シルトを掘り下げると5～10cm大の円礫を含んだ青灰色の粘土層が露呈する。この粘土は非常に粘性が強く、30～50cmの厚さで非常に不安定に堆積している。これらのうち9層にあたる暗黒灰色シルトより土師器の細片が出土した。

以上、第2トレンチの層序を述べてきたが、小範囲の調査で遺構の輪郭は検出されなかったが、その土層の様相から湿地帯や沼地などの自然地形あるいは大きな遺構の一部である可能性が非常に高いものであると考えられる。

3. 遺構（P L . 6 ・ 24）

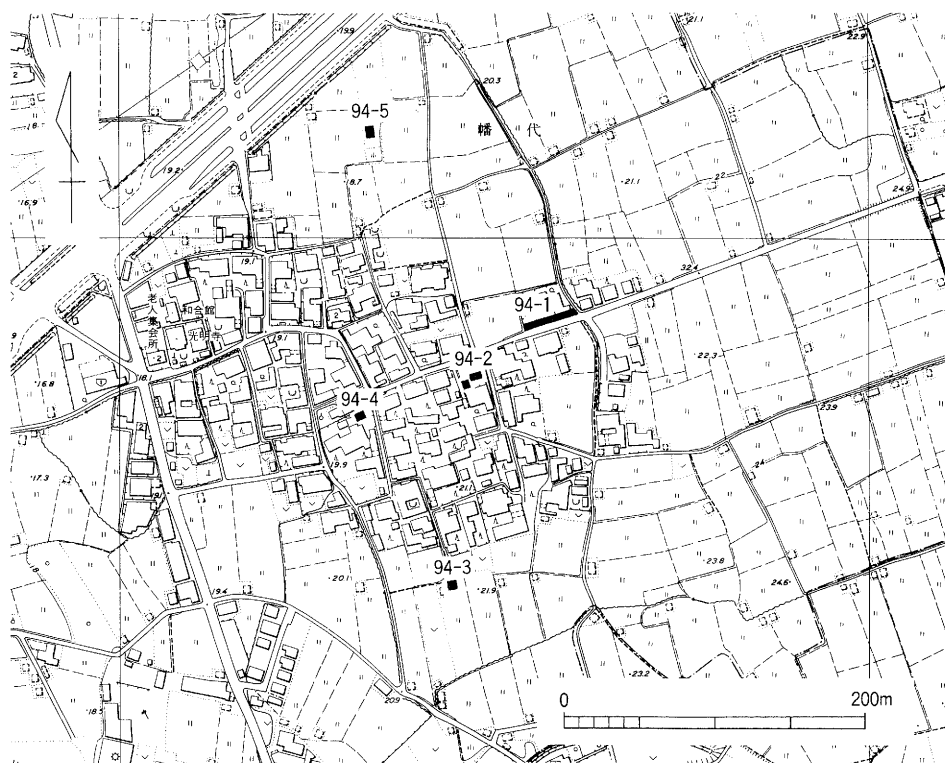
第1トレンチの地山上面において検出された。検出された遺構は北西から南東に向かって伸びる肩を持つ段状の落ち込みである。南北の両端が調査区外へ伸びるため平面形状は不明であるが、検出長は長軸2.2m、短軸1mを測り、深さは20～30cmである。肩部は直線的に伸び、緩やかに落ちている。落ち込みの埋土は黄灰褐色土、灰褐色土の2層である。埋土からは遺物は出土しなかった。

第6章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第13図）

幡代遺跡は市域の北西端部にあり、金熊寺川中流の東岸に位置する。地形分類上は沖積段丘面に立地している。遺跡の範囲は長径約800m、短径約400mを測る。周辺には男里遺跡や幡代南遺跡などがあり、市域でも遺跡の分布密度の高い地域に属しているといえよう。

遺跡の現況は西半に現在の幡代集落があり、東側には耕作地が大きく広がっている。ここでは男里遺跡と同様に、現在も集落域と耕作域が明確に分れている様子が窺え、「集村」と呼ばれる集落形態を今も色濃く残している。また東側に広がる耕作地には北で約20°西偏する地割りが認められるほか、小字名にも坪名をとどめるものが知られ、条里型地割りの痕跡が残るものとして以前よ



第13図 幡代遺跡調査区位置図

り指摘されている^①。

幡代遺跡における本格的な発掘調査は10数年前より始められ、年々小規模ながらも調査件数は増加し、データの蓄積が進んでいる。ここで今日までに得られている知見をまとめてみたい。

現在知られる最古のものは弥生時代の遺物であるが、データにまとまりを欠き、具体的な様相は不明である。しかし、北接する男里遺跡にある弥生時代集落との有機的な結合が非常に期待されるものである。

次に注目されるのは平安時代から中世にかけての時代であろう。現在の集落付近や集落の西縁部の調査では平安時代末期から中世にかけての集落に伴うと考えられる遺構が検出されている^②。また遺物では多くの瓦類が出土しており、付近には堂塔の存在をうかがわせる字名も残ることから、当該期の寺院の存在はほぼ確実視されている。しかし、発掘調査では寺院に直接関係するような遺構は検出されておらず、寺院の周囲に想定される集落域の確定と共に今後の課題となっている。最近の調査ではこれまで調査の及んでいなかった遺跡の東側においても当該期の遺構が検出されており、中世の集落範囲の拡大が推定されている。

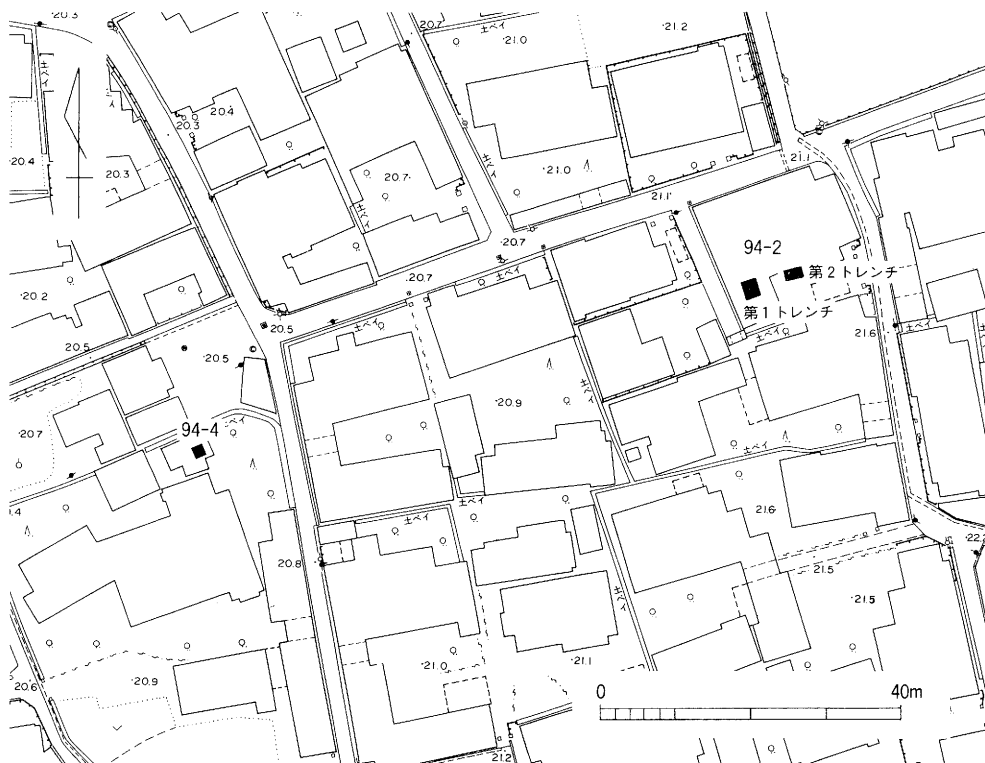
つづく近世期には現在の集落を中心として多種多様の日常雑器が出土し、また市道の拡幅に伴う近年の調査では、当時製糖が行われていたことを示す遺物が出土するなど、近世農村集落における庶民の生活の一端をうかがい知ることのできる情報が増してきている。

以上、現在の幡代遺跡の概略を述べてきたが、調査自体の絶対数が少なく、近隣の男里遺跡などと比べても得られている情報にも限界がある。今後さらに調査研究が進むことによって、より一層の解明が待たれるものである。

第2節 94－2区の調査

1. 位置（第13・14図）

調査地は遺跡の北西部に位置し、府道金熊寺男里線の「幡代南」交差点を約200mほど西に入った地点で、現在の幡代集落の中央から、やや東寄りに位置



第14図 幡代遺跡94-2・94-4区地形図

する。調査区の周辺は近世の遺構や遺物が濃密に分布する地点である。地形分類上では金熊寺川の東岸に広がる沖積段丘上に立地している。トレンチは2カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 8・25・26）

第1トレンチでは表土（約15cm）の直下に淡黄褐色粘土の地山が認められる部分もあるが、大部分を褐灰色の礫層が占めている。一見したところ河川性堆積の礫層であるとも考えられたが、遺物が散見されたため、礫層の掘り下げを行ったところ礫層は後述する土坑の埋土であった。地山面において遺構が検出された。

第2トレンチは第1トレンチから約4m東側に設定した。第Ⅰ層・表土（約20cm）の下に、第Ⅱ層・褐灰色土（約15cm）、第Ⅲ層・淡黄褐色土（約20cm）がある。第Ⅱ層、第Ⅲ層はそれぞれ旧耕作土および床土と考えられる。その下

には第Ⅳ層・灰黄褐色粘土（約15cm）があり、地山である第Ⅴ層・黄褐色粘土と続く。地山面において遺構が検出された。

3. 遺構（P L . 8 ・ 25 ・ 26）

第1トレンチで土坑（S K01～03）、ピットが検出された。

S K01は地山面である淡黄褐色土の上面で検出された土坑で、東西に長く土坑の東端は調査区外へと伸びる。平面形状は隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出長は東西に70cm、南北に60cmを測る。断面の形状は浅いお椀形を呈しており、深さは約15cmを測る。埋土は2層に分層され、上層は褐灰色土で、下部には5cm大の礫が溜っている。下層である灰色シルトからは瓦片などの他、植物遺体も出土した。

S K01に南接してピットが検出された。東端が調査区外に伸びるため平面形状はわからないが、深さ約45cmを測るものである。埋土は礫混じりの褐灰色土であり、遺物は出土しなかった。

S K02はトレンチの南西部で検出された土坑で、南北に伸びるいびつな楕円形を呈するものと考えられるが、トレンチの南西隅にかかるため全形は明らかでない。検出長は南北に1m、東西には40～60cmを測る。底部はほぼ平らで肩部からの深さは約45cmを測る。埋土は基本的に3層で、褐灰色礫が表土の直下からあり、その下に暗茶褐色粘質土、さらに暗緑灰色シルトがある。底部は地山が還元して淡緑灰色を呈しており、滞水状態にあったことがわかる。埋土から瓦片や陶磁器片が出土した。

S K03はS K02に北接して検出されたもので、トレンチの中央部から北西方向に伸び、調査区外へと拡がっている。平面的には一辺を北西に向けた不整な多角形をしており、検出長は東西に1.5m、南北に1mを測る。底部は平らで最深部での深さは約50cmを測る。また底部の状況はS K02と同様であり、滞水状態にあったようである。埋土は褐灰色の礫層がほとんどであるが、部分的に明赤褐色粘土が帯状に入る部分もある。

この明赤褐色粘土の帯はトレンチの西隅部で確認され、S K02の下層埋土の直上にも部分的に認められ、2つの土坑の切り合い関係を示すものとも考えら

れる。S K02がやや埋没してから、S K03が設けられたのであろう。しかし、双方ともに出土する遺物からは時期差は認められず、あい前後する時期に設けられたもので、共存していた可能性も考えられる。埋土からは瓦片などが出土した。

以上述べて来たようにS K02と03は共に明確な輪郭を持たない荒掘りの土坑であり、用途などはいまひとつ判然としないが耕作用に設けられた野井戸のようなものであろうか。またS K01とピットについては状況が他の2つとは大きく異なっていることから全く別の用途が考えられるが、検出された範囲が限られ、また出土遺物からは他の2つの土坑と時期的な差は認められず、不明といわざるをえない。野井戸に面する施設に伴うものであろうか。

第2トレンチでは土坑（S K04）が検出された。トレンチの中央部から北に向かって大きく落ちており、大部分が調査区外へ伸びている。検出した限りでは東西に伸びる半円形の肩部を有し、検出長は南北へは1.2m、東西へ2mを測る。深さは地山面から最深部で約65cmある。浅いお椀形の断面形状を呈しており、底部の中央部と東西の端部とでは25cm程度の高低差がある。埋土は淡黄色粘土や灰色土、褐色の礫層などが互層をなし、人為的に埋められたものと考えられる。埋土から近世から近代の瓦片が出土した。

また、トレンチの断面からは表土の直下から掘り込まれている様子が観察されるが、第Ⅴ層以下の遺構断面とは異なり、非常にいびつであることから、埋め戻しもしくは整地を行う際のかんりの攪乱が考えられる。以上の事からS K04は近世以降に設けられた廃棄用途の土坑であると考えられる。

3. 遺物（P L. 11・41）

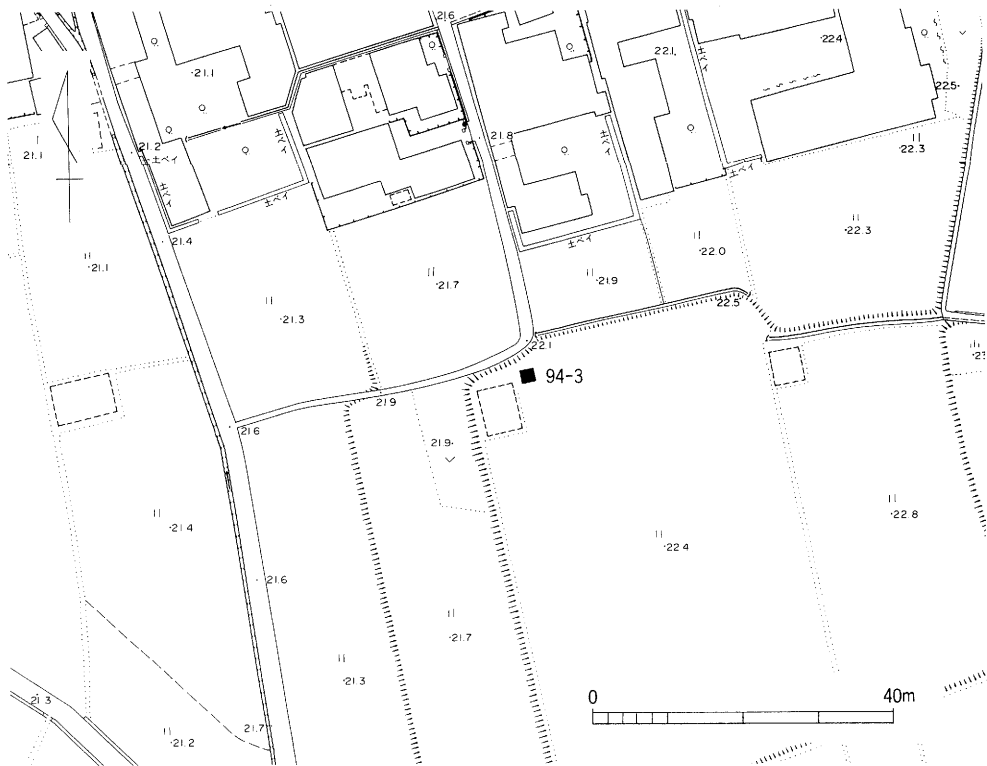
第1トレンチ、第2トレンチともに出土した遺物はごく限られ、中でも図化できたものは下記の3点のみであった。図示し得た以外では瓦類が割と出土したが、近世をさかのぼるようなものはなかった。6～8はすべて第1トレンチのS K02より出土したものである。6の中椀は復元口径9.7cm、器高6.9cmを測る製品で、胎土はやや粗く陶胎に近いもので、断面は灰白色を呈する。全体にぶい黄橙色の釉が施されている。また全体に貫入が多い。

・7・8は波佐見焼系磁器である。7は椀で口縁部、高台ともに欠損している。全体に明青灰色の釉が施されており、体部には草花文が描かれ、高台部には圈線が巡らされているが呉須の発色は余りよくない。胎土は緻密であり、断面は灰白色を呈する。8は壺で復元口径7.8cmを測る。全体に明青灰色の釉が施され、口縁外部には四方禰文、体部には一重網目文が描かれている。胎土は緻密であり、断面は灰白色を呈する。

第3節 94－3区の調査

1. 位置（第13・15図）

調査区は遺跡の南端、現在の幡代集落においてはその中心から東南のはずれに位置し、地形分類上では沖積段丘上に立地している。調査区周辺は西側に流れる金熊寺川に向かって緩やかにレベルを下げながら水田が広がっており、市



第15図 幡代遺跡94－3区地形図

内でも少なくなったのどかな景観を残している。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 8・26）

層序はトレンチ設置部分の耕作土（約20cm）はすでに除去されており、第Ⅱ層の灰色混じり褐色土（約20cm）が露呈していた。その下には第Ⅲ層・茶褐色土（約20cm）、第Ⅳ層は黒褐色混じり暗褐色土が60cmほど厚く堆積し、第Ⅴ層の暗褐色砂礫となる。第Ⅳ・Ⅴ層の堆積は河川の氾濫に起因するようである。遺物・遺構ともに確認できなかった。

第4節 94－4区の調査

1. 位置（第13・14図）

調査区は遺跡内のほぼ中央部に位置する。地形分類上では沖積段丘面に立地していることになる。周辺の調査例では、約30m南側において遺構埋土の可能性のある粘土系の堆積土が確認されるなど、遺跡内においても遺構が比較的集中して検出される地点といえるであろう。トレンチは1カ所設定した。

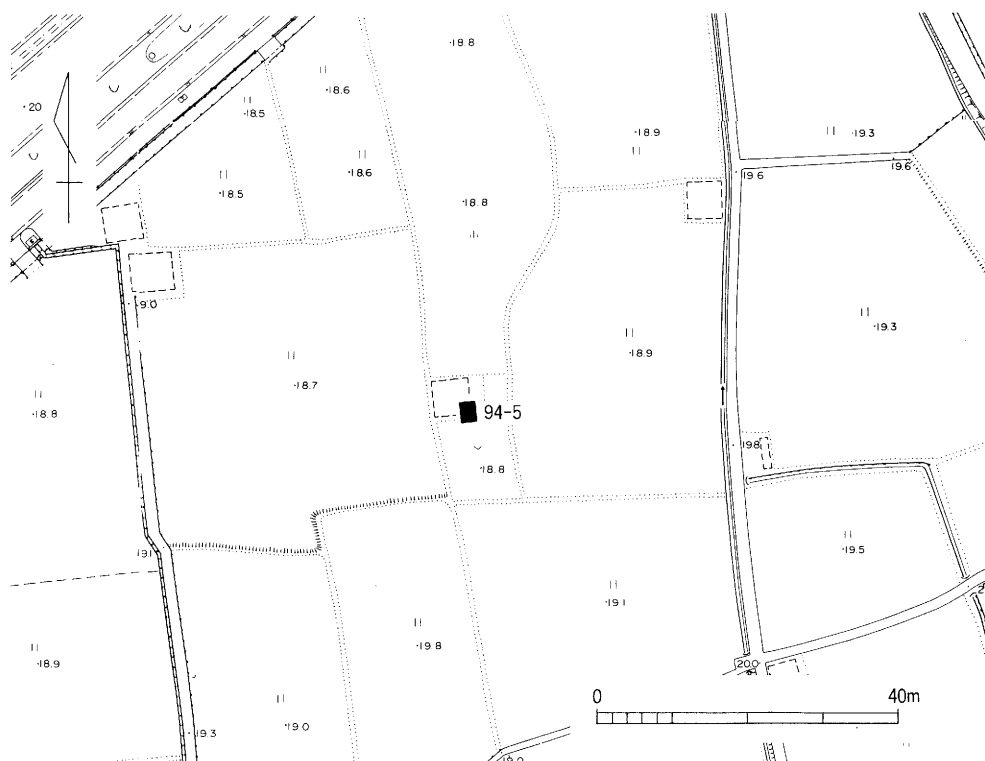
2. 層位と遺物の出土状況（P L. 8・27）

層序は、第Ⅰ層・暗黄褐色土（約50cm）、第Ⅱ層・暗茶褐色土（約30cm）、第Ⅲ層・青灰色粘土（約20cm）、第Ⅳ層・褐色砂質土（約20cm）と続き、第Ⅴ層の褐色の地山に至る。各層ともに水分を多く含んでおり、また第Ⅲ層の青灰色粘土が確認されたことから、当地に池などが存在した可能性が高いと考えられる。遺物・遺構は確認できなかった。

第5節 94－5区の調査

1. 位置（第13・16図）

調査区は、遺跡のほぼ中央部にあたり、現在の幡代集落の北東約100mである。平成6年9月に開通した府道金熊寺男里線の西側に面している。この道路



第16図 幡代遺跡94－5区地形図

用地は、平成4年度に(財)大阪府埋蔵文化財協会によって発掘調査が行われ、掘立柱建物や旧河道などが検出されている。地形的には、沖積段丘面上に立地すると思われるものの、当調査区が面した部分では旧河道や氾濫原のような面が確認されている。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 8・27）

盛土（約80cm）、滋味土と床土（約30cm）を除去すると、褐色及び黄灰色の旧耕土層が約25cm程認められる。さらに、これらの下層には、灰色で礫を多く含んだ非常に粘性の強いシルト層が約5cm確認された。自然の堆積ではなく、何らかの整地を行った層のようである。この下層には、再び黄褐色シルトの旧耕作土がみられる。最下層には、灰褐色及び褐灰色の非常に粘性の強いシルト層が約25cm程確認された。これらは、旧耕作土ではなく、水によるかなりゆっくりした堆積土と考えられる。

そして、これらの下層には、氾濫原などで確認される褐灰色の砂礫層が露呈する。この層をさらに深く掘り進むものの、礫の径がさらに大型化するだけで変化は認められなかったため、地山として判断した。遺構・遺物は、確認することはできなかった。

註 ① 泉南市史編集委員会『泉南市史 通史編』（1986）

② 1983年度 大阪府教育委員会による発掘調査。

第7章 岡中遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2・17）

当遺跡は市域の南方に位置し、山地から蛇行しながら北流する金熊寺川右岸の氾濫原上に立地している。

その範囲は、東限が長山丘陵の南端の愛宕山、南・西限が金熊寺川、北限がJR阪和線の東西約200m、南西約250mを占めており、現在の岡中集落のほぼ全域をおさめている。遺跡の中央には岡中鎮守社が位置し、その境内に府天然記念物に指定されている「岡中の樟・榎」が存在している。

当遺跡は発見されてまだ日が浅いもののこれまで小規模であるが調査が継続的におこなわれ、遺跡の内容が徐々に明らかになりつつある。

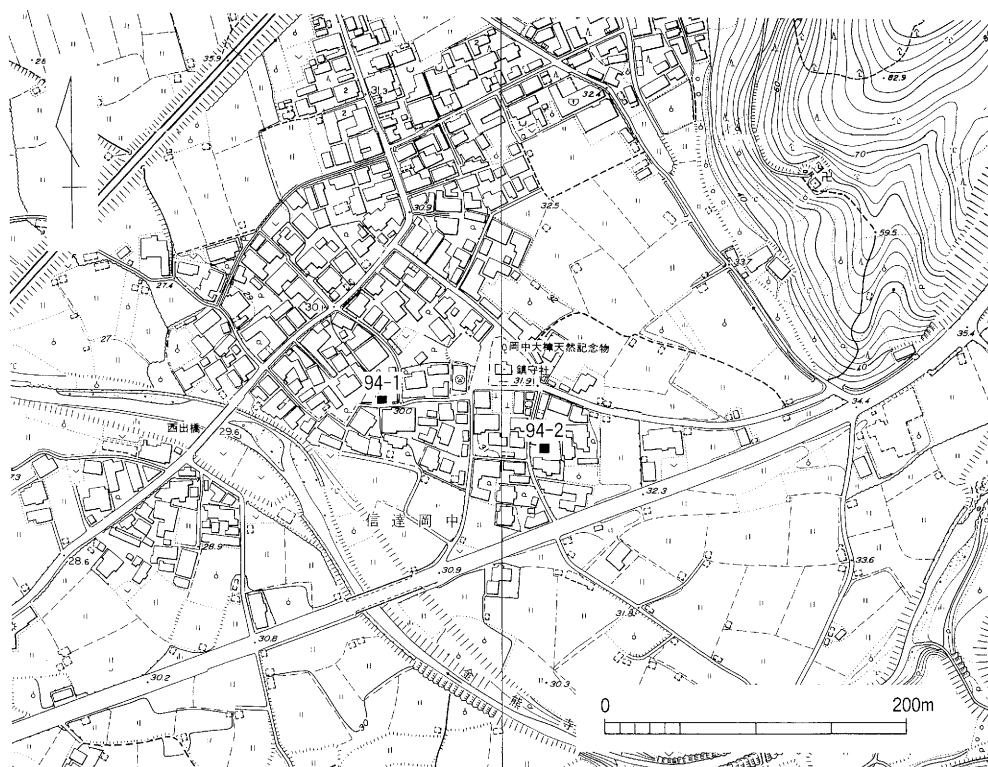
これまでに現在の集落中心部では平安時代後期を初源とする寺院跡、14～15世紀の土坑墓群、製鉄関連遺構などが確認され^①、当遺跡が中世、特に15世紀を中心とするものであることが判明している。

また遺跡の北部でも最近の調査において遺構の存在が確認され^②、その遺構分布、包含層の広がりなどのデータが徐々に蓄積されてきている。

そして、当遺跡を語る上で忘れてはならないことに瓦窯の存在があげられる。この瓦窯は遺跡東側の愛宕山に位置する林昌寺の境内に存しており、ここで生産された瓦が岡中遺跡内の中世寺院だけではなく、泉南市内はもとより、広く泉州地域の一部の寺院に供給されていたことが明らかとなっている^③。

以上のことから岡中遺跡は中世の時期に寺院を中心として展開していった遺跡であると推測されるが、同時期の集落に関する遺構はいまだ確認されておらず、当遺跡の更なる内容究明にはまだまだ資料不足の感がぬぐえないのが現状である。

今後、寺域の確定や集落の動向を確認するだけでなく、市内や泉州全域における中世寺院との有機的な関連を追求するといった幅広い調査・研究が望まれている。



第17図 岡中遺跡調査区位置図

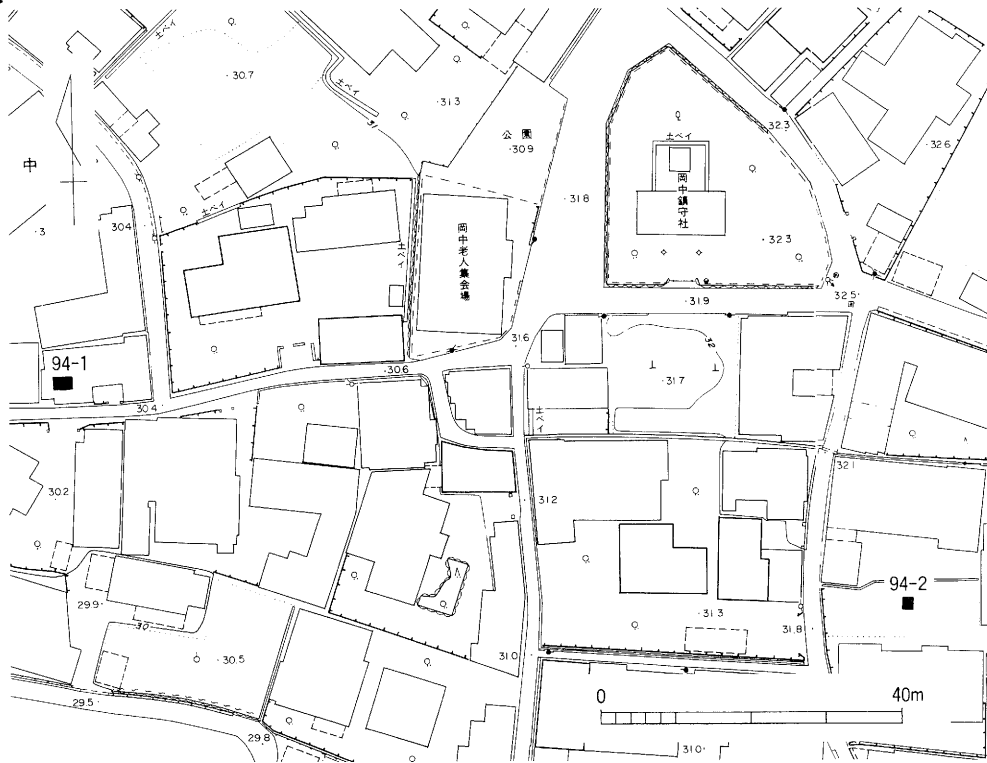
第2節 94-1区の調査

1. 位置 (第17・18図)

調査区は府指定天然記念物「岡中の樟・榎」から西方約100m、現在の岡中集落では中心よりやや南側に位置している。地形分類上では沖積段丘上に立地していることになる。現況では更地となっていたが最近まで民家が立っており、さらに以前には水田であったようである。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 6・28)

層序は第Ⅰ層・暗灰色土 (約30cm)、第Ⅱ層・炭混じり暗褐色土 (約20cm)、第Ⅲ層・茶褐色土 (約40cm)、第Ⅳ層・人頭大～拳大程度の礫を多量に含む茶褐色土である。T.P.+28.5m付近まで掘削した結果、当層はレベルが下がるにしたがって礫が小さくなる傾向にあり、あたかも氾濫原の様相を呈している

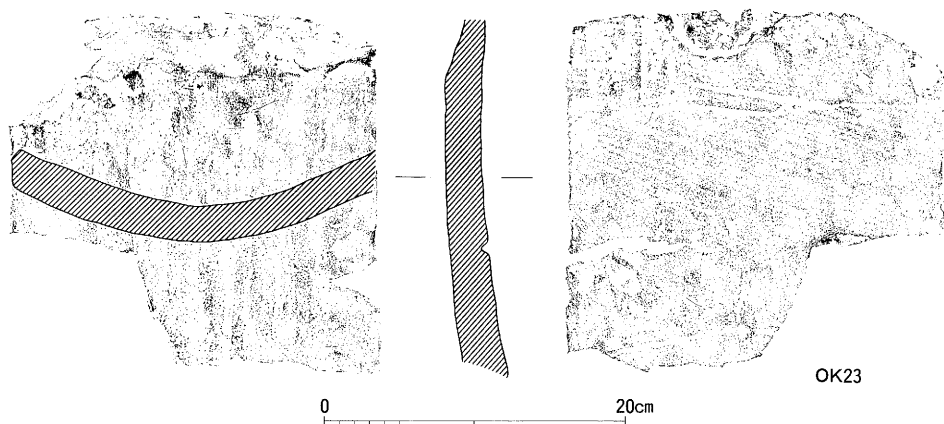


第18図 岡中遺跡94-1・94-2区地形図

が、第Ⅳ層上部の大きめの礫は整地に伴う可能性も考えられる。

3. 遺物（P.L. 41、第19図）

第Ⅲ層から平瓦が1点出土している。平瓦（1）は厚さ2.5cm前後を測る厚手の製品で、広端にむかって凸面側にやや外弯している。凸面には糸切り痕が明瞭に残り、凹面の一部では布目痕が認められるものの、側面に平行のナデ調整がほぼ全面に施されることによってその確認範囲は極めて少ない。側・端面ともにヘラケズリをおこない、凹面側の側縁は約1cm、端縁では4cmほどの面取りをおこなう。また、凹凸両面には多量の離れ砂が認められる。胎土には1～5mm程度の黒・白色粒を含み、焼成は良好である。



第19図 岡中遺跡94－1区出土の平瓦

第3節 94－2区の調査

1. 位置（第17・18図）

調査区は岡中鎮守社の南約200mに位置しており、地形分類上では94－1区と同じく沖積段丘上に立地する。周辺では比較的調査例が少なく、包含層等の広がり把握するデータの獲得が期待された。トレンチは1カ所を設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 6・28）

層序はすべて水平堆積する9層が確認できた。第Ⅰ層の耕作土（約20cm）の下にはそれに伴う床土に相当する第Ⅱ層・灰色混じり褐色土（約10cm）、第Ⅲ層・灰色混じり黄褐色土（約10cm）が確認される。第Ⅳ層が黄褐色土（約10cm）、第Ⅴ層が近世の遺物を少量含んでおり当該期の耕作土である黄褐色混じり灰色土（約15cm）、それに伴う床土の第Ⅵ層・黄褐色土（約10cm）、第Ⅶ層が瓦器等の中世遺物を含む耕作土の灰色土（約10cm）、第Ⅷ層が茶褐色混じり黄色土（約10cm）、第Ⅸ層は氾濫原の一部と考えられる暗褐色砂礫である。

遺物はすべて小片で図化できるものではなく、遺構も検出されなかったが、当調査区付近が中世以降、連綿と耕作地として利用されていたことを確認することができた。

- 註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）
- ② 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ』（1994）
- ③ 註②と同じ

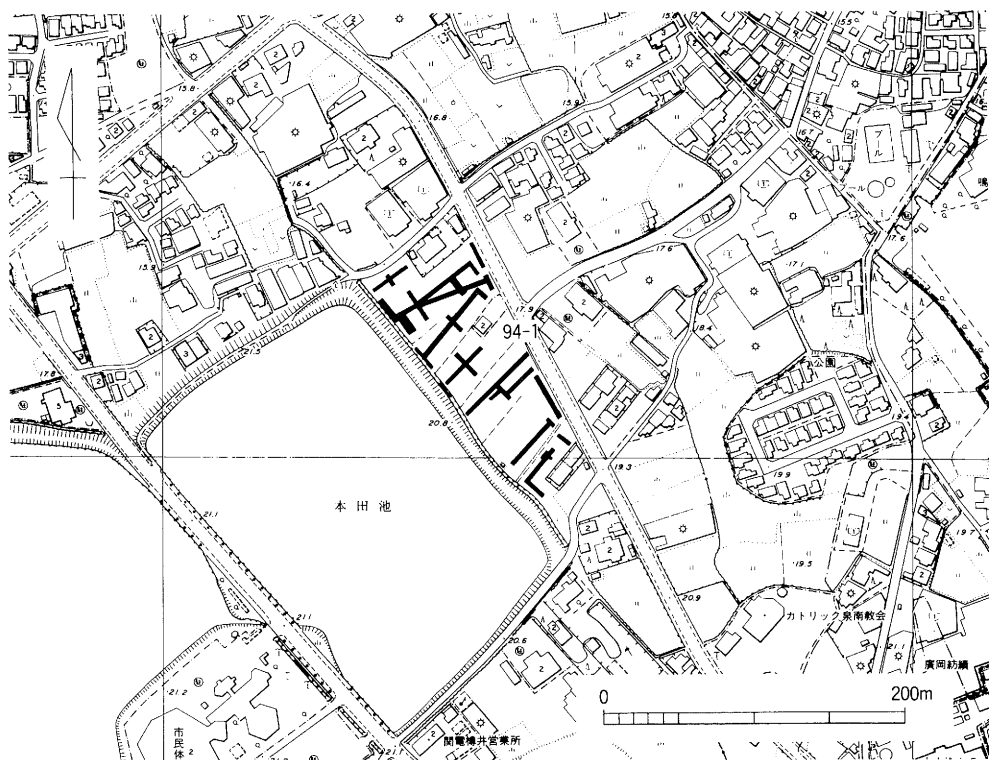
第8章 本田池遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第20図）

本田池遺跡は、山間部を除く市域のほぼ中央部に位置し、現在の鳴滝集落の南西側にあたる。径300m×100mの規模を持ち、大半が水田の中に位置している。地形的には、遺跡はすべて檜井川左岸から長山丘陵まで広がる広大な段丘面上、その中でも特に低位段丘面に立地するものと考えられる。遺跡発見の契機は、分布調査により中世から近世に至る遺物が散布することによるものであり、これまで発掘調査はほとんど行われたことがなかった。

周辺の遺跡に目を転じてみると、この付近にはほとんど遺跡が確認されておらず、この本田池遺跡だけがただひとつ浮き上がっているのが良くわかるのである。この地域を含めた樽井・鳴滝・信達市場・信達牧野など市域でも比較的民間開発の多いところでもあり、毎年かなりの件数の試掘調査が行われているにもかかわらず、依然として実態のある遺構が検出される遺跡は発見されていない。今回の調査の結果は、本田池遺跡はもとよりこれら地域でもほとんど例を見ない初めての発見であるといってもよいだろう。今後、さらにきめ細やかなデータの収集を行うことにより、この遺跡の空白地域がいかなる理由によるものなのかが解明されるものと期待できる。

さて、遺跡の名称となっている本田池とは、遺跡のさらに南西に隣接する溜め池である。本田池をはじめとする付近の溜め池は、概ね近世以降の水田開発にともない、段丘部分の緩やかな谷状地形を利用して築造されていると考えている。つまり、現在の溜め池のあるところは、かつては谷地形が存在したものと推定してもよいのである。今回検出した溝と、この本田池との関係は、非常に興味深いものと言えるだろう。



第20図 本田池遺跡調査区位置図

第2節 94-1 区の調査

1. 位置（第20図）

調査区は、本田池の北西側の堤の外側にある水田である。トレンチは当初、11カ所設定したが、遺構が検出されたトレンチはわずかで、ほとんどが近世以降の鋤溝であると考えられる。このうち第1トレンチにおいて、鋤溝とは異なる比較的しっかりした溝を検出したためトレンチを拡張してこの溝を調査対象地すべてで検出することとした。

2. 層位と遺物の出土状況（PL. 7・29）

層序は、非常に単純である。滋味土と床土を20～30cm除去するとマンガンを多く含んだ灰色のシルト層が10cm程認められる。部分的には、まったく認められず、すぐに黄褐色シルトの地山に至る部分もあった。また、地山は、部分的

には段丘礫層のところも見受けられた。いずれの層からも遺物は出土していないが、床土下の灰色のシルト層は、中世の時期までさかのぼると考えられる。

3. 遺構 (P L. 7・29)

先述のとおり、かなりしっかりした溝 (S D01) を一条確認したため、この溝に添ってトレンチを大きく拡張した。検出長は約36m、幅は最大で64cm、最も狭い部分で25cm、深さは10～40cmを測る。埋土は、褐灰色粘性シルトでかなり締まった状態である。

溝の方向は、ほぼN60°Eを示し、現在の調査区水田地形とは、ほとんど一致しない。また、調査区外ではこのまま南西側の本田池の堤の下に続くものと考えられ、堤の築造より時期的には古いものである。さらに、このほかの遺構では、S D01を切る形で鋤溝が何条か検出されているが、これらは現在の水田の方向に一致しており、現在の水田が営まれる以前のものであるとも言えるだろう。

溝の底面のレベルは、わずかに南西の本田池側が低くなっており、これを水路と考えるなら本田池築造以前の谷地形に水を流し込む機能も推定できるだろう。

時期的には、遺構からは遺物はまったく出土しなかったが、埋土の質から中世のものと考えてよいだろう。

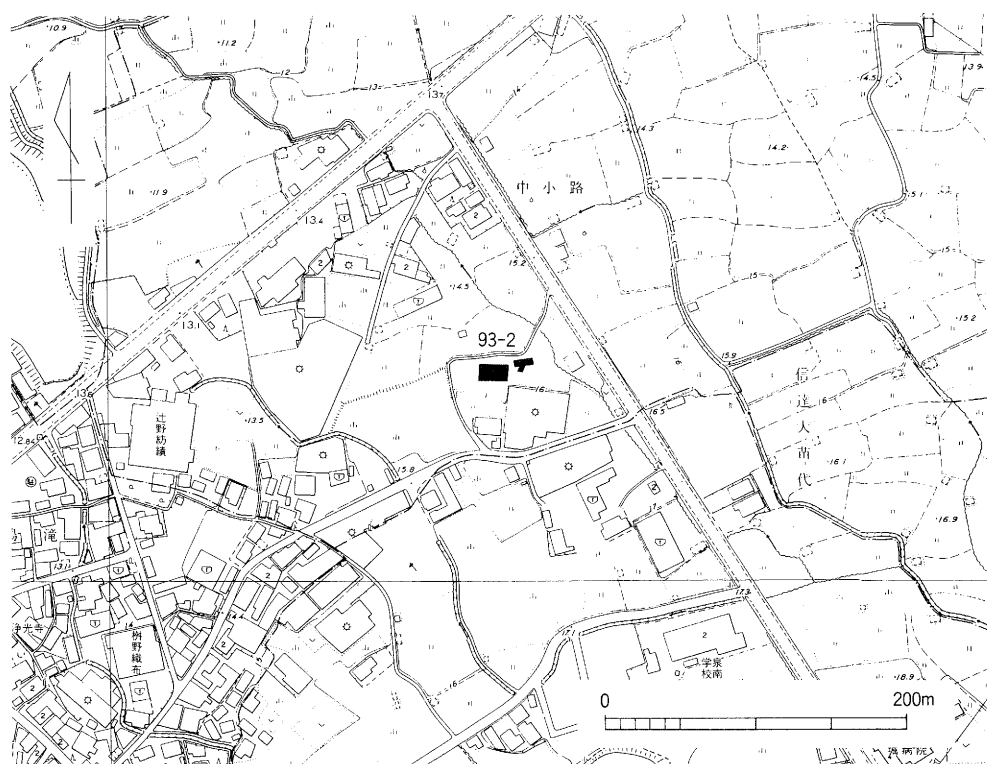
第9章 中小路西遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第21図）

中小路西遺跡は、市域でも最も遺跡が集中する地域のひとつである樫井川左岸における広大な洪積段丘面上、特にその中でも大部分を占める低位段丘面上に立地するものと考えられる。遺跡の規模は、東西360m、南北400mの規模を持ち、数年前に分布調査により、中世から近世の遺物が散布することで、遺跡として周知されるようになった。周辺の遺跡に目を転じると、北側にはほぼ同じ性格を持つと考えられる岡田西遺跡、南側には中小路南遺跡などがある。

当遺跡で、実際に発掘調査が行われたのは、93年度に2カ所のみで、今年度は、昨年度報告できなかった調査区について報告を行っている。

昨年度報告の93-1区の調査^①においては、幅1～3.5m、深さ50cm以上のか



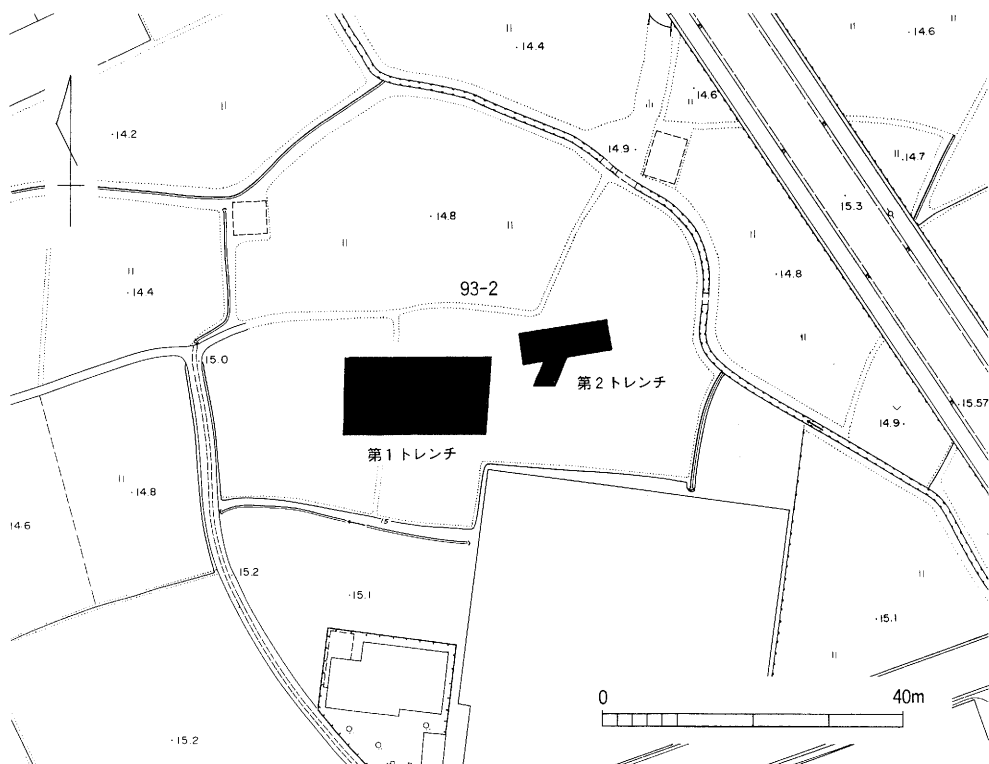
第21図 中小路西遺跡調査区位置図

なり大規模な溝が1条検出されている。下層には、水が流れていた痕跡がみとめられ、水田耕作に伴う、当時の基幹灌漑用水路と考えてよいだろう。また、この水路の上層からは、30点近い瓦器碗と数点の瓦器・土師器の皿が一括出土している。これらは、溝が埋没する時に人為的に据えられて、溝を一齐に埋めていることがわかっており、溝を廃棄する時の地鎮具的な要素を持ったものと考えてよい。瓦器碗の時期としては、14世紀代のものであると考えられ、この時期にいかなる理由でこれまでの水路を廃棄したのかが、水田を維持した集落の存在と合わせて大きな課題となることであろう。

第2節 93-2 区の調査

1. 位置 (第21・22図)

調査区は、府道泉佐野岩出線「中小路」交差点より南へ約150mに位置する。



第22図 中小路西遺跡93-2区地形図

溝と瓦器碗の一括資料が見つかった93-1区は、ここより南東約20mに近接する水田である。トレンチは2カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 10・30・31)

第1・2トレンチともほとんど同じ層位を示している。10～20cmの滋味土と約10cmの床土を除去すると、灰褐色の砂質シルトが約10cm程みられるが、第2トレンチではほとんど確認されなかった。この下層には、黄褐灰色の粘性の非常に強いシルト層が10～20cm認められ、黄褐色シルトの地山に至る。これらの層はいずれも旧耕作土であると考えられる。

遺物は、第1トレンチでは、この旧耕作土中より中世の所産のものがバスケット1杯程出土している。また第2トレンチからは、遺物は出土しなかった。

3. 遺構 (P L. 10・11・30・31)

第1トレンチでは、トレンチ北東側を中心に、鋤溝と考えられる浅い小規模な溝を多数検出した。溝の規模は、長いもので約3m、短いもので約0.5m、深さは3～5cm前後のものがほとんどである。溝の方向は、座標北における、東西方向から僅かに南北に振れていることがわかる。これら鋤溝群からは、土師器などの細片がごくわずかに出土している。

一方、トレンチの南側では、地山面がかなりの凹凸を示し、旧耕作土が地山に食い込んだ状態がみられるが、溝状の遺構としては、ほとんど確認できなかった。

そのほかの遺構としては、ピットが1基検出された。Pit 1は、トレンチ西端に位置する。径30cm、深さ19cmを測り、埋土は、褐灰色系粘性シルトである。遺物は、瓦器碗の底部(13)が1点出土している。

第2トレンチでは、第1トレンチと同じ鋤溝の他にこれら鋤溝とはやや性格の異なると考えられる溝が1条検出された。S D01は、トレンチ西側で検出された。Tの字形に検出され、幅40～70cm、深さ5～7cm程とかなり浅いが、埋土が灰色の粘性土の強いシルトで鋤溝のものとはやや異なっている。この溝に沿って径10～20cm、深さ5～10cmの杭穴と考えられる小ピットが数多く検出さ

れ、水田の区画を表す小規模な水路と考えられるだろう。

4. 遺物（P L. 11・42・43、第23図）

13は、第1トレンチのPit 1より出土した瓦器碗の底部である。断面逆台形のかかなりしっかりした高台を貼付けている。内面の見込み部分には、斜格子文のヘラミガキを施している。両面とも炭素がほとんど付着しておらず、外面は赤褐色を呈している。

この他は、包含層よりの出土である。14・15は、瓦器碗である。14は、口縁部に1回のヨコナデを施し、内面はヘラミガキがわずかに認められる。15の高台は、摩滅のため断面形を確認できなかったが、比較的しっかりしたものである。

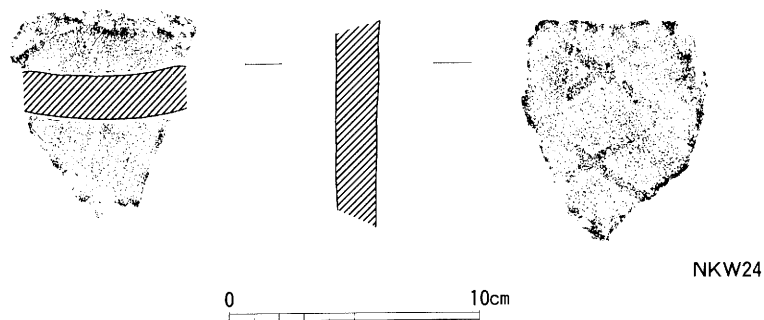
12は、紀州系の土師器の甕である。体部から口縁部に向かって丸みを帯びて屈曲し、端部は上方へつまみ上げられる。色調は、橙色を呈する。

16は、土師器の皿である。平坦な底部から立ち上がる口縁部で、端部は僅かに外反する。クサリレキを含み、赤橙色を呈する。

9～11は、東播系の捏鉢である。口縁部は、大きく外側に拡張され、断面が三角形を呈するものである。端部は、9は丸みを帯びているのに対して、10は鋭角をなす。いずれも口縁部に重焼き痕を持つ。

24は、平瓦である。凸面に格子状のタタキ目、凹面はナデ調整である。両面ともハナレズナが明瞭に認められる。

出土した遺物は、図化し得なかった遺物も含めると、昨年度調査の93-1区の出土の瓦器碗の時期と同じか、ややさかのぼるものであることが言える。つまり溝の埋没以降は、付近には生活の痕跡がかなり希薄になっていることが窺えるのである。今回の調査においては、耕作痕のみの遺構しか検出することができなかったが、93-1区の資料を含め、中世における水田開発と経営方法の実態とそれを維持した集落形態を明らかにする上で今回の調査は大きな成果があったと言えるだろう。



第23図 中小路西遺跡93-2区出土の平瓦

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ』（1994）

第10章 岡田遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第24図）

岡田遺跡は市域の北東端を流れる樫井川の西岸に位置する遺跡である。発見されてから日が浅いものの、今日まで着実に歴史的なデータの積み上げがなされて来ている遺跡である。市域では80年代から90年代にかけて樫井川周辺での開発が増加し、岡田西遺跡、氏の松遺跡、岡田東遺跡など多くの遺跡が新たに発見された。岡田遺跡もまたその一つであると言えるが、80年代の終わりから発掘調査の件数も増加し、少しずつではあるが、確実にその内容が明らかになってきている。

遺跡は樫井川西岸に広がる広大な洪積段丘低位面に立地しており、その範囲は比較的大きく、市域では男里遺跡に次ぐものとなっている。遺跡の現状は東



第24図 岡田遺跡調査区位置図

半を現在の岡田集落が占め、西側には耕作地が広がる。

これまでに行われた発掘調査では、まず最古のものとして縄文時代または弥生時代に属する石鏃が検出されている^①。ローリングを受けているが、周辺に集落などの存在を期待させるものである。またわずかに古代の土器も散見されており^②、合わせて今後の調査に期待されるものである。

中世以降になると得られる情報量も増し、遺跡の盛期が求められる。遺跡の西半部においては、複数の耕作面が重なって検出される範囲が広がっており、土地利用の定着化と共に盛んな農耕活動を示す。また多くの場合、旧耕作土が中世の遺物包含層となっており、現在の集落付近から出土する遺物にも中世、特に室町時代を中心とするものが多く見受けられる。また集落付近では瓦類も多く出土し、現在も残る浄泉寺の成立を考え得る資料が得られている。

第2節 94-1区の調査

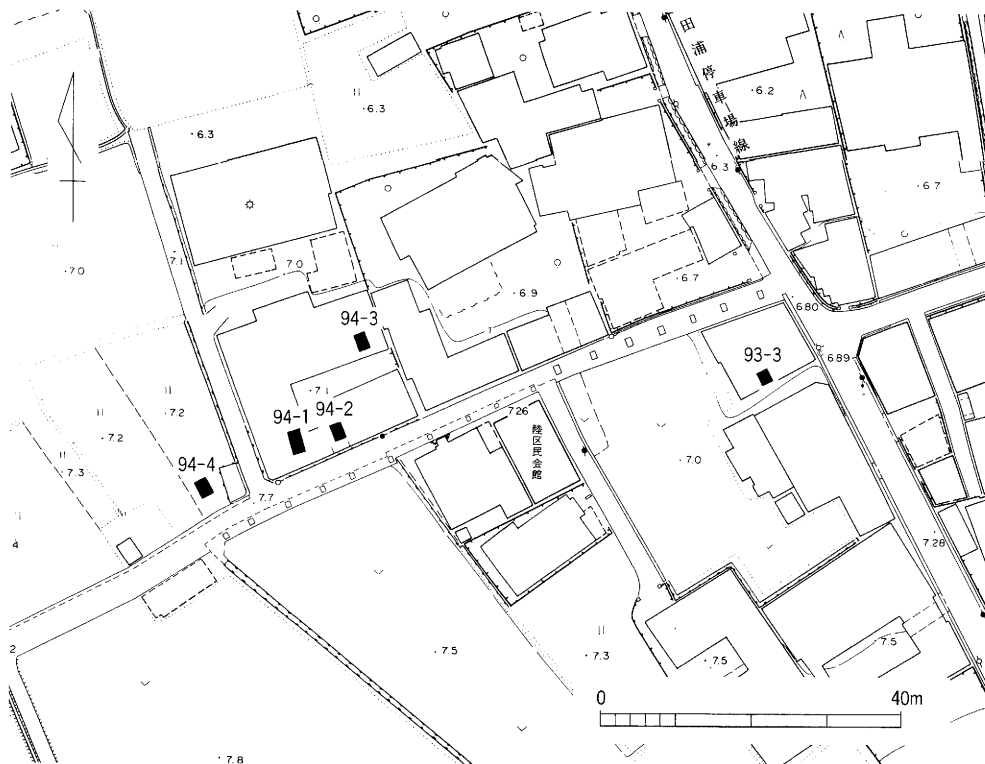
1. 位置（第24・25図）

調査区は遺跡の中央からやや北寄りに位置する。調査区の周辺は遺跡内でも調査の相次いでいる地点で中世の遺構や遺物包含層のほか、弥生時代の石鏃などが確認されている。地形分類上では洪積段丘の縁辺に立地している。

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 8・32）

ごく最近に施された盛土を除去すると、さらに2層の盛土層が認められる。これらの盛土の下に60cmほどの厚さで基本的に複数の耕作面が認められるが、トレンチの北西側では攪乱状に黒色土が介在する所もある。この黒色土には小さな礫が多量に含まれ、一見すると焼土のようである。周辺での聞き取りによれば、むかしは牛の餌をつくるための竈があったらしく、その竈に伴うものなのかもしれない。

これらの黒色土や耕作土の下には灰褐色土や明赤褐色の礫層がある。これらは整地層と考えることができるもので厚さは40～50cmを測る。また黒色土の下でのみ、これらの整地層が攪乱を受けたと考えられる赤褐色土の混入する灰黄



第25図 岡田遺跡94-1・94-2・94-3・94-4・93-3区地形図

褐色土層が認められる。

整地層の下ではトレンチの東壁に添って地山である黄褐色の礫層があり、残りは暗灰褐色の粘土層が拡がっている。この粘土は後述する落ち込みの埋土であり非常に粘性が強く、遺物などが多量に含まれるものである。40～60cmの層厚を測るこの層の下には緑灰色礫の地山が拡がる。

遺物は暗灰褐色粘土層から出土した。

3. 遺構（P L. 8・32）

検出された遺構は落ち込み1カ所である。耕作面と考えられる灰黄褐色シルトやにぶい黄褐色土の上面でも精査を行ったが、遺構が検出されたのは地山面のみであった。

落ち込みはトレンチの4分の3以上を占め、その北端と西端は調査区外へと拡がる。検出長は南北に2.5m、東西に1.5mを測り、全貌はわからないが南北

に伸びるいびつな長方形をしているものと考えられる。深さは40～45cmを測り、断面形状は逆台形をしている。遺構の埋土は一層で暗灰褐色粘土である。この粘土は非常に粘りけが強く、水分を多く含んだ状態にあったことを示唆するものであろう。また底部では緑灰色の礫が露呈し、同じく地山が還元状態にあった事を示している。出土した遺物は青磁碗や瓦、土師器や瓦器などの他、多量の植物遺体も含まれていた。

遺構の一部分の検出に留まったため、その全形もさることながら、遺構の性格についても推測の域を出ない。耕作に伴うため池や野井戸のようなものであろうか。

4. 遺物 (P L. 11・44)

落ち込みから出土した遺物には多様なものがあるが、図化できたものは4点であった。図化したもの以外では瓦器や瓦の出土があった。

17は瓦質の羽釜である。口縁部から鋳部までの破片で、復元口径は26.6cmを測る。肩部よりやや内傾しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部は平坦に仕上げられる。口縁外部には明瞭な段が巡らされている。口縁内面はハケ調整の後、ナデによって仕上げられている。胴部外面はわずかにケズリの跡が残る。

18は瓦質の甕である。復元口径は32.4cmを測る。緩やかにくの字を描き、端部を丸くおさめる口縁部を持つ。内面はハケ調整で、また外面にはタタキの痕跡が残る。

19は青磁の碗である。高台から体部までの破片で、高台径は5.0cmを測る。火中しているため本来の釉色を失っているが、見込み部と高台内部に露胎を持つ。底部から体部にかけて蓮弁文が施される。

20は土師質の真蛸壺である。口縁部以外を欠くもので、復元口径は15.2cmを測る。頸部にユビオサエの跡が残る。

第3節 94-2区の調査

1. 位置（第24・25図）

調査区は94-1区と同じ区画であった所で、同区からは東に4m足らずの距離しかない。地形分類上でも同じく洪積段丘の縁辺部に立地しているものと思われる。

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 8・32）

94-1区と同様に盛土が施されており、盛土を除去するところでは現代の耕作土があらわれる。耕作土の下には地山に至るまでに3時期以上の耕作面が数えられる。旧耕作土のうち、最下層にあたる灰褐色土層から下では中世に属する遺物が少量出土した。この灰褐色土層の下には地山である明黄褐色粘土が混じる灰褐色土があり、明黄褐色粘土へと至る。地山面で遺構が検出された。

ここで注目しておきたいのは隣接する94-1区と地山面の様相が大きく異なることである。1区で検出された地山は非常に軟弱な礫層であり、調査中もすぐに崩れてしまうほどであったのに対し、本調査区で検出された地山はしっかりとした粘土層であった。この違いが直に段丘の縁辺を示すとはいえないが、周辺の微地形の復原をおこなうための貴重なデータが得られたといえよう。

3. 遺構（P.L. 8・32）

94-1区と同様に耕作面ごとに精査を繰り返したが、遺構が明確に捉えられたのは地山面のみであった。検出された遺構はほぼ東西に伸びる肩を持つ落ち込みである。東西の端は調査区外に伸びるため全形はわからないが、検出された一辺は直線的に伸びている。検出長は南北に1.5m、東西に1.4mを測る。底部はフラットで、深さは10～15cmを測る。埋土は基本的に1層で、暗灰褐色粘土である。トレンチの北隅部では暗灰褐色粘土層の下に灰色シルトが認められる。埋土からは遺物が出土した。

この落ち込みは耕作に伴う段などの性格が与えられるが、周辺にも痕跡となるような地割りは認められず、確証は得られない。

4. 遺物（P L. 11・44、第26・27図）

図化し得た遺物は全部で6点ある。このうち21～23・25は落ち込みから出土したものであるが、24は第Ⅳ層の灰褐色土から出土したものであり、Aについては調査地にて採集したものである。

21は瓦質のすり鉢である。口縁部から体部にかけての破片で、復元口径は30.0cmを測る。口縁端部は内外面ともにヘラケズリによって平坦に仕上げられる。全体に摩滅が激しく、またよく使用されたものであろうか内面にはわずかに掻目が認められる。

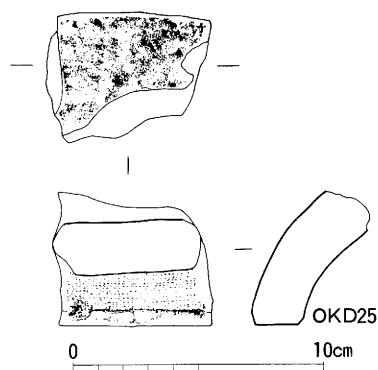
22は土師器の小皿である。復元口径11.0cmを測るもので、底部は欠損している。底部から口縁部まで緩やかに内湾しながら立ち上がるもので、全体に丁寧なヨコナデで仕上げられている。内外面ともに乳濁色を呈しており、非常に精緻な胎土を持つものである。市域でもよく出土し、いわゆる「根来の白土器」と呼ばれるものである。

23は土師質の真蛸壺である。体部から底部を欠くが、復元口径は11.4cmを測る。内外面ともにユビオサエの跡が顕著に残る。

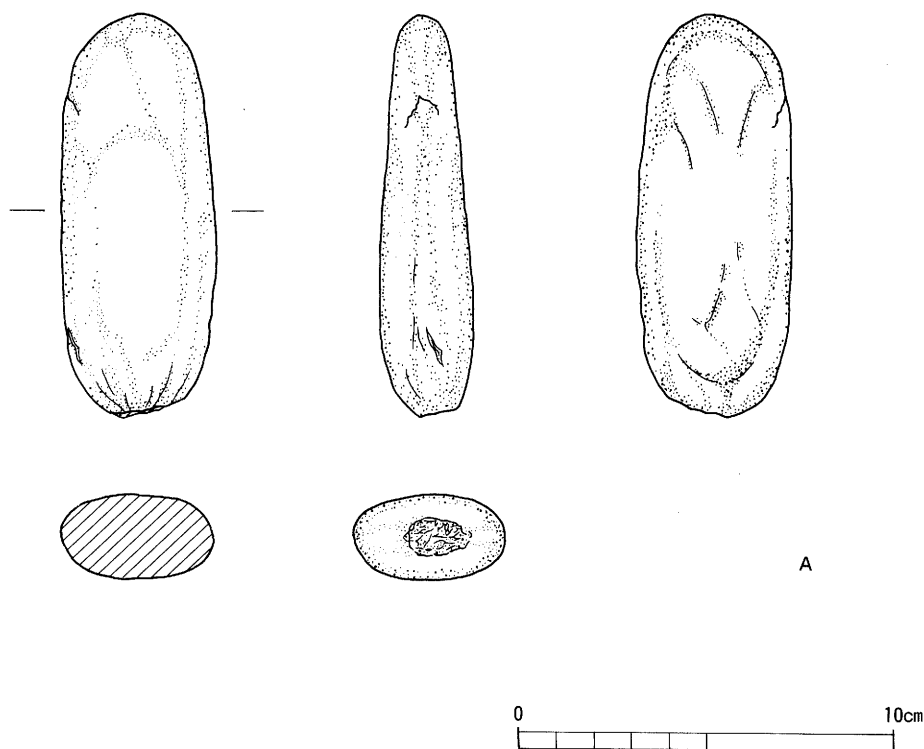
25は丸瓦である。側縁部のみの破片である。凹面には布目が顕著に残っており、側縁はヘラケズリによって仕上げている。

24はすり鉢である。片口を持つもので、内面には掻目が残る。いわゆる堺すり鉢と考えられるものである。

Aは敲石である。材質は砂岩で、長さ10.7cm、幅4.1cm、厚さ2.2cm、重量156gを測る。断面は扁平な楕円形を呈しており、端部一面にのみ集中して敲打痕が認められる。



第26図 岡田遺跡94-2区
出土の丸瓦



第27図 岡田遺跡94－2区採集の石器

第4節 94－3区の調査

1. 位置（第24・25図）

調査区周辺は岡田遺跡においてここ数年の間に多数の調査が行われている地点で、中世の遺物・遺構が検出されている。遺跡内では中心からやや北側に位置しており、地形分類上では洪積段丘低位面に立地している。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 9・33）

現況は更地となっており、周囲の状況からかなりの盛土が施されている様子が看取された。層序は第Ⅰ層・盛土（約50cm）、盛土が施される最近まで地表に露出していたと考えられる第Ⅱ層・暗灰色の耕作土（約10cm）の順に確認される。第Ⅲ層は灰色混じり褐色土、第Ⅳ層が黄褐色土がそれぞれ約10cmの厚さ

で堆積する。第Ⅴ層は黄褐色混じり灰色砂質土（約10cm）、第Ⅵ層の地山は調査地西側で行われた数回の調査で確認された粘土系とは様相を異にし、礫混じり明黄褐色土であった。

また、これまでの調査では下層ほど水分を多く含んだ土層となる傾向があったが、当調査区ではいずれの層も湿気が少ないことが確認された。

3. 遺構（P L. 9・33）

地山面において東から南にむかってカーブする落ち込みを確認した。トレンチが小規模のためトレンチ全体の約1/3を遺構が占めていることから全形は確認できないものの、かなり広範囲に広がりをもつものと思われる。埋土は茶褐色粘質土で、深さは13cmを測る。94－1区で検出された落ち込みと関連をもつものであろうか。

4. 遺物（P L. 11・44）

落ち込みから復元口径が19.2cm（25）、22.6cm（26）を測る2点の瓦質羽釜が出土した。25・26ともに口縁部が内傾し、口縁端部は平らに仕上げる。体部には25が水平にのびる鏝、26は上向きの鏝をつける。体部外面にはヘラケズリを施す。また25の体部外面には煤の付着が著しく、よく使用されていたことがうかがえる。胎土には0.5～4mmの白・黒色砂粒を含み、焼成はほぼ良好である。

第5節 94－4区の調査

1. 位置（第24・25図）

調査地は遺跡のほぼ中央にあり、94－1・2区とは隣接している。特に沼地状の落ち込みが検出された1区とは里道を挿んで数メートルの距離しかない。そのため、今回の調査では1区において検出された落ち込みが東側に拡がるかどうか期待された。

2. 層位と遺物の出土状況（P L . 9 ・ 33）

本調査区では先の2つの調査区とは大きく異なる層序が確認された。1 m 近くある盛土を除去すると茶褐色混じり灰褐色土があり、その下には灰褐色土があるが、この層には地山土がブロック状に含まれる。その下は地山である明黄褐色粘土が広がる。地山はしっかりとした粘土層であり、若干の湧水があるものの東側に隣接する1区の地山の様相とは大きく異なる。

地山の上面で遺構が検出された。またいずれの層からも遺物は出土しなかった。

3. 遺構（P L . 9 ・ 33）

地山の上面で南南東から北北西に向かって伸びる肩を持つ落ち込みが検出された。肩部の両端が調査区外に伸びるため平面形状は判然としない。検出長は長軸2.2m、短軸1.4mを測る。断面形状は低い逆台形で、肩部からの深さは20 cm 前後である。埋土は一層で、茶褐色土と地山のブロックを多く含んだ灰褐色土である。遺物はまったく出土しなかった。

遺物の出土がないため遺構の時期は勿論のこと、性格も判然としないが、耕作に伴う段と捉えられる。また本調査区では地山以外の土層がすべて灰褐色系の土であり、他の土のブロックを多く含むことから攪乱に近いような掘り返しがあったとも考えることができる。

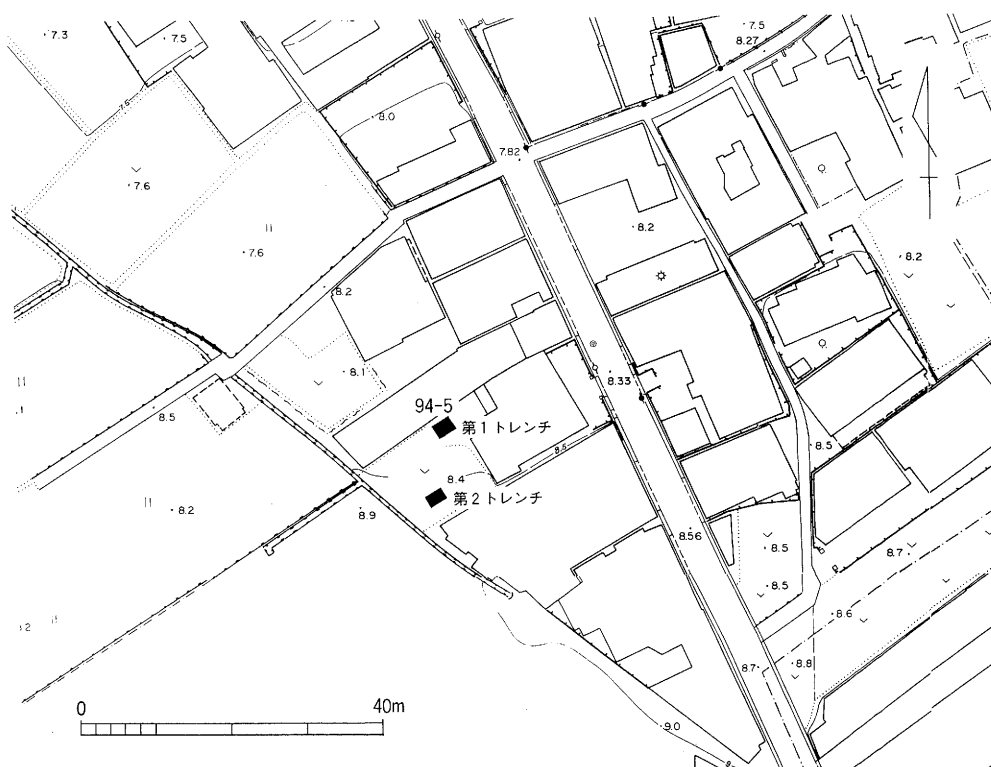
第6節 94－5区の調査

1. 位置（第24・28図）

調査区は、遺跡の南東側に位置し、岡田集落と北野集落を結ぶ府道大苗代岡田停車場線に面している。地形的には、樫井川左岸に広がる広大な段丘面の一部で、低位段丘面に立地するものと考えられる。トレンチは2カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L . 9 ・ 34）

第1・2トレンチともまったく同じ層位を示すことが確認された。解体後の



第28図 岡田遺跡94-5区地形図

建物の盛土を20～30cm除去すると、褐色の粗砂層が露呈する。旧建物の整地土と考えてよいだろう。この下層には、暗灰褐色や暗褐色の粘性の強いシルト層がそれぞれ約10cm程確認された。これらには、クサリレキが少量含まれており、岡田遺跡内のほとんどの地区で認められる濃厚な旧耕土層は確認されなかった。さらにこの下層には褐色のさらに粘性の強いシルト層が見られる。部分的には黄褐色のところもあり、段丘面上の地山と考えられるが、この地山もそのほかの岡田遺跡の調査とはやや異なる結果となっている。いずれのトレンチからも、遺構・遺物は確認することはできなかった。

第7節 93-3区の調査

1. 位置 (第24・25図)

調査区は、遺跡の東端部分にあたる。ここより西側の地域では、岡田遺跡の

中でも最も盛んに調査が行われ、分厚い包含層や、さまざまな遺構・遺物が確認されている。当調査区は、その中でも最も東にあたると言えるだろう。地形的には、他の調査区と同じく、低位段丘面上に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 9・34）

層位は、非常に単純であった。盛土を約40cm除去すると、すぐに地山である黄褐色のシルト層が露呈した。上からの建物の基礎によりかなり地山は攪乱されている。地山のレベルは約7.7mを測り、これまでの付近の調査の地山レベルとさほど高さに差はないが、包含層がまったく確認されなかったことにより、遺跡の範囲をほぼ限定することができるだろう。遺構・遺物は確認することはできなかった。

註 ① 泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』（1992）

② ①と同じ。

第11章 大苗代遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2、第29図）

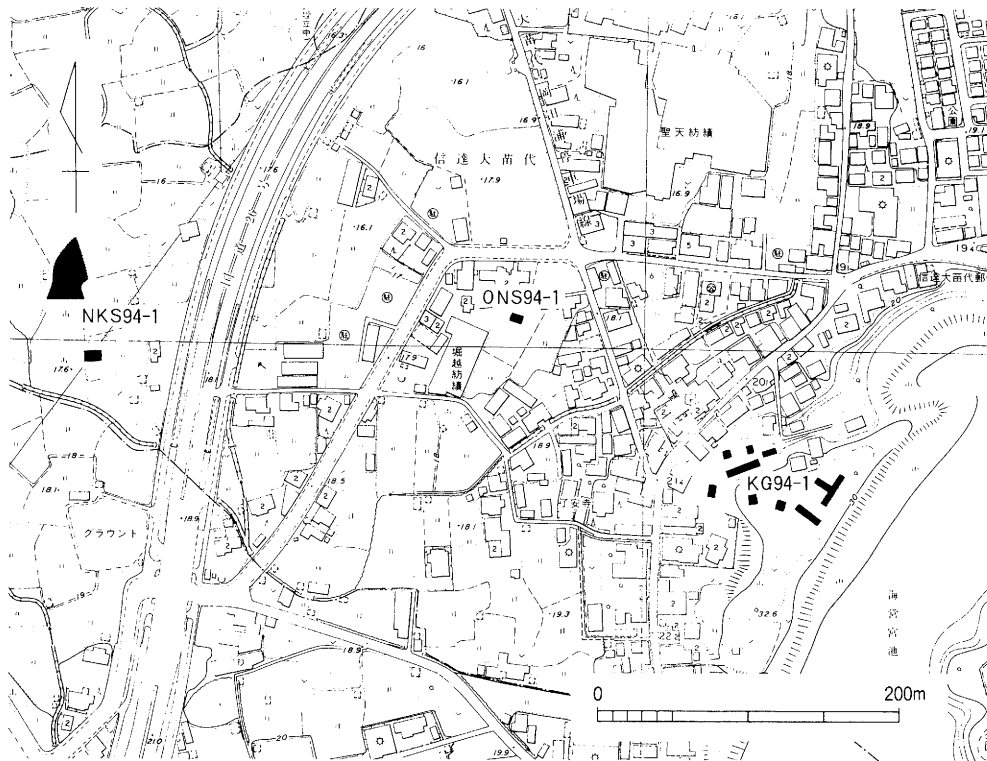
泉南市東部に位置する大苗代遺跡は泉南市と泉佐野市の境界をなす檜井川左岸にひろがる広大な低位段丘上に立地している。

当遺跡の発見は比較的新しく、その発端は平成3年に今回の調査区北側で行われた試掘調査の際に遺構・遺物包含層が確認されたことによるもので、その後、本調査が行われた際に、ピット、溝、土坑などが検出され、また多数の出土遺物から当遺跡が平安時代後期を中心とした集落遺跡であることが判明した。しかしここ数年の間に数回の調査が行われたものの遺跡の実態はそれ以降さほど明らかにされていないのが現状である。

周辺の遺跡を見ると当遺跡北東に白鳳時代に建立された海会寺跡が所在し、周辺一帯が古くから人や物の往来があったことを物語っている。またすぐ南側には中世に建立され、織田信長の根来攻めの際に焼失したと伝えられる仏性寺跡が位置し、北側には最近の調査で平安時代の大型の掘立柱建物が検出された北野遺跡、近隣には中世以降盛んになる熊野詣に関連した厩戸王子跡も所在することなどから当遺跡周辺が平安時代末から中世にかけて大きく開発されたことが推測される。

さらに、最近では当遺跡と同じく低位段丘上に位置する遺跡が相次いで調査され、岡田西遺跡では水田開発に伴う大規模な灌漑用水路、耕作痕が、中小路南遺跡、中小路西遺跡では生産に関係すると考えられる大型の水路、耕作痕が検出されるなど、当該期における集落と生産の場が徐々に明らかにされつつある。

今後、当遺跡の更なる内容究明とともに近接する遺跡との関連について総合的な研究が大きな課題といえる。



第29図 海宮宮池遺跡及び中小路南遺跡及び大苗代遺跡調査区位置図

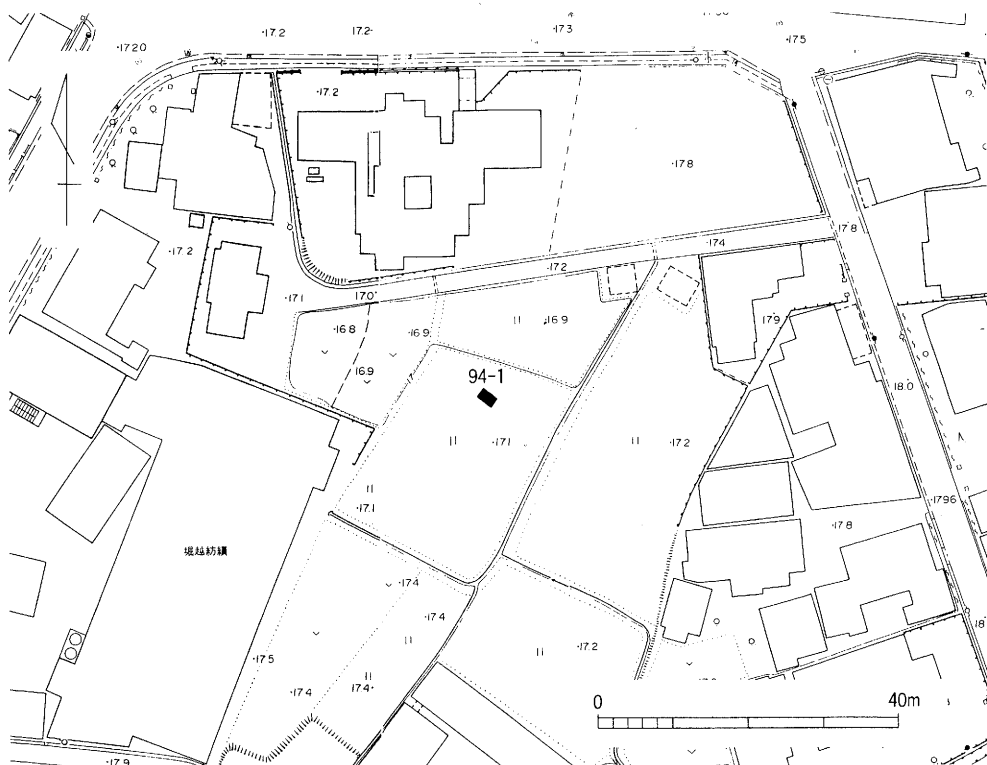
第2節 94-1 区の調査

1. 位置 (第29・30図)

調査区は遺跡中央からやや南側に位置している。地形分類上では洪積段丘低位面に位置している。調査地の現況は更地となっており、周辺の耕作地の状況からかなりの盛土が施されていることが予想された。トレンチは1カ所を設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 9・35)

層序は第Ⅰ層・盛土(約1m)、第Ⅱ層・黄褐色土(15cm)が認められる。第Ⅲ層は灰色混じり黄褐色土であるが、灰色の濃淡によってⅢa層・Ⅲb層の2層に細分される。Ⅲb層のほうがやや灰色が濃く、層厚はともに約10cmを測る。第Ⅳ層は暗褐色混じり黄褐色土である。トレンチ北西では層厚約10cmを測



第30図 大苗代遺跡94-1区地形図

るが、南東方向にしたがって薄く堆積し、トレンチ南東隅では確認されない。第Ⅴ層は明黄褐色粘土である。層厚約10cmを測り、続く第Ⅵ層のマンガン混じり褐色粘質土（約10cm）に対する整地土の可能性が考えられる。第Ⅶ層は地山の暗黄褐色粘土で多量の湧水をともなう。遺構は確認できず、遺物は第Ⅲ層から土師器の細片が微量出土したが図示できなかった。

第12章 兎田遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L. 1・2、第31図）

泉南市内においては、ほぼ南北、山側から海側へ何本かの丘陵が連なって走っており、それらに区切られた部分がそれぞれ独自の地域性を持って発展したとも言えるだろう。この中において兎田遺跡は、最も泉佐野市よりに走る「檜井丘陵」^①によって区切られ、さらに東側を檜井川によって隔絶された兎田集落をほぼ取り囲むようにして存在する。地形的には、この檜井川左岸においてはほとんど見られない沖積段丘や氾濫原上に立地しているものと考えられている。

遺跡発見の契機は、集落内の開発においての試掘調査によって中世の包含層が確認されたことによるものである。発見からすでにかかなりの年数が経過するものの、この遺跡の実態を把握する程の大規模な調査は行われていない。これ



第31図 兎田遺跡調査区位置図

は、遺跡の範囲が現在の兎田の集落とほとんど一致し、開発がほとんどなく小規模な調査に終始せざるを得ないことから来ているのである。

周辺の遺跡に目を転じると、檜井丘陵上には、縄文前期の土器が出土したフキアゲ山東遺跡、弥生時代の高地性集落である新家オドリ山遺跡、さらには、新家古墳群、兎田古墳群など泉南市域ではほとんど見られない古墳が数多く集中する地域でもある。また、檜井川を挟んだ泉佐野市では、縄文時代からの複合遺跡である三軒屋遺跡など、さまざまな時代にわたる数多くの遺跡が兎田遺跡を取り囲んでいる^②。

今後これらの遺跡の動向を念頭に置いて、兎田遺跡との比較検討を含めて小規模であってもさらに入念な調査が必要となることであろう。

第2節 94-1区の調査

1. 位置（第31図）

調査区は、遺跡の東端にあたり、東に約50mで、泉佐野市との市境になる檜井川に至る。地形的には檜井川の自然堤防上または氾濫原に立地するものと考えられる。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 9・35）

盛土を約30cm除去すると、暗灰色の礫層が露呈する。拳大の礫が大量に詰まっている。また、トレンチ南側では、これを切るようにして、礫層や砂層が約60cm水平の堆積で認められた。これらの下層には、同じく暗灰色であるが礫の径のやや小さい礫層が、北から南に下がるようにして確認された。かなり目まぐるしく層位が入れ替わっており、檜井川の氾濫による堆積作用によるものと考えてよいだろう。遺構・遺物は、確認されなかった。

註 ① 泉南市史編纂委員会『泉南市史 通史編』（1986）

② 泉南市史編纂委員会『泉南市史 史料編』（1982）

第13章 まとめ

平成6年度の文化財保護法に基づいた埋蔵文化財包蔵地内における発掘届出および通知は、第1表に示したとおり平成7年2月28日現在で63件を数える。

この中で市内遺跡群の各地において28件の発掘調査がおこなわれた。その内訳は第2表に示したとおり男里遺跡4件、光平寺跡1件、キレト遺跡1件、天神ノ森遺跡1件、長山遺跡2件、前田池遺跡1件、幡代遺跡3件、岡中遺跡2件、本田池遺跡1件、海宮宮池遺跡1件、中小路西遺跡1件、岡田遺跡5件、大苗代遺跡1件、兎田遺跡1件である。個人住宅建設等に伴う調査が多くを占め、けしてその調査面積は大きいとは言えないものである。しかし個々の調査で得られた情報はそれぞれ大きな意味を持つものであった。

なお、本書では前年度未報告分の男里遺跡2件(93-7・8区)、光平寺跡2件(93-2・3区)もあわせて報告することができた。以下、簡単にまとめてみたい。

男里遺跡の94-1区はこれまでの調査でも多くの遺構が検出されてきた地点である。今回はさらに掘立柱建物となる可能性のあるピット群が確認された。また、94-2区では中世の所産となる耕作痕が、検出された。

93-7区はこれまで遺構検出例が少ない地点の調査となったがここでもピットが確認され、今後の集落の範囲確定のための大きな情報を得ることができた。

昨年来調査が集中して行われている光平寺跡では、瓦窯に関連するとも考えられる焼土がつまった遺構や近世の地鎮遺構、および整地の状況などが確認された。また、寺域を推定しうる情報も得ることができた。みな光平寺の創建当時にまでさかのぼりうるものではないが、その具体像をはかり知るための重要な情報と言えるだろう。

長山遺跡の調査は、発見以来初の発掘調査となった。94-1区では中世に属する耕作関連遺構が検出された。また、これに隣接するが一段高いところにある94-2区では、まったく層位的な状況が異なっていた。両調査区は沖積段丘面と洪積段丘中位面との境付近に立地しており、地形的に一段高くなり水利に不便な洪積段丘中位面の開発時期を考える上で重要なデータとなった。もちろん

ん当地の開発については、至近といえる距離に男里遺跡が位置し、その東縁に展開していた中世集落(現在の馬場集落周辺)が存在するため、今後は両者の関係にも着目する必要があるだろう。

前田池遺跡もやはり過去の調査例は非常に少ないものだが、今年度の調査では旧地形復原に利する情報が得られた。しかしデータ不足の感はやはり否めず、今後の情報増加を待ちたい。

幡代遺跡では94-2区において近世の所産となる遺構群が検出された。当地は本文中にもあるように遺跡内でも近世遺構が集中している部分にあたる。今回の遺構確認により遺構分布範囲が新たに広がりをもつこととなった。このことは、他調査区の成果とあわせ、複雑な旧地形が推定されている幡代遺跡の具体像把握の一助となった。

岡中遺跡では2件の調査が行われた。中世寺院や集落などに直接関連する遺構などは確認できなかったが、その分布範囲を把握していくうえで貴重なデータが集められた。

さて、市域の中央部の調査に目を転じよう。

市域中央部分ではこれまでほとんど遺構・遺物包含層は確認されていなかった。しかしここに紹介したように本田池遺跡では時期は確定できないものの、溝が確認された。水路としての機能を持つものとおもわれるが、この主軸方向は現在の地割とは方向を異にしており、消滅した過去の地割を追求するための材料となろうか。今後の情報の蓄積が期待される。

近年あらたに市域の東部の洪積段丘低位面での調査があいつぎ、ぞくぞくと情報が集積されつつある。

中小路西遺跡もこうした遺跡のひとつで、先に中世の灌漑用水路が発見されている。今回はその近接地において、同じく中世のピットや小水路と思しき溝、耕作痕跡などが確認された。これらは、不分明であった段丘面の開発の状況をビビッドに我々に伝えてくれるものであった。

岡田遺跡の94-1~4区は、これまでに岡田遺跡内でももっとも調査が集中して行われている地点での調査である。ここではまたもや遺構を確認することができ、集落あるいは耕作地の範囲を確認しつつある。また、94-5・93-3

区では遺跡内で普遍的に認められる旧耕土層や包含層が認められないなど、遺跡の範囲をより確実なものとするデータが集められた。

これまで比較的調査件数の少ない大苗代・兎田の両遺跡でも調査がおこなわれた。ここでは明確な遺構・遺物包含層は確認できないものの、各地での堆積層の状況などを観察することができた。

以上が各遺跡別の成果である。

今年度、平成6年には泉南市域の歴史上、大きなエポックが生じた。関西国際空港の開港である。残念ながら日々肌でその恩恵あるいは何らかの影響を感じることは、正直に言って市域に住まう筆者ですらない。遙か遠く海の上を大型ジェット旅客機が飛来するのを眺めて、はじめてその存在を実感する程度だ。認識不足とのそしりをまぬがれないかもしれないが。

しかし、おそらく私が感知できない部分で有形・無形の様々な影響が生じているだろうし、目に見えぬ恩恵を被っているのだろう。また長い時間を隔てればきっと大きくなにかが変化していくのだろう。将来編まれるであろう当地の史料に記述するためにも、今年度の出来事をあえて「大きなエポック」と表現しておきたい。

さて、かように日常生活ではその影響を認識しづらい新空港の存在だが、その関連事業はこれまでに市域の文化財に大きな影響を与えてきた。開発の急増による調査の増加とその破壊である。ここ10年あまり調査件数は急激に増加し、その面積も拡大の一途をたどってきた。調査の成果が増加すると同時に、多くの文化財や歴史的景観は損なわれてきたのだ。本報告の巻頭でも述べたが、これからもこの状況はきっと続くだろう。

しかし幸いなことに、この10年あまりのうちに市域に所在する白鳳寺院海会寺跡が国史跡に指定され、その保護・活用を目的とした整備事業も行うことができた。これも関係者、関係機関のみなさまのご支援の賜物と感じている。もちろん行政発掘にたずさわる者皆共通のことだと思うが、空港関連事業にも参加し後に市の行政に関わってきた若手職員たち、彼らの日夜を問わない努力もその陰にひそんでいることも最後に記しておきたい。

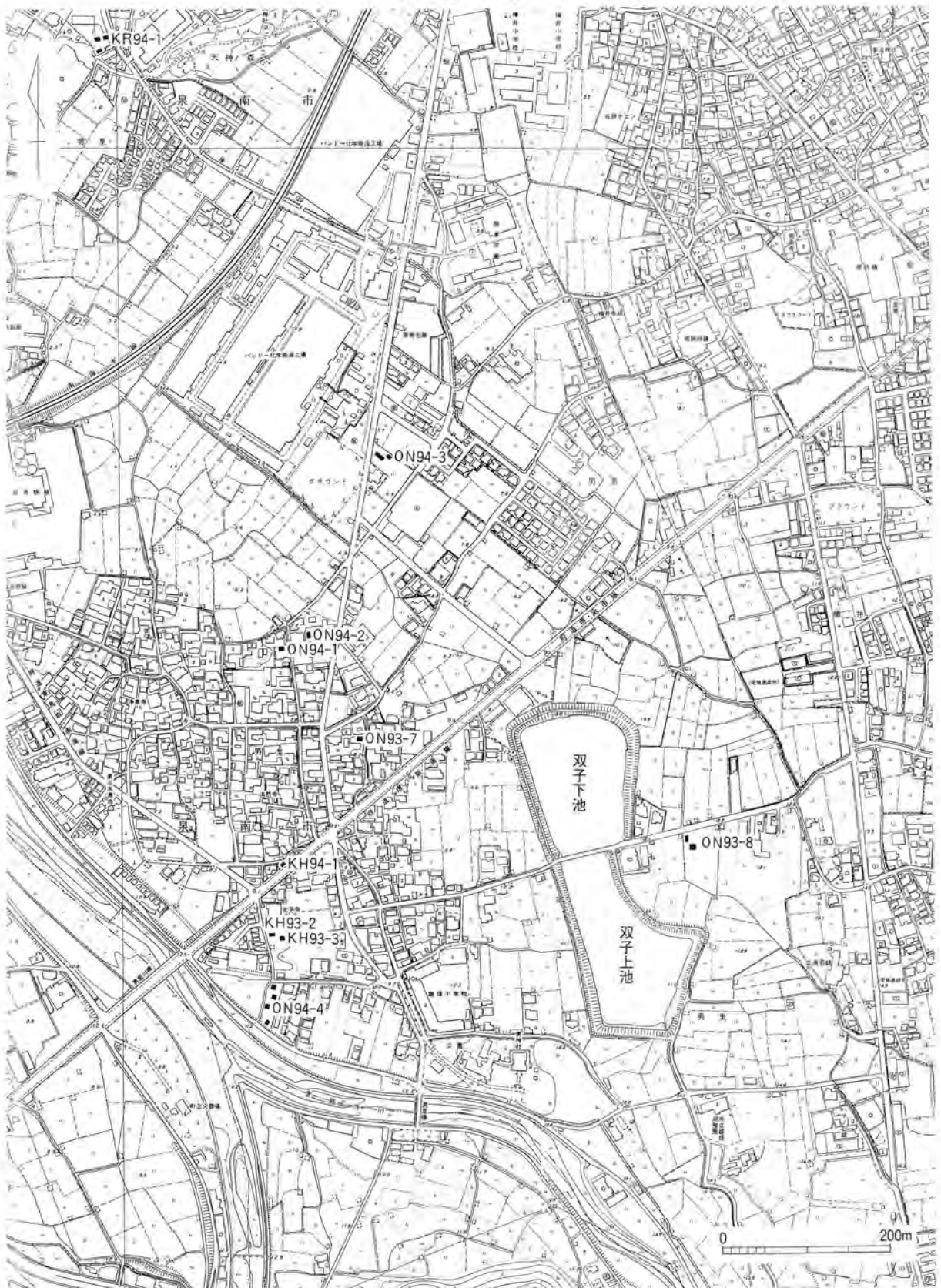
第5表 文化財一覧表

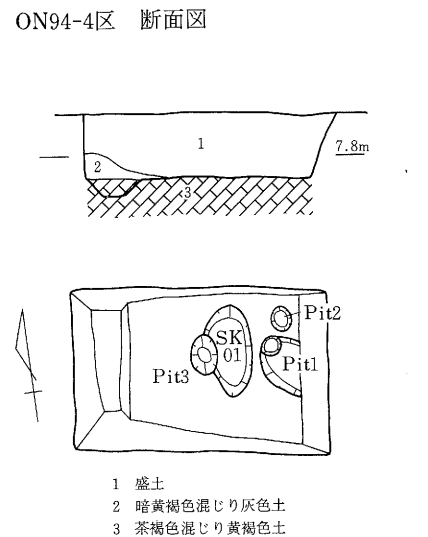
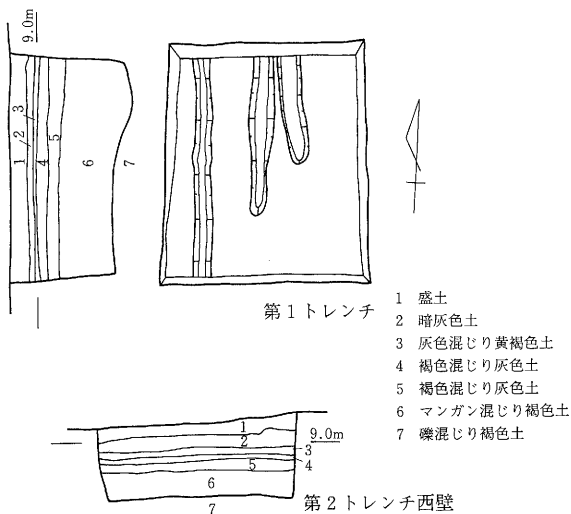
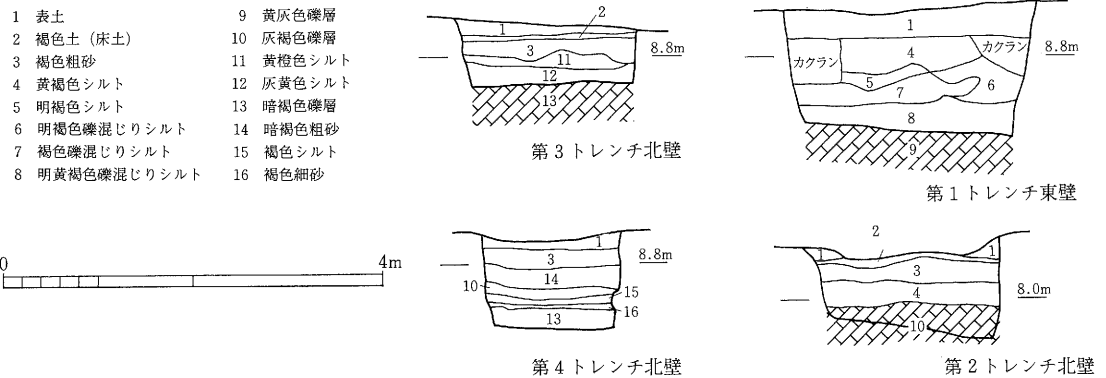
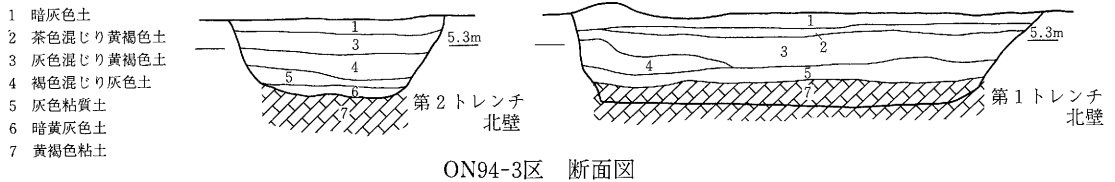
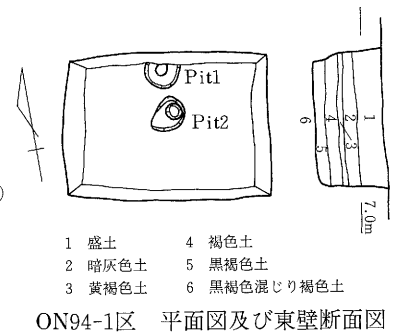
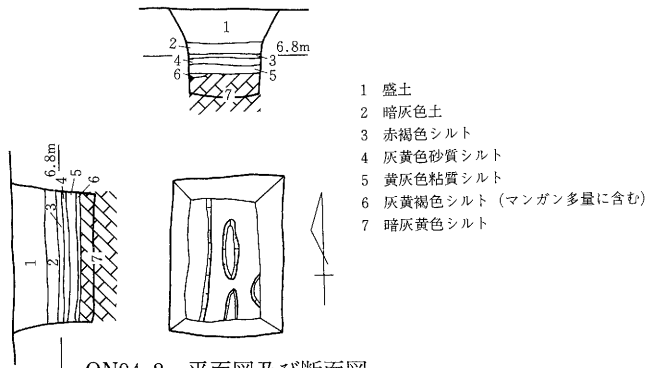
1	正法寺跡	46	北ノ前遺跡	91	樫井西遺跡	136	新家オドリ山南遺跡	181	岡中遺跡
2	小垣内遺跡	47	野々宮遺跡	92	藤波遺跡	137	フキアゲ山西遺跡	182	高田山古墳群
3	大谷池遺跡	48	総福寺天満宮本殿	93	樫井城跡	138	引谷池窯跡	183	岡中西遺跡
4	大久保B遺跡	49	宮ノ前遺跡	94	奥家住宅	139	兎田遺跡	184	雨山南遺跡
5	下高田遺跡	50	垣外遺跡	95	道ノ池遺跡	140	フキアゲ山東遺跡	185	福島遺跡
6	紺屋遺跡	51	屯田遺跡	96	岡ノ崎遺跡	141	フキアゲ山1号墳	186	尾崎海岸遺跡
7	口無池遺跡	52	八王子遺跡	97	中菖蒲遺跡	142	フキアゲ山2号墳	187	馬川北遺跡
8	東門寺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	98	岸ノ下遺跡	143	兎田古墳群	188	馬川遺跡
9	降井家屋敷跡	54	日根神社遺跡	99	諸目遺跡	144	池尻遺跡	189	下出北遺跡
10	大久保C遺跡	55	西ノ上遺跡	100	城ノ塚古墳	145	中の川遺跡	190	室堂遺跡
11	中家住宅	56	川原遺跡	101	禅興寺跡	146	岩の前遺跡	191	平野寺（長楽寺）跡
12	大久保A遺跡	57	母山遺跡	102	ダイジョウ寺跡	147	別所北遺跡	192	向出遺跡
13	五門北古墳	58	母山近世墓地	103	上之郷遺跡	148	別所遺跡	193	高田西遺跡
14	五門遺跡	59	向井山遺跡	104	向井代遺跡	149	高野遺跡	194	向山遺跡
15	五門古墳	60	鏡塚古墳	105	意賀美神社本殿	150	昭和池遺跡	195	高田南遺跡
16	大浦中世墓地	61	梨谷遺跡	106	向井池遺跡	151	上村遺跡	196	和泉島取遺跡
17	大浦遺跡	62	笹ノ山遺跡	107	三軒屋遺跡	152	狐池遺跡	197	雨山遺跡
18	甲田家住宅	63	土丸遺跡	108	川原遺跡	153	上野中道遺跡	198	内畑遺跡
19	久保B遺跡	64	土丸南遺跡	109	岡田東遺跡	154	芋掘遺跡	199	皿田池古墳
20	鳥羽殿城跡	65	雨山城跡	110	岡田遺跡	155	石ヶ原遺跡	200	正方寺遺跡
21	墓の谷遺跡	66	土丸城跡	111	氏の松遺跡	156	高倉山南遺跡	201	西畑遺跡
22	来迎寺本堂	67	下大木遺跡	112	座頭池遺跡	157	本田池遺跡	202	自然田遺跡
23	池ノ谷遺跡	68	大木遺跡	113	岡田西遺跡	158	上代石塚遺跡	203	玉田山遺跡
24	成合寺遺跡	69	稲倉池北方遺跡	114	新伝寺遺跡	159	信之池遺跡	204	玉田山古墳群
25	山ノ下城跡	70	大西遺跡	115	中小路北遺跡	160	滑瀬遺跡	205	玉田山須恵器窯跡
26	山出遺跡	71	松原遺跡	116	中小路西遺跡	161	六尾遺跡	206	寺田山遺跡
27	上瓦屋遺跡	72	中開遺跡	117	中小路遺跡	162	六尾南遺跡	207	黒田西遺跡
28	湊遺跡	73	末廣遺跡	118	坊主池遺跡	163	天神ノ森遺跡	208	鳥取北遺跡
29	壇波羅密寺跡	74	安松遺跡	119	中小路南遺跡	164	キレット遺跡	209	鳥取遺跡
30	壇波羅遺跡	75	長滝遺跡	120	北野遺跡	165	高田遺跡	210	鳥取南遺跡
31	佐野王子跡	76	植田池遺跡	121	一岡神社遺跡	166	男里北遺跡	211	黒田南遺跡
32	上町東遺跡	77	郷ノ芝遺跡	122	海会寺跡	167	戎畑遺跡	212	神光寺（蓮池）遺跡
33	市場東遺跡	78	日根野遺跡	123	大苗代遺跡	168	男里遺跡	213	三味谷遺跡
34	若宮遺跡	79	机場遺跡	124	仏性寺跡	169	光平寺跡	214	三升五合山遺跡
35	上町遺跡	80	棚原遺跡	125	海宮宮池遺跡	170	光平寺石造五輪塔	215	小口谷遺跡
36	俵屋遺跡	81	羽倉崎東遺跡	126	市場遺跡	171	男里東遺跡	216	井関遺跡
37	北尻遺跡	82	羽倉崎遺跡	127	向井山遺跡	172	長山遺跡	217	石田山遺跡
38	岡口遺跡	83	嘉祥神社本殿	128	新家遺跡	173	山ノ宮遺跡	218	西鳥取遺跡
39	中嶋遺跡	84	道ノ池遺跡	129	下村遺跡	174	前田池遺跡	219	戎遺跡
40	小塚遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	130	下村北遺跡	175	幡代遺跡	220	貝掛遺跡
41	十二谷遺跡	86	船岡山遺跡	131	下村1号墳	176	幡代南遺跡	221	金剛寺遺跡
42	丁田遺跡	87	岡本庵寺	132	新家オドリ山東遺跡	177	奥ノ池遺跡	222	塚谷古墳群
43	新池尻遺跡	88	田尻遺跡	133	新家オドリ山遺跡	178	林昌寺跡		
44	大坪遺跡	89	船岡山南遺跡	134	下村2号墳	179	林昌寺瓦窯跡		
45	市堂遺跡	90	夫婦池遺跡	135	新家古墳群	180	林昌寺銅鐸出土地		

図 版

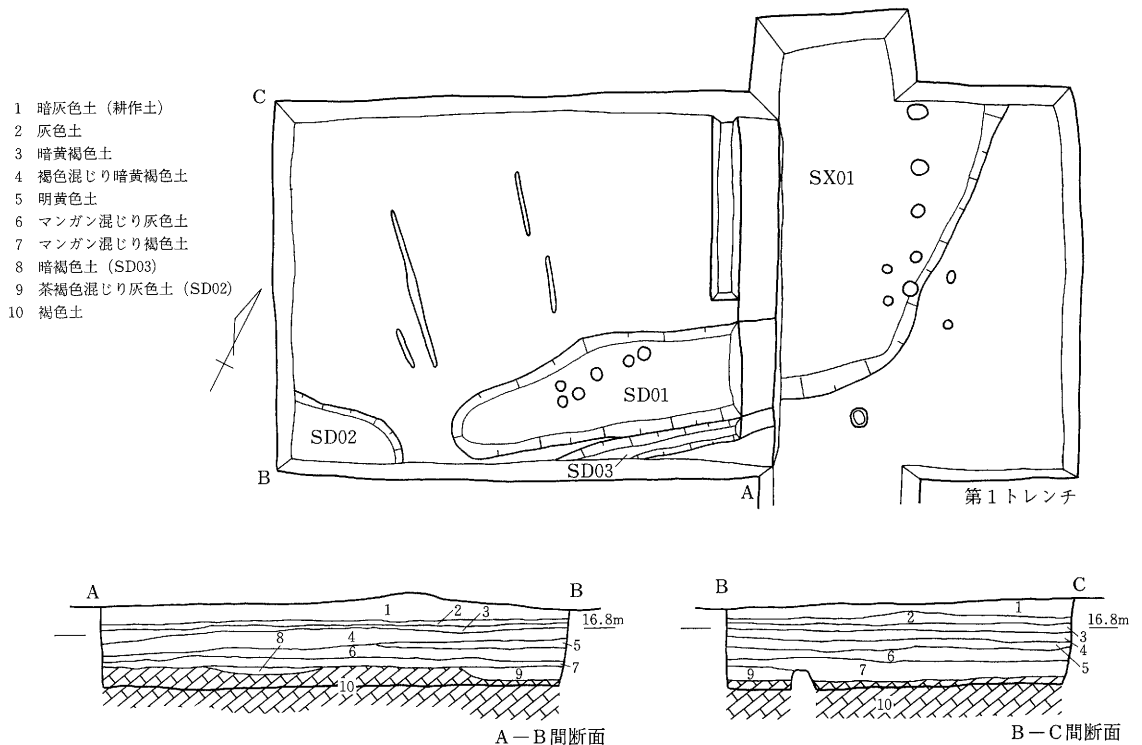
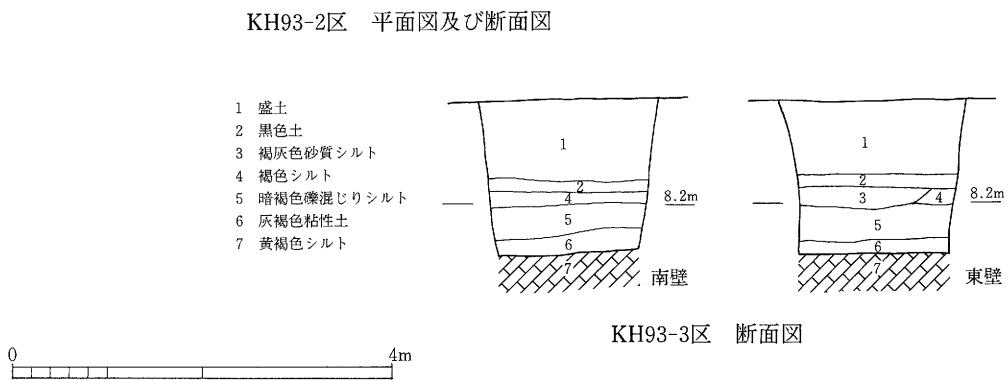
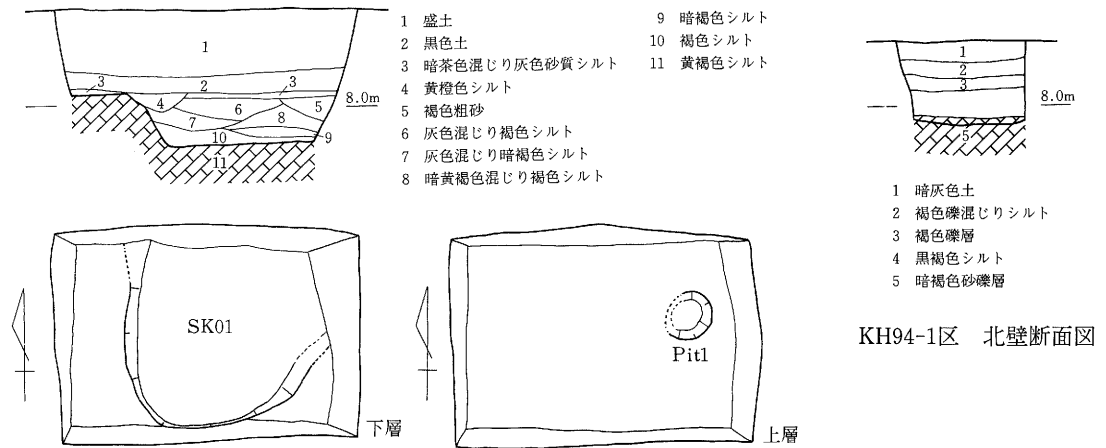


PL.3 男里遺跡・光平寺跡・キレト遺跡調査区位置図

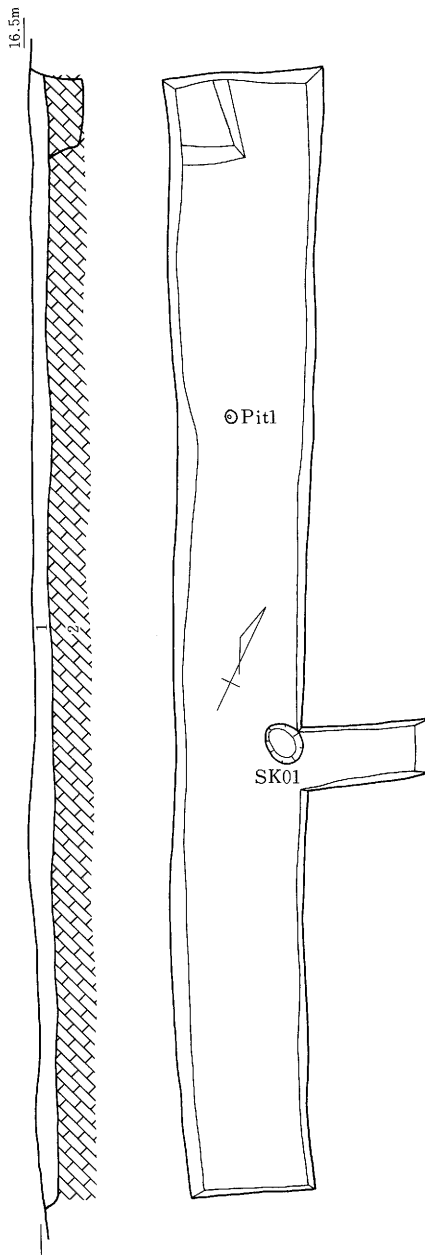




PL.5 光平寺跡調査区・長山遺跡調査区①

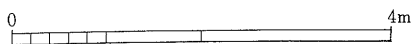


NG94-1区 平面図及び断面図

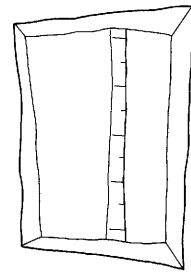
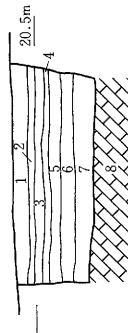
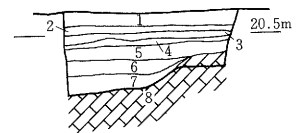


- 1 灰色土 (耕作土)
2 赤褐色粘性シルト

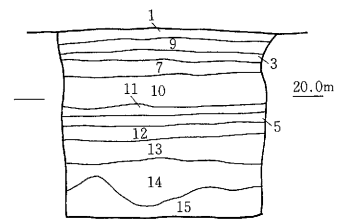
NG94-2区 平面図及び南壁断面図



- 1 暗灰色土
2 褐灰色土
3 灰黄褐色土
4 灰黄褐色土 (灰色濃い)
5 暗灰褐色シルト
6 黄灰褐色土
7 灰褐色土
8 淡黄褐色粘土
9 明黄褐色土
10 淡黄褐色土
11 暗灰褐色土
12 暗灰黄褐色シルト
13 暗黒灰色シルト
14 明黄褐色シルト
15 明黄褐色シルト (褐色濃い)

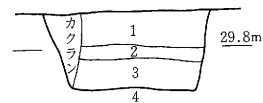


第1トレンチ



第2トレンチ北壁

MD94-1区 平面図及び断面図



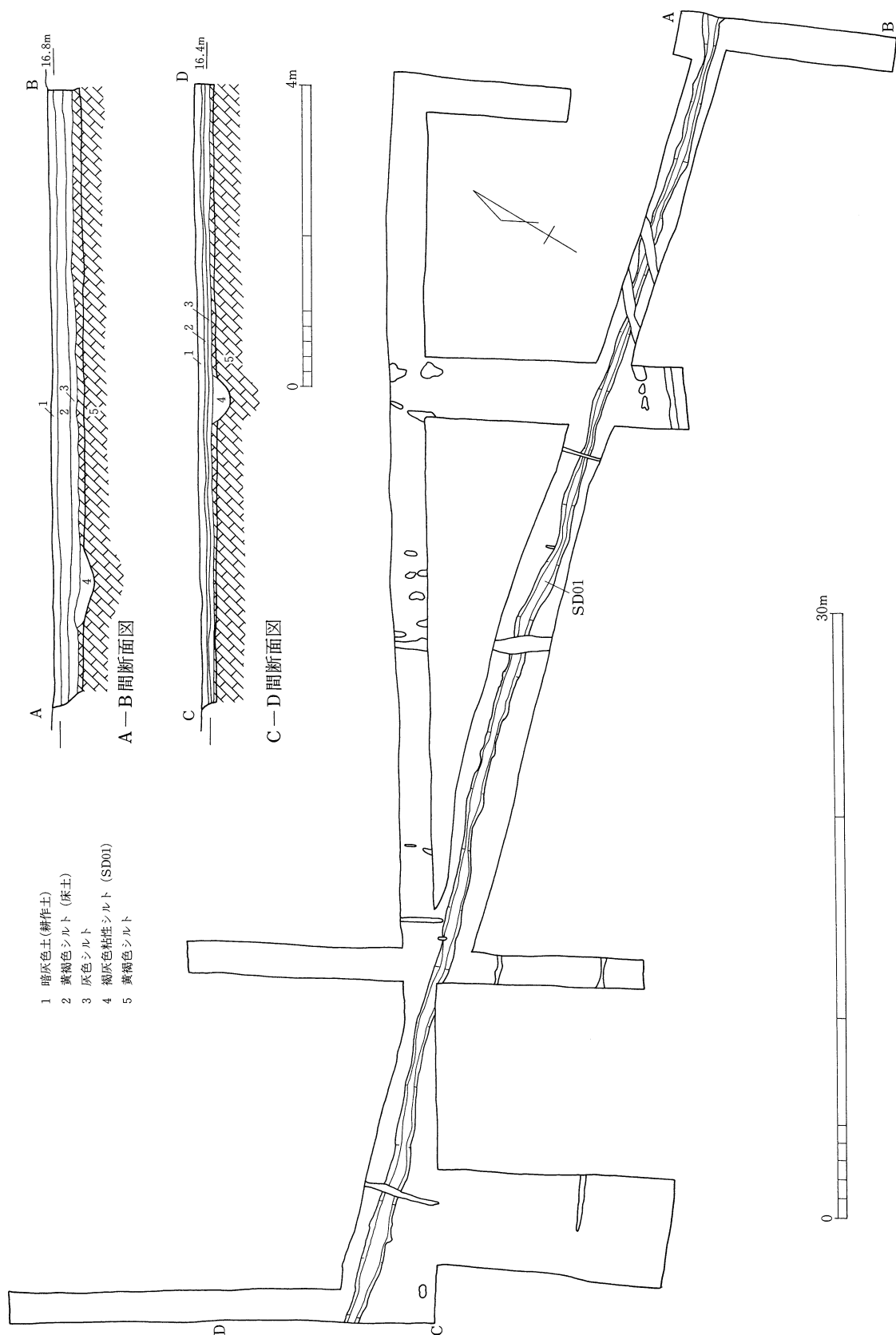
- 1 暗灰色土 3 茶褐色土
2 暗褐色土 4 礫混じり茶褐色土

OK94-1区 北壁断面図

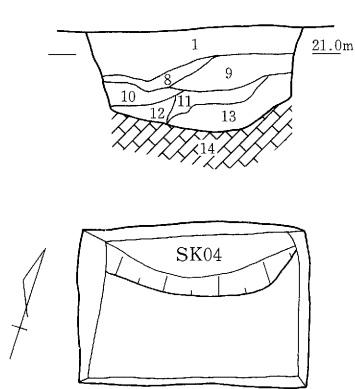


- 1 暗黒色土 6 黄褐色土
2 灰色混じり褐色土 7 灰色土
3 灰色混じり黄褐色土 8 茶褐色混じり黄色土
4 黄褐色土 9 暗褐色砂礫
5 黄褐色混じり灰色土

OK94-2区 北壁断面図

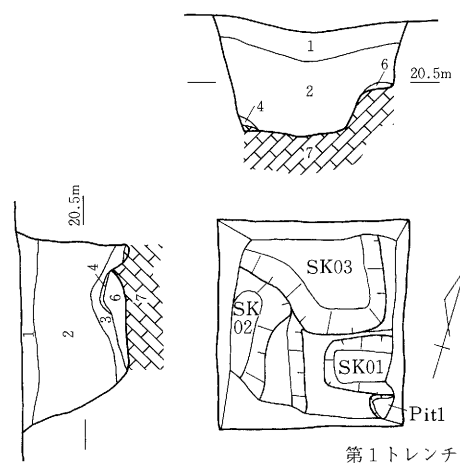


PL.8 幡代遺跡調査区・岡田遺跡調査区①



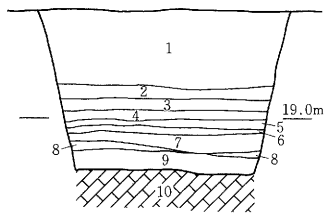
第2トレンチ

- 1 黒色土
- 2 褐灰色礫
- 3 暗茶褐色土
- 4 明赤褐色粘土
- 5 灰褐色粘土
- 6 暗緑灰色シルト (SK02)
- 7 淡緑灰色粘土
- 8 淡黄色粘土
- 9 礫混じり褐色土
- 10 灰色土
- 11 茶褐色混じり灰色土
- 12 黄褐色粘土
- 13 灰色混じり黄褐色土
- 14 黄褐色粘土

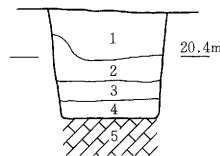


第1トレンチ

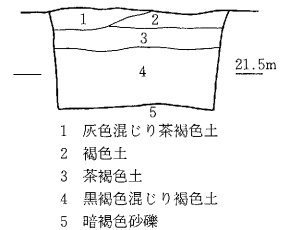
HT94-2区 平面図及び断面図



- 1 盛土
- 2 暗灰色土
- 3 灰色シルト
- 4 褐色シルト
- 5 黄灰色シルト
- 6 礫混じり灰色シルト
- 7 黄褐色シルト
- 8 灰褐色シルト
- 9 褐色シルト
- 10 礫混じり灰褐色シルト

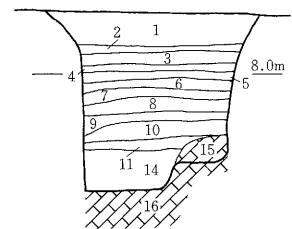


- 1 盛土
- 2 暗茶褐色土
- 3 青灰色粘土
- 4 褐色砂質土
- 5 褐色土

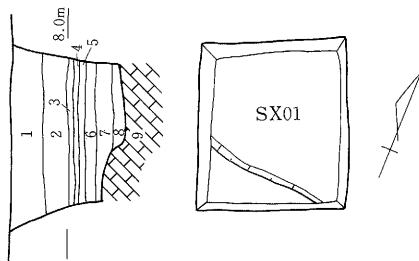
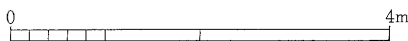


HT94-3区 北壁断面図

HT94-4区 東壁断面図

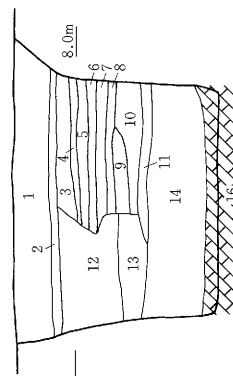


HT94-5区 西壁断面図



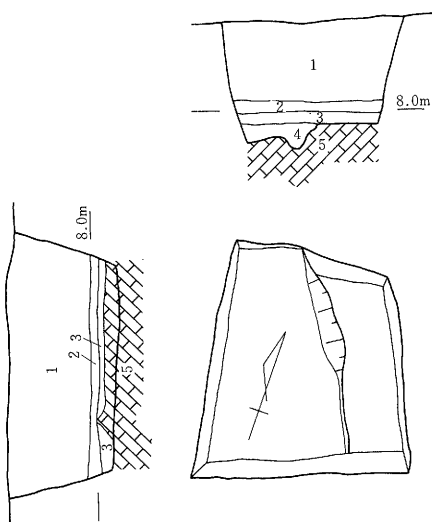
- 1 盛土
- 2 暗灰色土
- 3 暗赤褐色混じり灰褐色シルト
- 4 灰褐色土
- 5 黄褐色混じり灰褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 黄褐色混じり灰褐色土
- 8 暗灰褐色粘土 (SX01)
- 9 明黄褐色粘土

OKD94-2区 平面図及び断面図



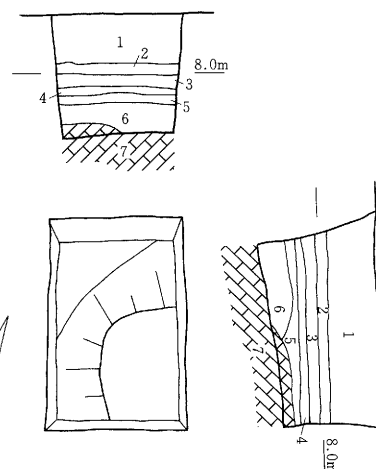
- 1 盛土
- 2 灰黄褐色土
- 3 茶褐色混じり灰褐色土
- 4 灰色土
- 5 灰黄褐色シルト
- 6 明黄褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 灰褐色土
- 9 茶褐色混じり灰褐色土
- 10 礫混じり灰褐色土
- 11 明赤褐色礫
- 12 黒色土
- 13 赤褐色混じり灰黄褐色土
- 14 暗灰色粘土
- 15 黄褐色礫
- 16 緑灰色礫

OKD94-1区 平面図及び断面図



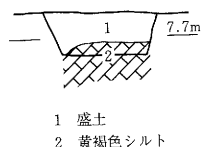
- | | |
|--------------|--------------|
| 1 盛土 | 4 茶褐色混じり灰褐色土 |
| 2 茶褐色混じり灰褐色土 | 5 明黄褐色粘土 |
| 3 灰褐色土 | |

OKD94-4区 平面図及び断面図



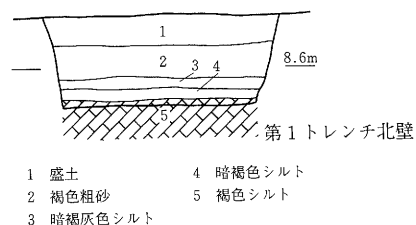
- | | |
|------------|----------------|
| 1 盛土 | 5 黄褐色混じり灰砂質土 |
| 2 暗灰色土 | 6 茶褐色混じり暗灰色粘質土 |
| 3 灰色混じり褐色土 | 7 礫混じり明黄色土 |
| 4 黄褐色土 | |

OKD94-3区 平面図及び断面図



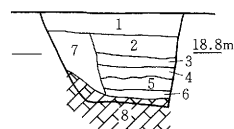
- | |
|----------|
| 1 盛土 |
| 2 黄褐色シルト |

OKD93-3区 東壁断面図



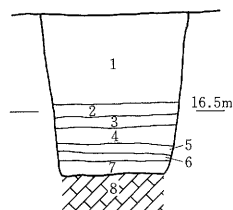
- | | |
|-----------|----------|
| 1 盛土 | 4 暗褐色シルト |
| 2 褐色粗砂 | 5 褐色シルト |
| 3 暗褐灰色シルト | |

OKD94-5区 断面図



- | | |
|-------------|-------------|
| 1 盛土 | 5 灰黄色粗砂混シルト |
| 2 黄色礫混じりシルト | 6 黄灰色粗砂 |
| 3 黄褐色礫 | 7 暗灰色礫 |
| 4 黄褐色細砂 | 8 暗褐色礫 |

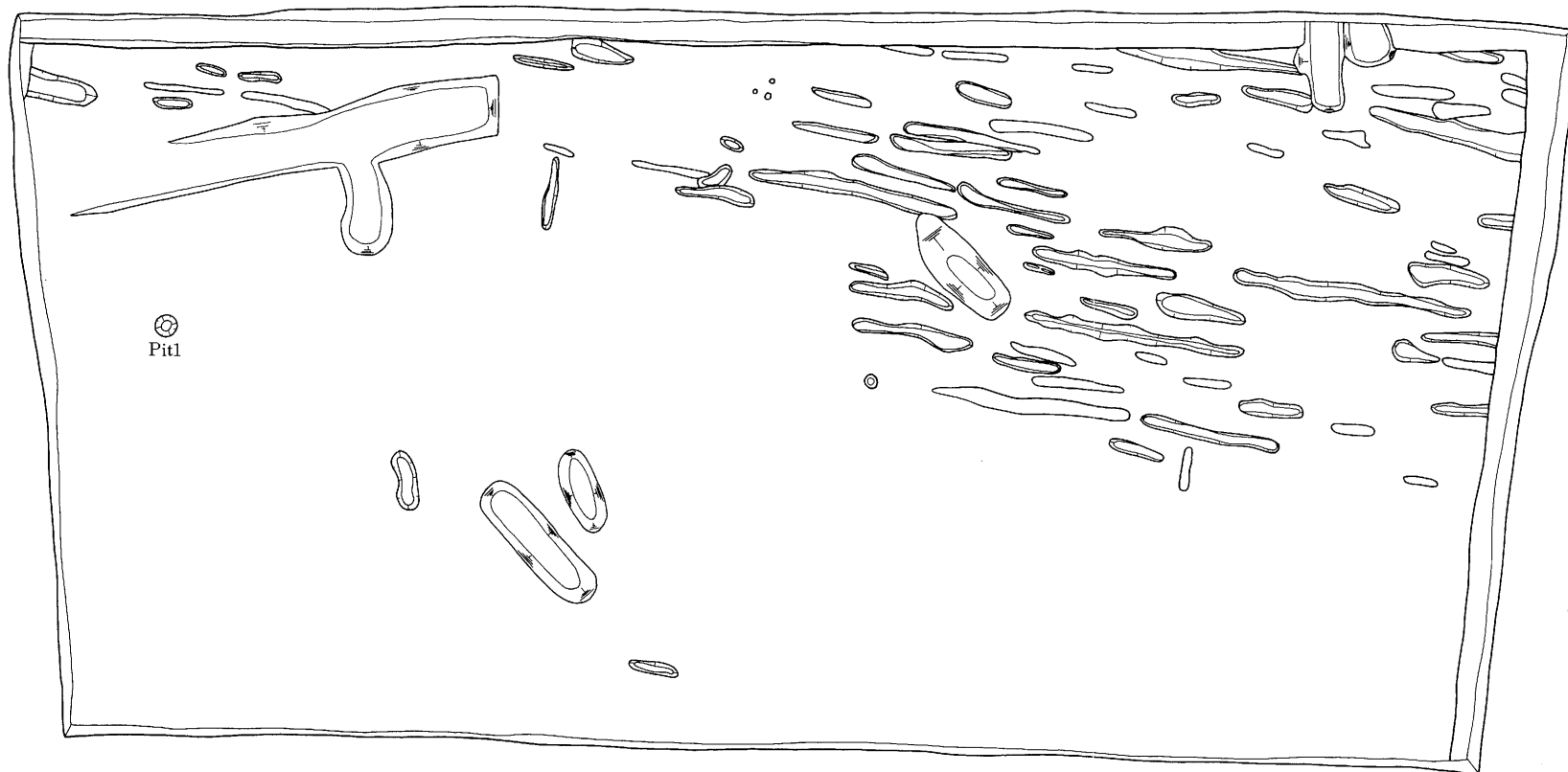
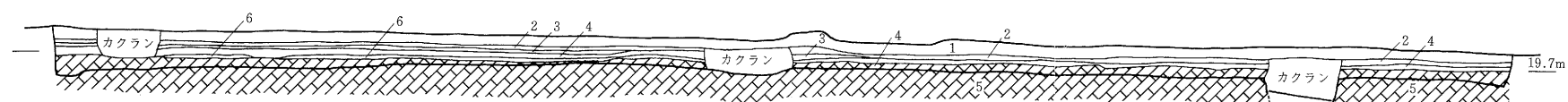
US94-1区 南壁断面図



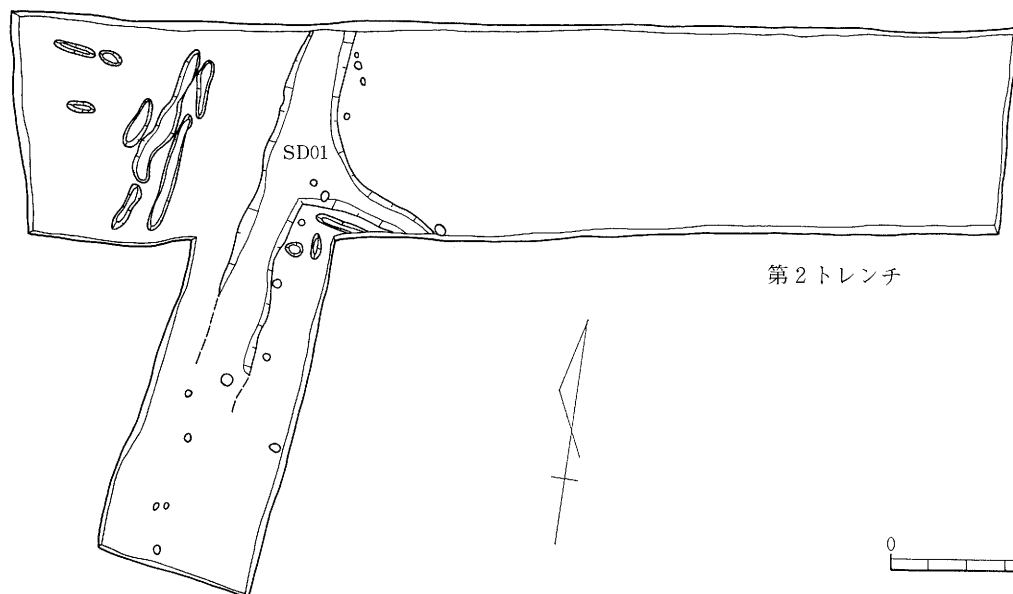
- | | |
|-----------------------|----------------|
| 1 盛土 | 5 暗褐色混じり黄褐色土 |
| 2 黄褐色土 | 6 明黄褐色粘土 |
| 3 灰色混じり黄褐色土 | 7 マンガン混じり褐色粘質土 |
| 4 灰色混じり黄褐色土
(灰色濃い) | 8 暗黄褐色粘土 |

ONS94-1区 東壁断面図



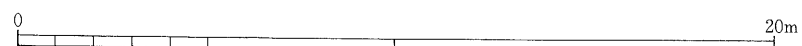


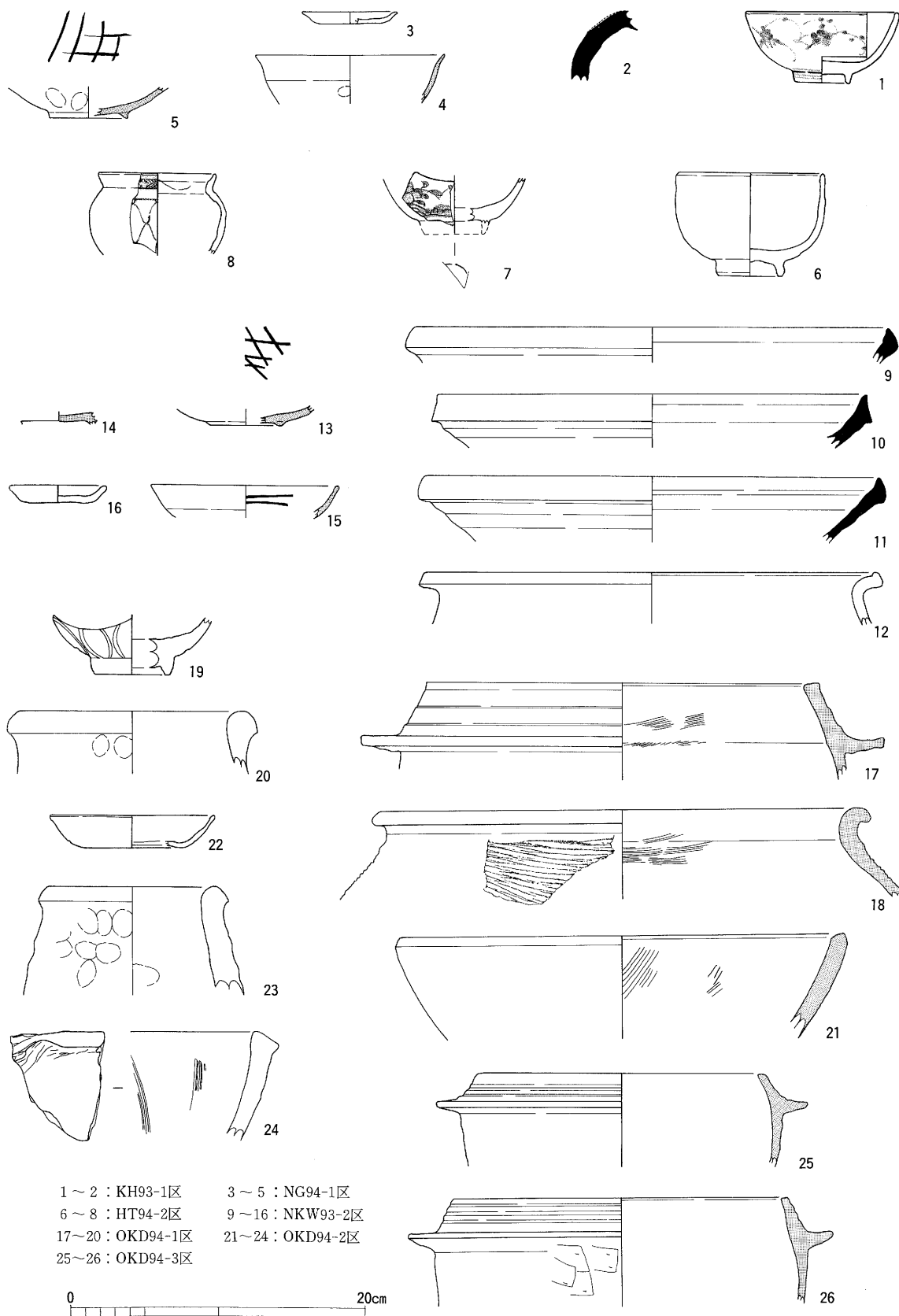
第1トレンチ



第2トレンチ

- 1 現代耕土
- 2 黄橙色土 (床土)
- 3 褐色シルト
- 4 黄褐色シルト
- 5 黄褐色シルト
- 6 灰褐色シルト





1 ~ 2 : KH93-1区

3 ~ 5 : NG94-1区

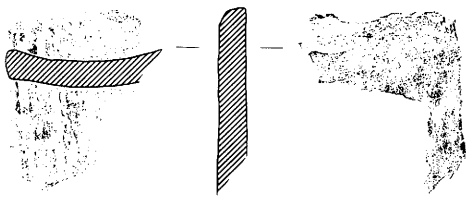
6 ~ 8 : HT94-2区

9 ~ 16 : NKW93-2区

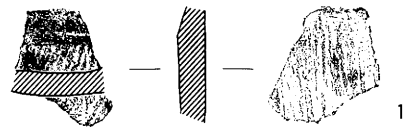
17 ~ 20 : OKD94-1区

21 ~ 24 : OKD94-2区

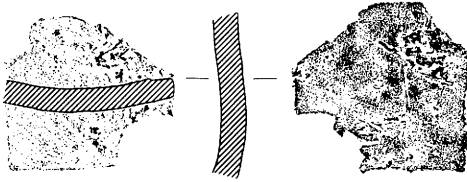
25 ~ 26 : OKD94-3区



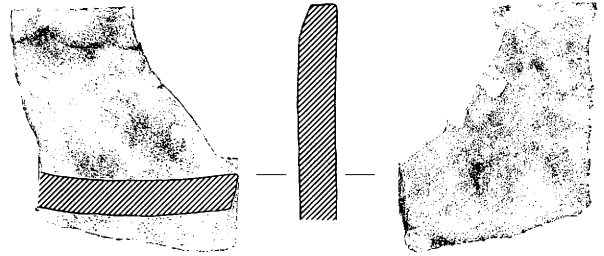
2



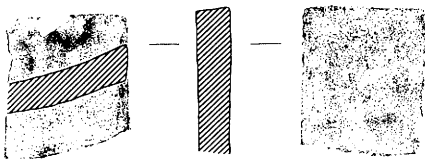
1



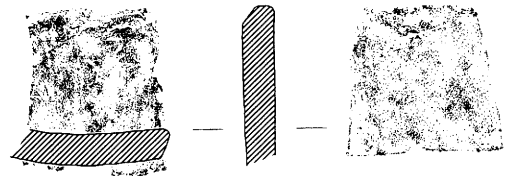
4



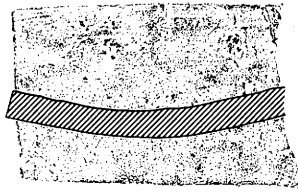
3



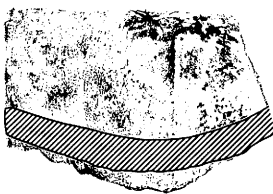
6



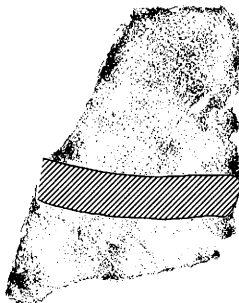
5



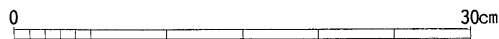
7

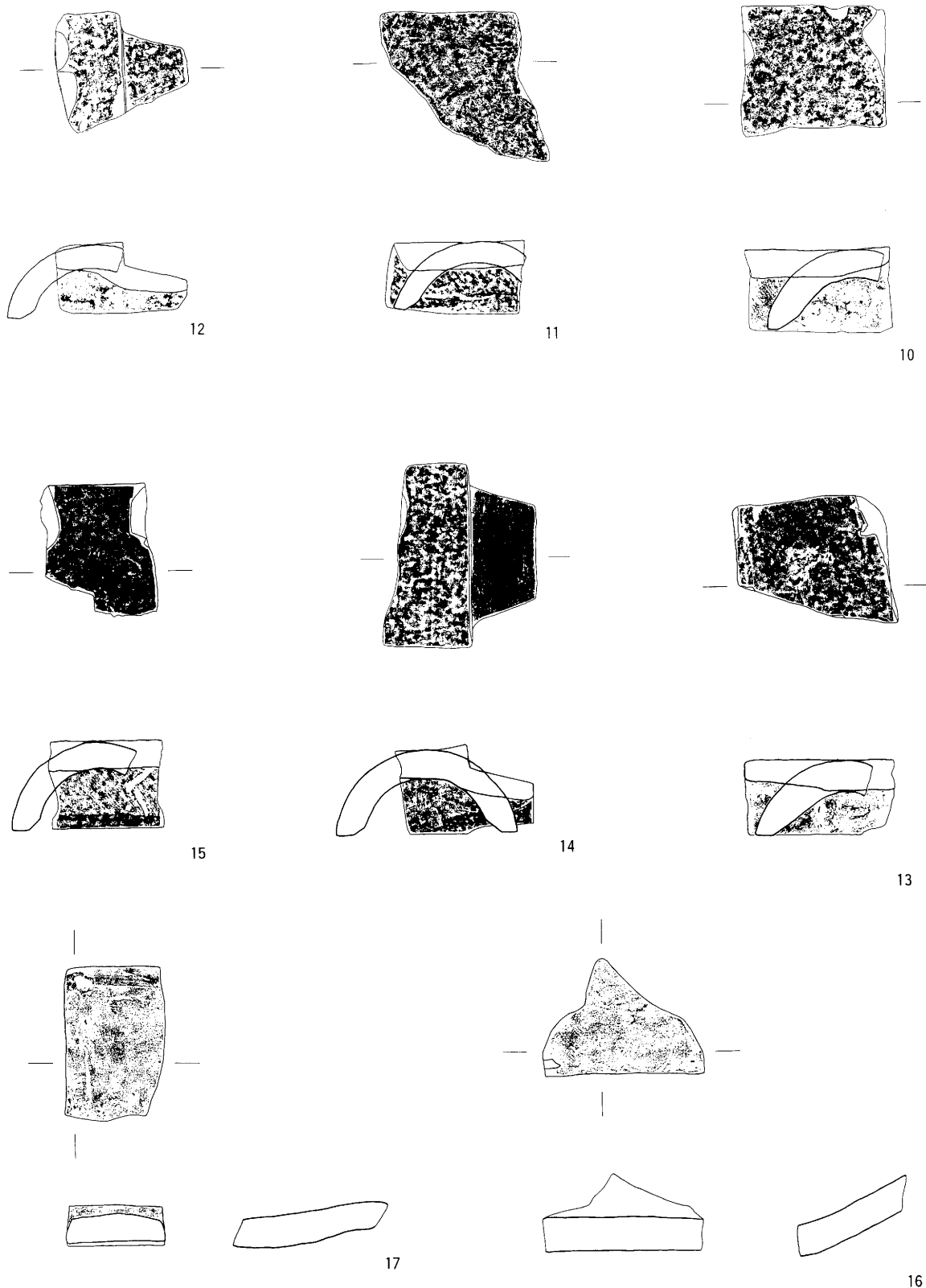


8



9







94-1区（西から）



94-2区（南から）



第1トレンチ（北から）



第2トレンチ（北から）



第1トレンチ（南から）



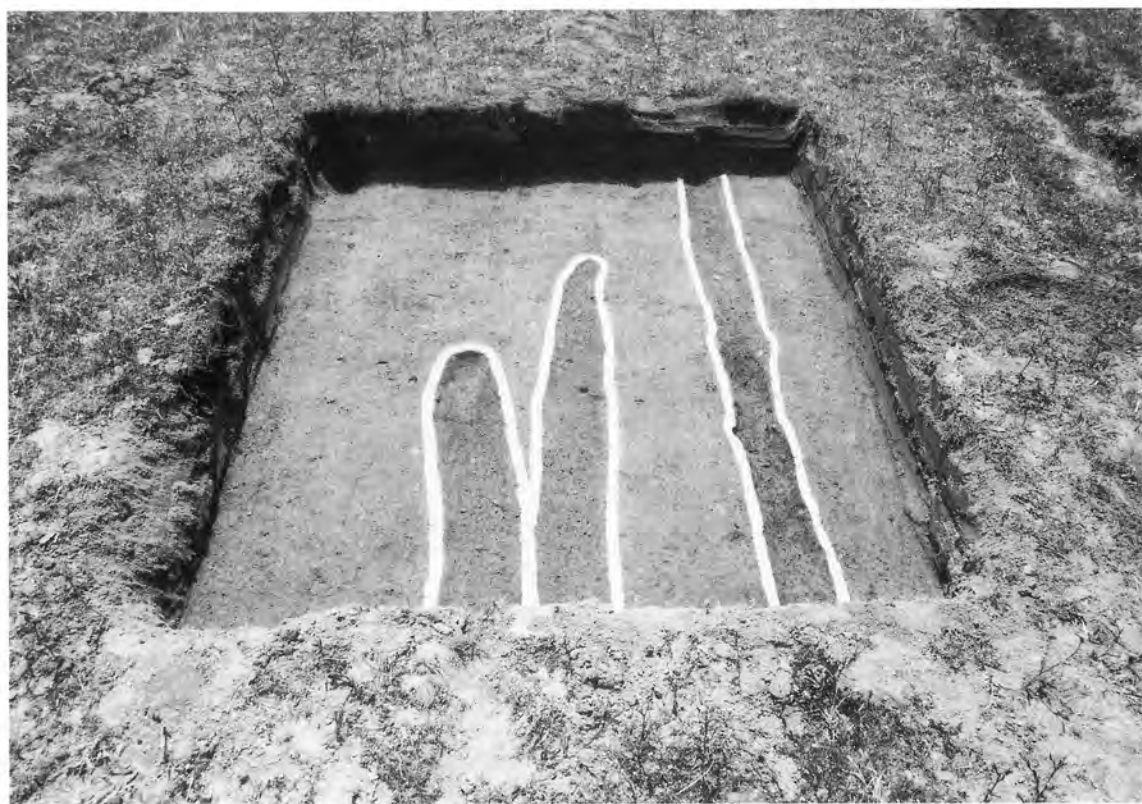
第2トレンチ（北から）



第3トレンチ（北から）



第4トレンチ（南から）



第1トレンチ上層（北から）



同上 下層（北から）



93-8区第2 トレンチ (南から)



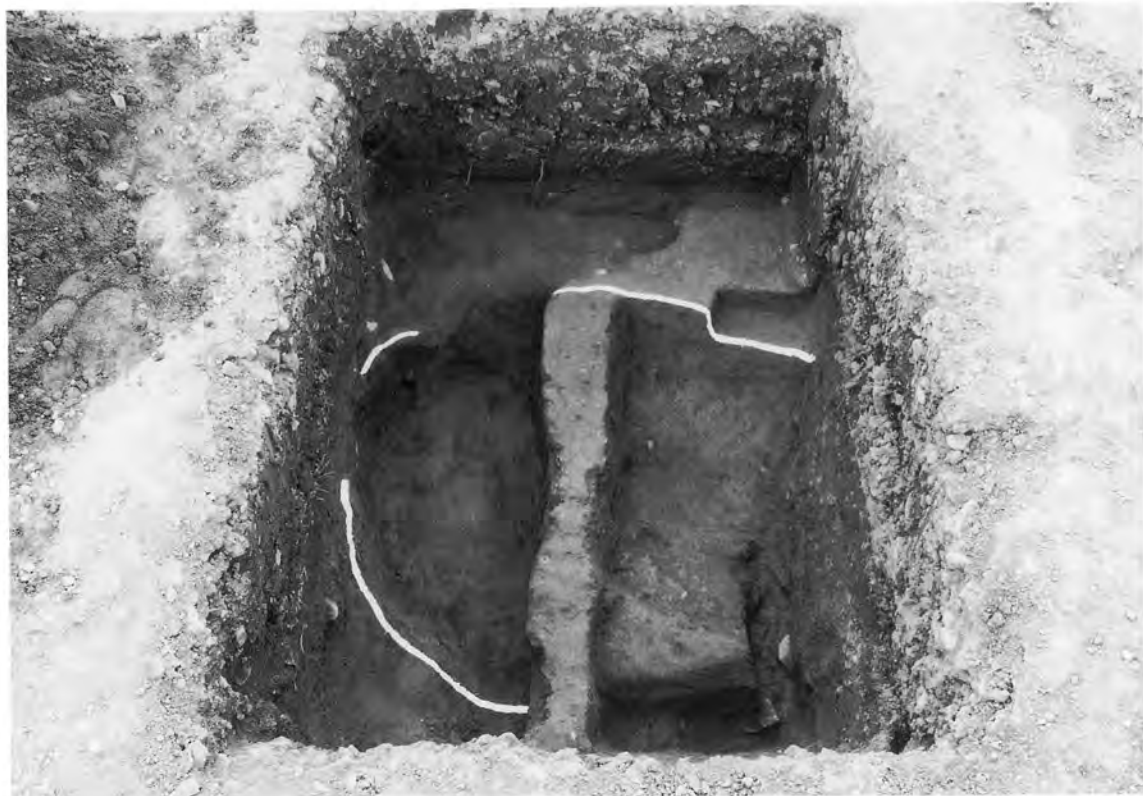
93-7区 (西から)



94-1区（東から）



93-2区Pit1（南から）



SK01 (東から)



SK01 (南から)



上層（南から）



下層（南から）



94-1区第1トレンチ（東から）



94-2区（南から）



第1トレンチ（南から）



第2トレンチ（東から）



94-2区 (南から)



同上 SK01 (西から)



94-2区第2 トレンチ (西から)



94-3区 (南から)



94-4区（東から）



94-5区（南から）



94-1区 (西から)



94-2区 (南から)



第1トレンチ（西から）



SD01（西から）



第1トレンチ (西から)



同上 (南から)



第2トレンチ（西から）



同上（北から）



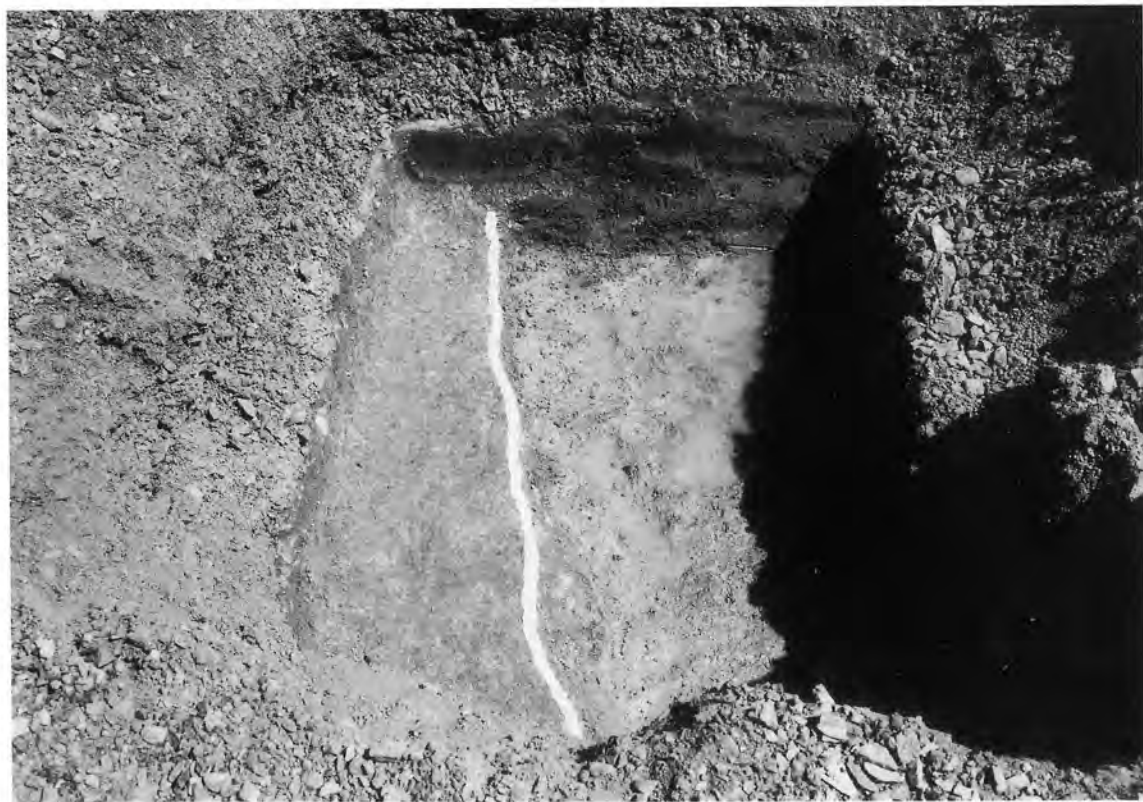
94-1区 (南から)



94-2区 (北から)



94-3区 (北から)



94-4区 (北から)



94-5区第1トレンチ（東から）



93-3区（南から）



ONS94-1区（西から）



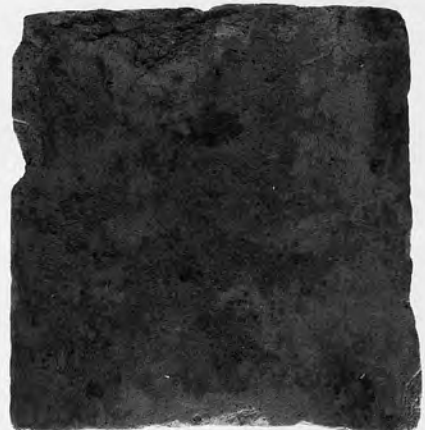
US94-1区（西から）

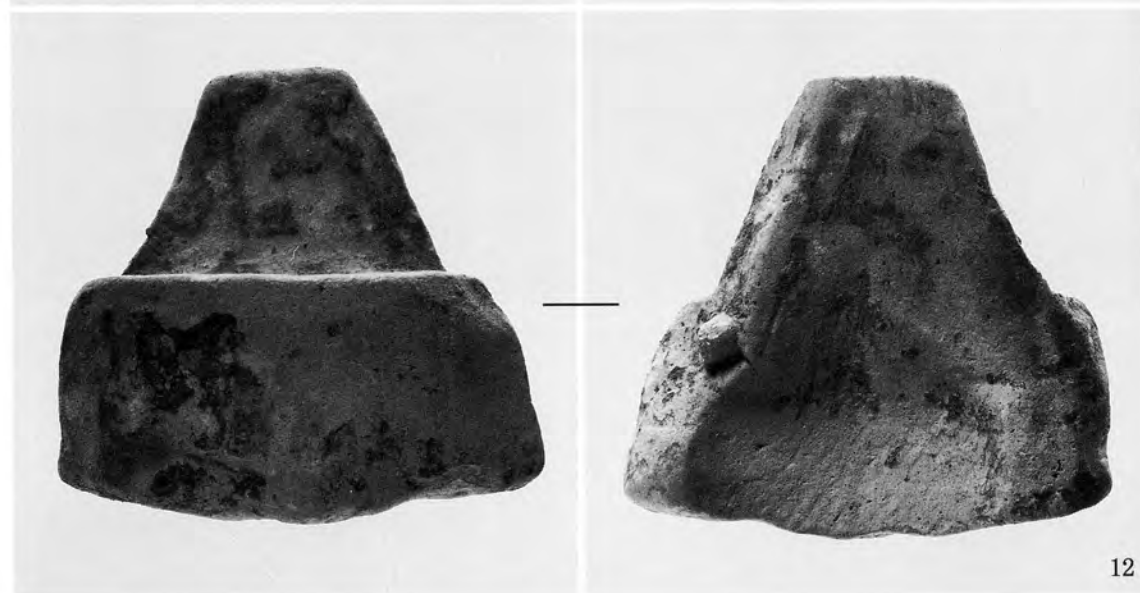
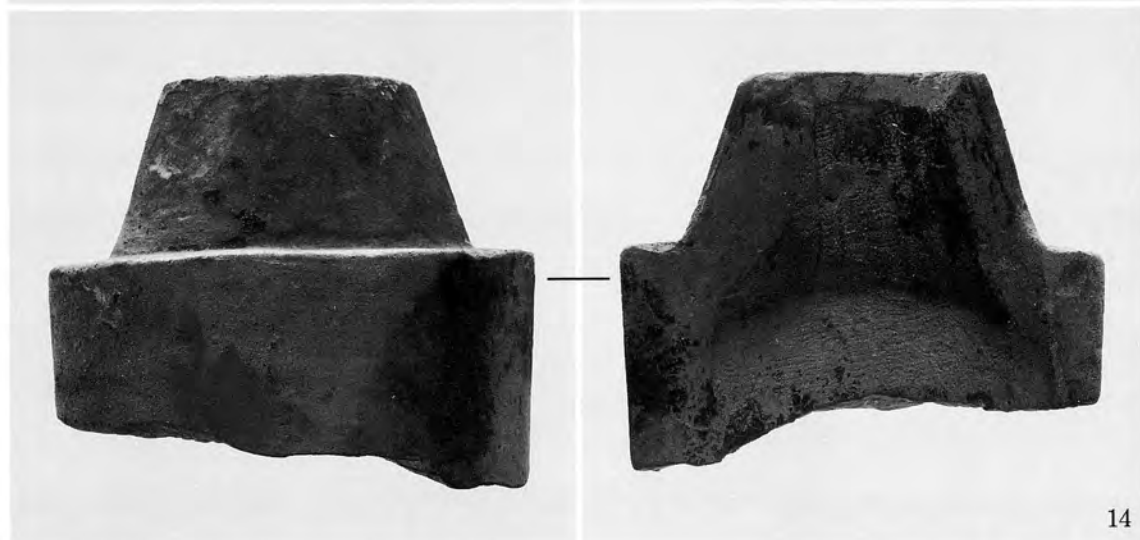
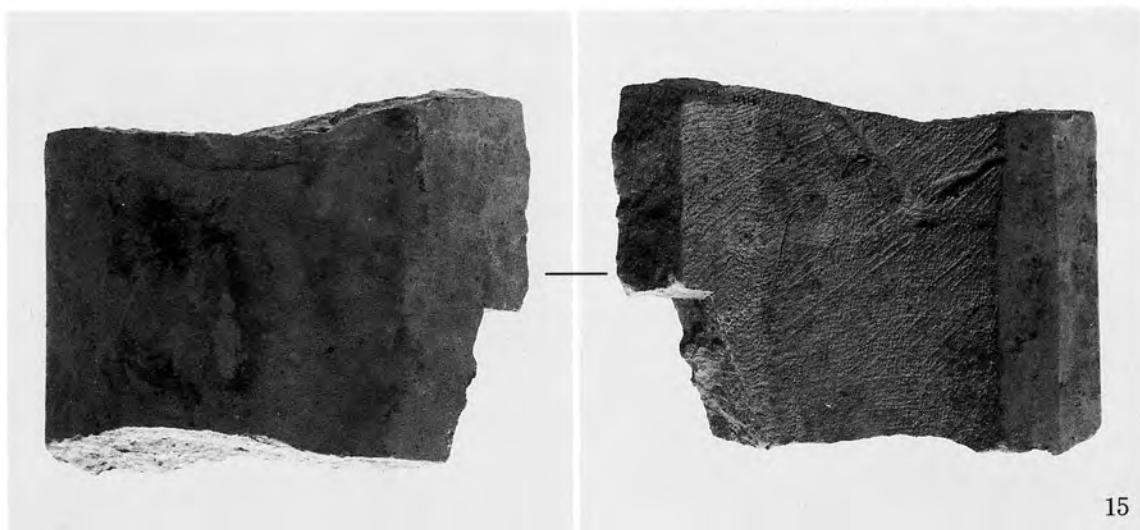


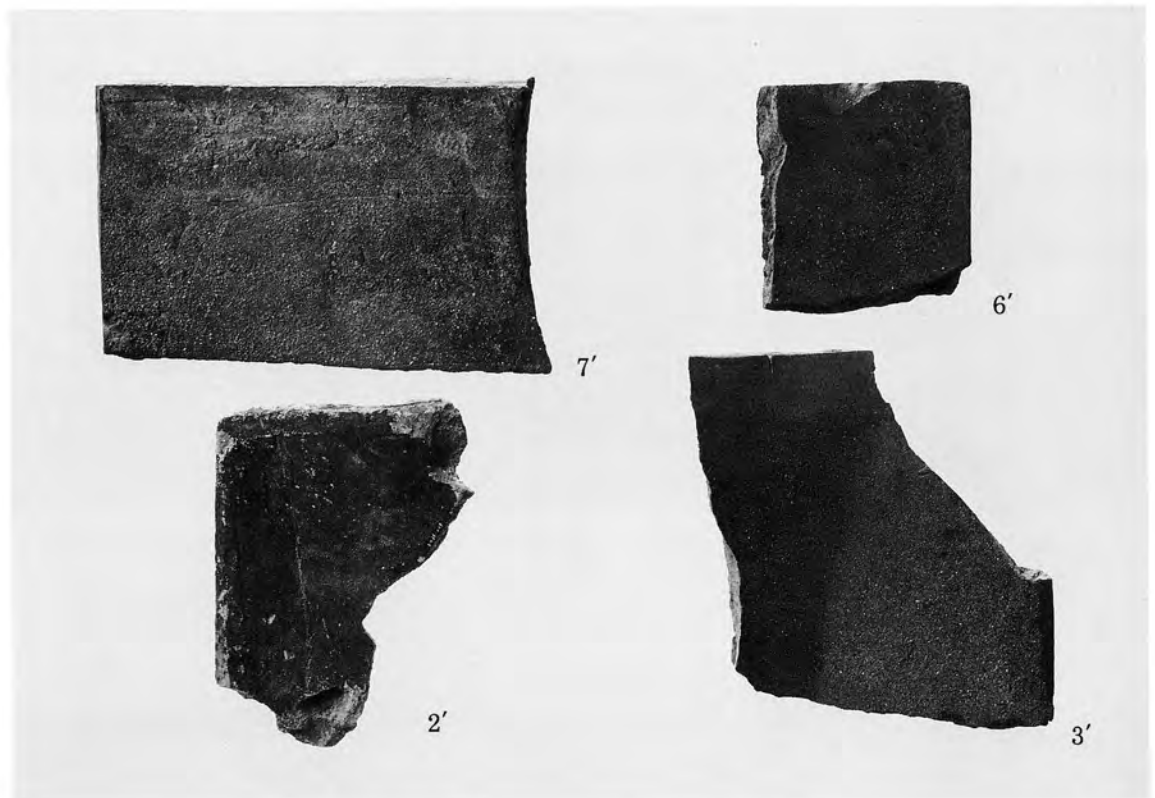
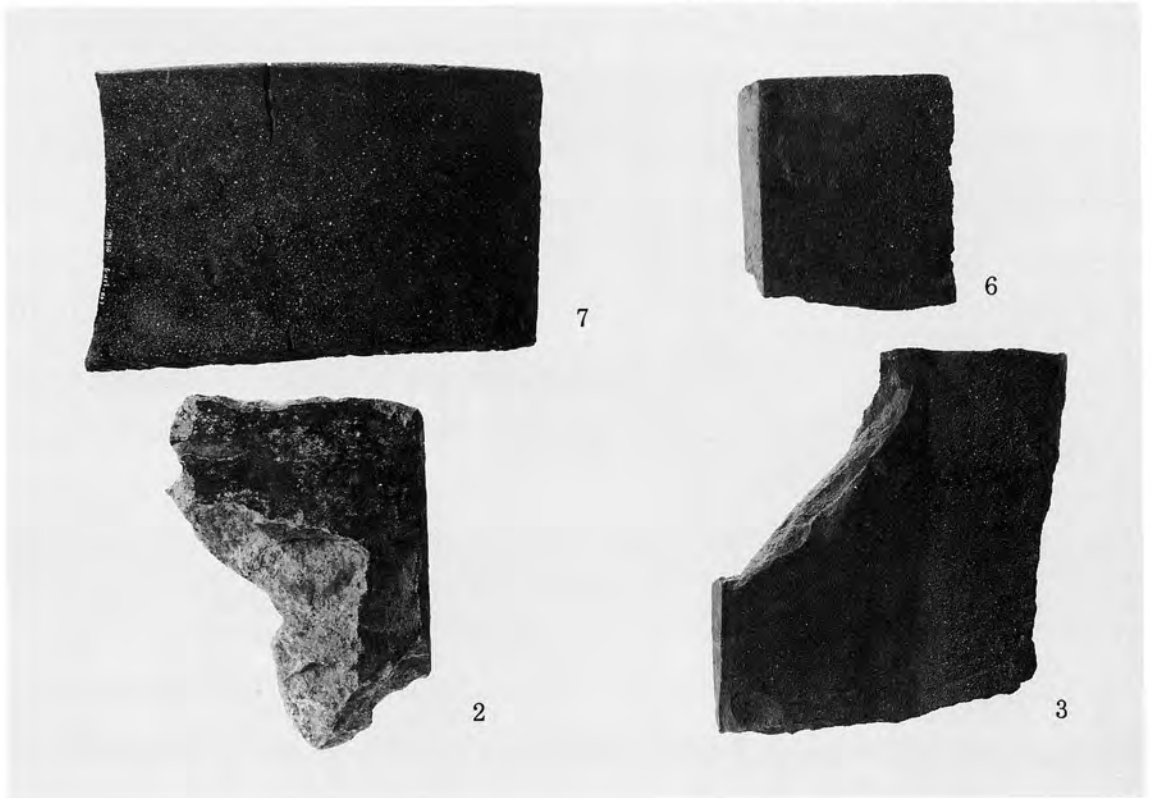
KH21

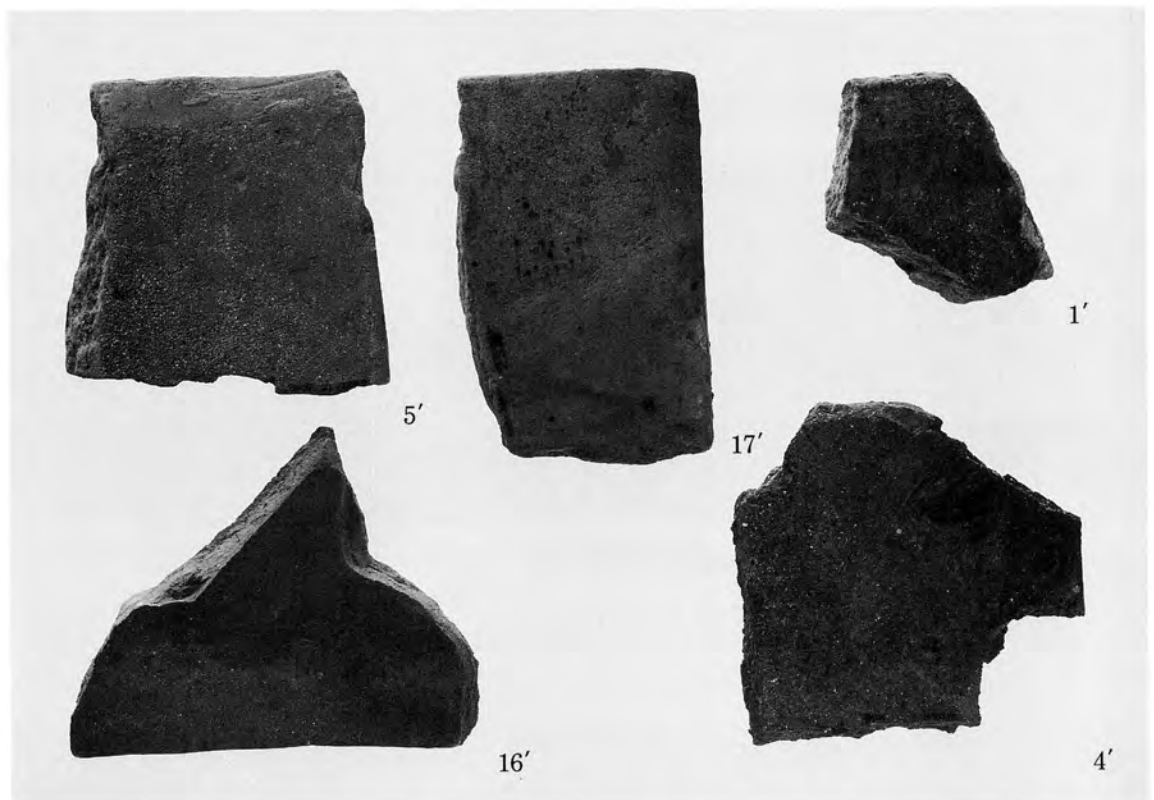
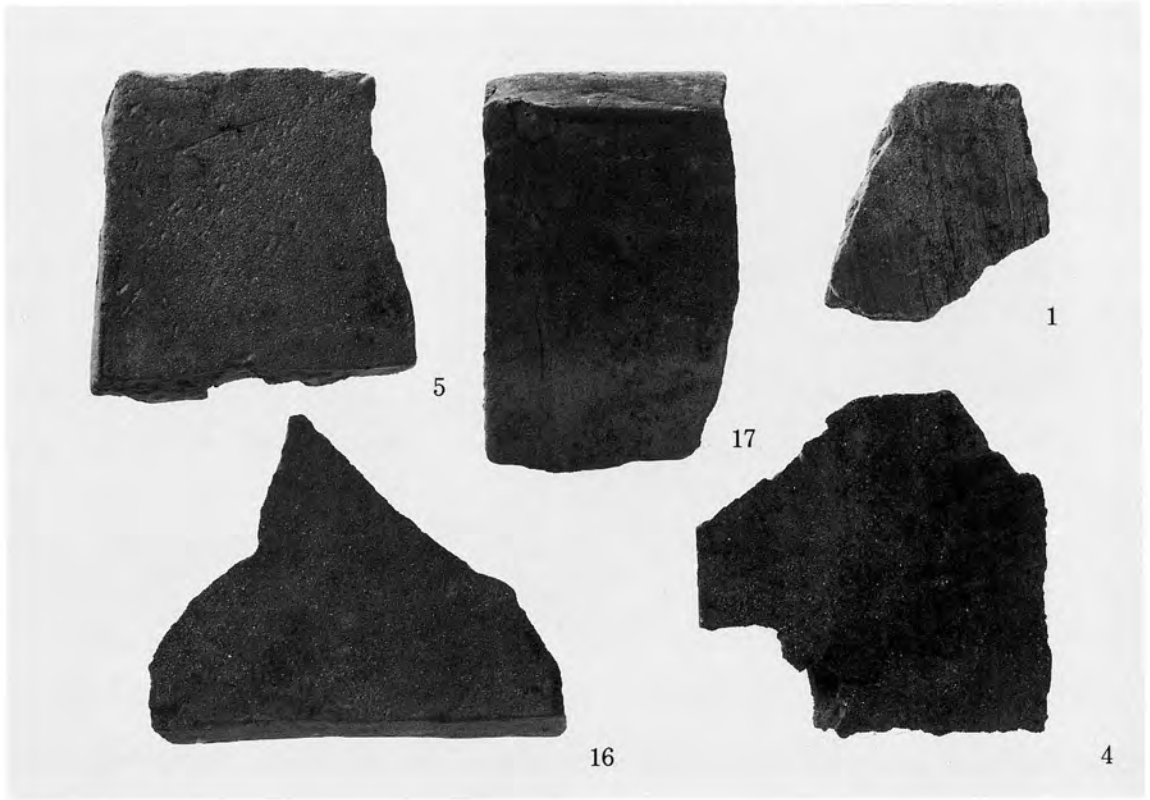


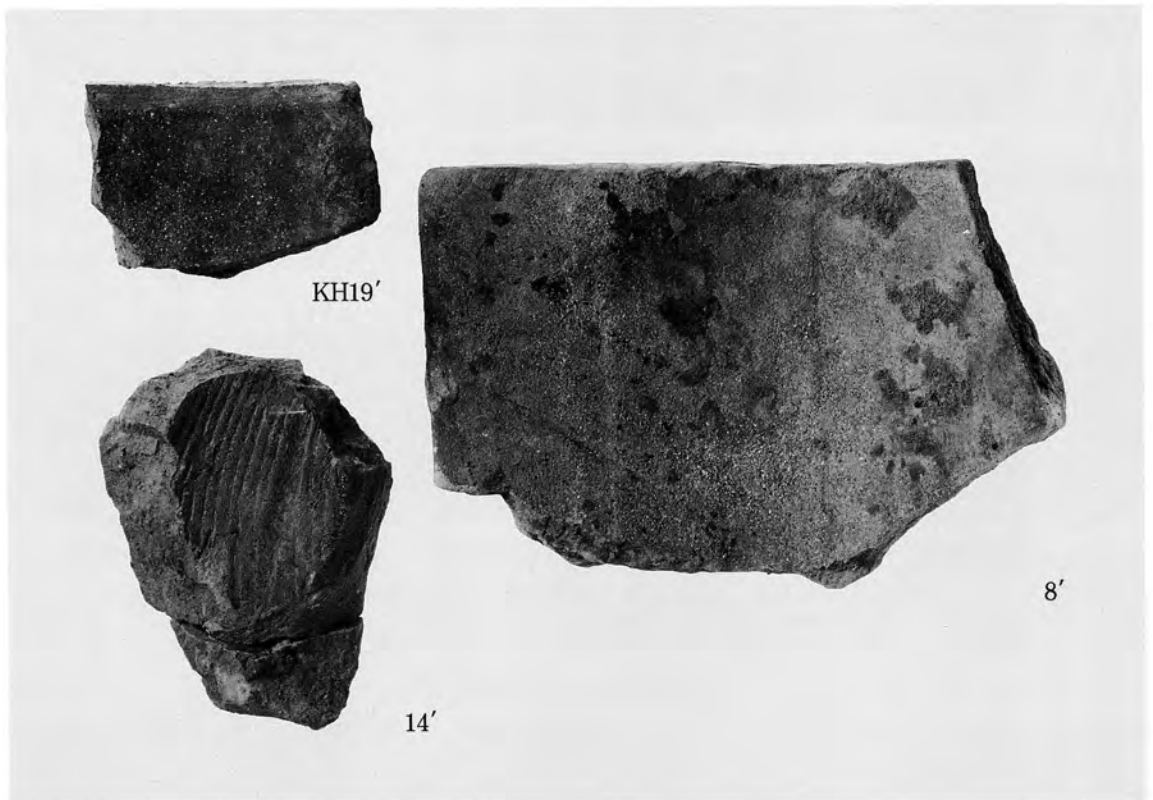
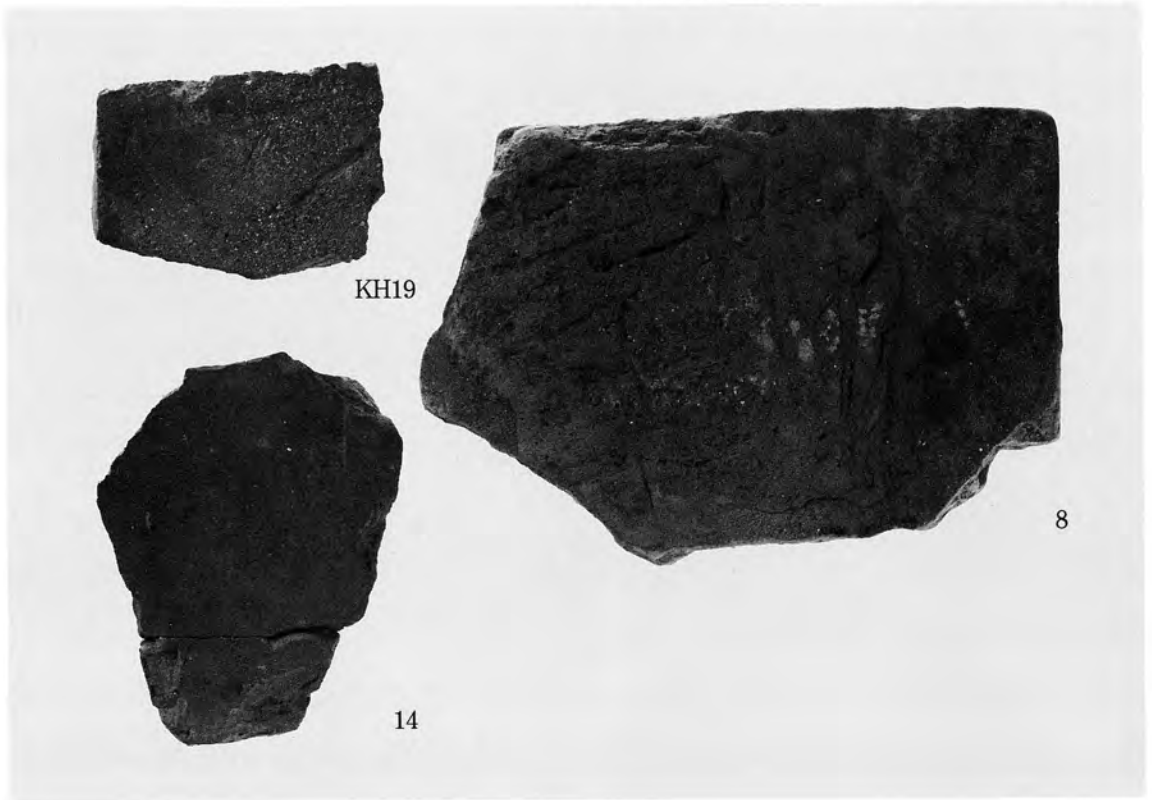
KH22

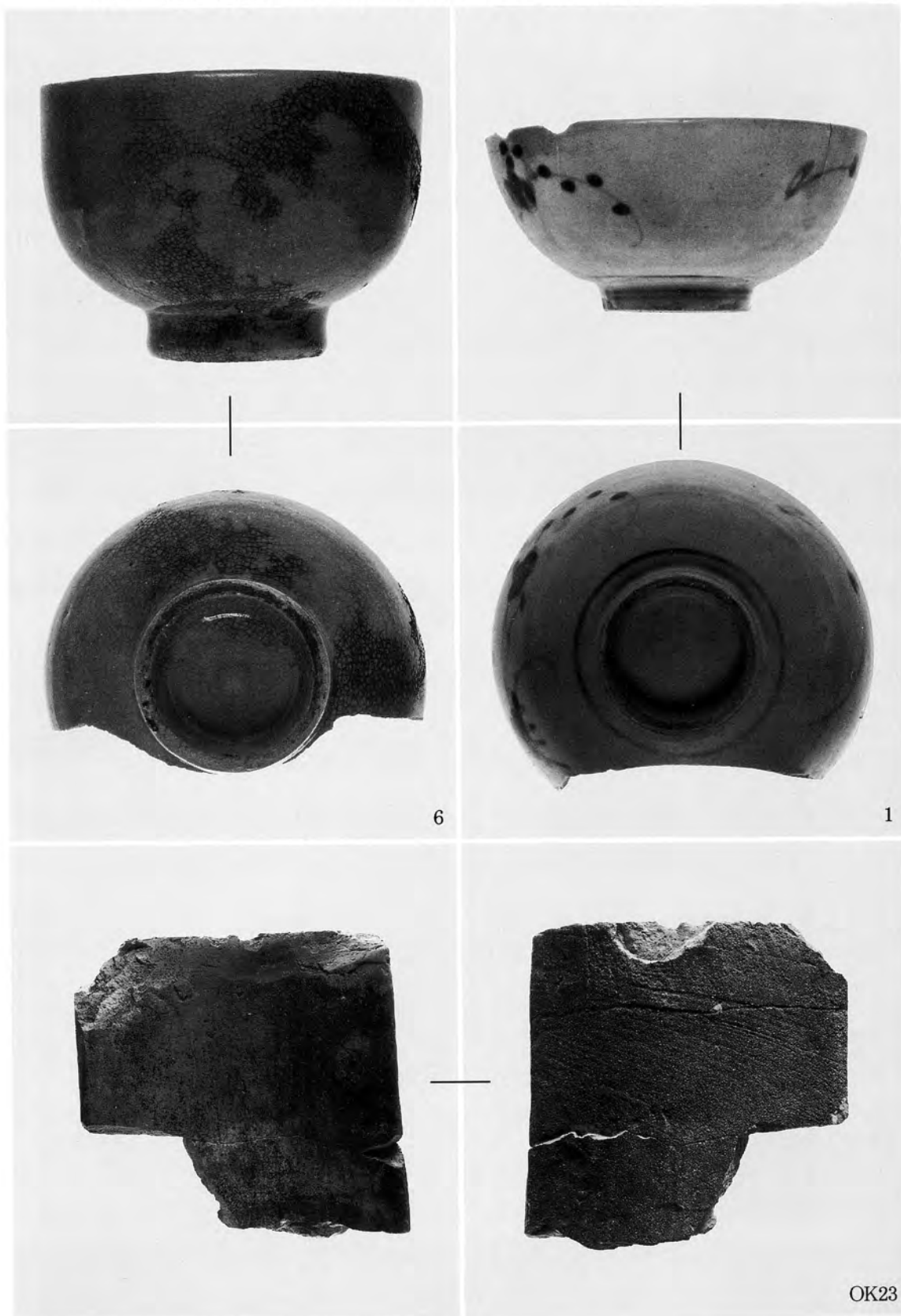














16



3



13



5



9



12



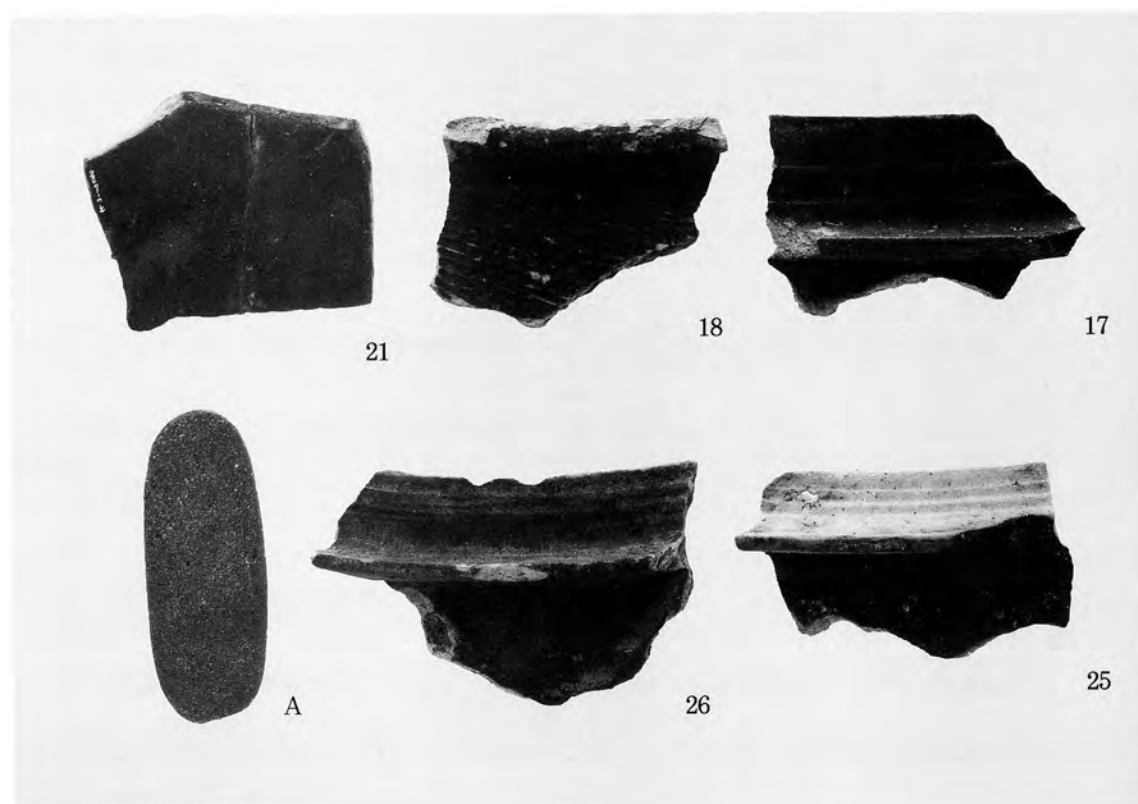
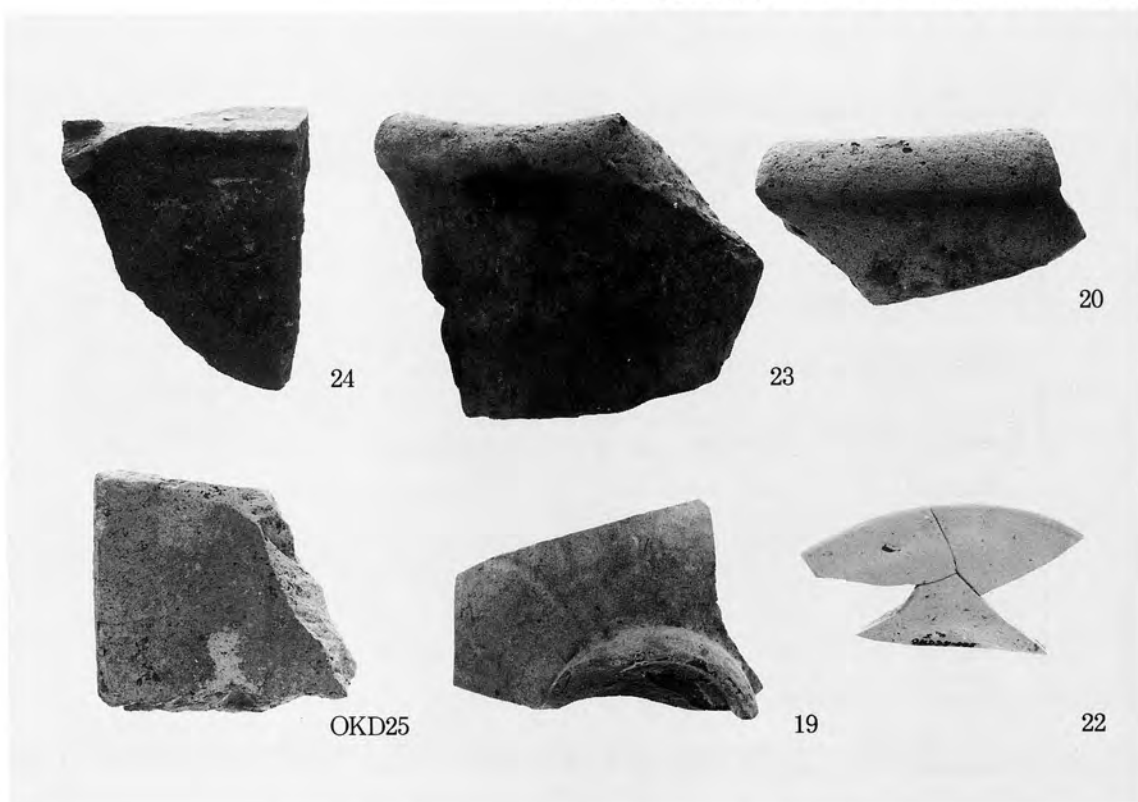
11



10



NKW24



報告書抄録

ふりがな	せんなんし いせきぐんはつくつちょうさほうこくしょ 12									
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書									
副書名	—									
巻次	XII									
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書									
シリーズ番号	第二十七集									
編著者名	仮屋喜一郎・岡田直樹・石橋広和・岡 一彦・城野博文									
編集機関	泉南市教育委員会									
所在地	〒590-05 大阪府泉南市樽井一丁目1番1号 TEL.0724(83)0001									
発行年月日	西暦1995年3月									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡		北緯	東経	調査期間		調査面積 (㎡)	調査原因	
男里遺跡	大阪府泉南市 男里	27228	ON	34度 21分 30秒	135度 15分 40秒	94-1 199404 94-2 199412 94-3 199501 94-4 199411 93-7 199403 93-8 199403		4 2 3 15 2 7	住宅新築 住宅新築 工場付事務所 宅地造成 住宅新築 住宅新築	
光平寺跡	泉南市男里	27228	KH	34度 21分 30秒	135度 15分 27秒	94-1 199412 93-2 199403 93-3 199403		4 7 1	住宅新築 住宅新築 住宅新築	
長山遺跡	泉南市馬場	27228	NG	34度 21分 30秒	135度 16分 05秒	94-1 199405 94-2 199501		123 15	宅地造成 宅地造成	
前田池遺跡	泉南市馬場	27228	MD	34度 21分 18秒	135度 16分 17秒	94-1 199501		10	住宅新築	
幡代遺跡	泉南市幡代	27228	HT	34度 21分 09秒	135度 16分 08秒	94-2 199501 94-3 199410 94-4 199411 94-5 199410		17 5 6 4	住宅新築 農業用倉庫新築 住宅新築 事務所新築	
岡中遺跡	泉南市信達岡 中	27228	OK	34度 20分 51秒	135度 16分 38秒	94-1 199410 94-2 199410		1 5	住宅新築 住宅新築	
本田池遺跡	泉南市樽井	27228	HN	34度 22分 04秒	135度 16分 29秒	94-1 199405 ～06		600	公園造成	
中小路西遺跡	泉南市中小路	27228	NKW	34度 22分 20秒	135度 16分 51秒	93-2 199401 ～02		259	宅地造成	
岡田遺跡	泉南市岡田	27228	OKD	34度 22分 39秒	135度 16分 45秒	94-1 199405 94-2 199405 94-3 199410 94-4 199407 94-5 199408 93-3 199402		2 7 3 4 12 3	住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 住宅新築 店舗付住宅	
大苗代遺跡	泉南市信達大 苗代	27228	ONS	34度 22分 13秒	135度 17分 12秒	94-1 199406		4	住宅新築	
鬼田遺跡	泉南市鬼田	27228	US	34度 22分 25秒	135度 18分 38秒	94-1 199412		3	住宅新築	

所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
男里遺跡							
94-1	集落	中世	柱掘方	2	須恵器・土師器など	掘立柱建物の存在を推定。 集落域を推定する資料の獲得。	
94-2	—	中世	—	—	—		
94-3	—	不明	—	—	—		
94-4	—	不明	—	—	—		
93-7	集落	不明	ピット	2	土師器など		
93-8	—	中世～近世					
光平寺跡							
94-1	—	中世	—		瓦など	寺域を推定する資料の獲得。 瓦窯の存在を推定する。 整地層の確認。	
93-2	社寺跡	中世	ピット	1	瓦など		
93-3	集落？	中世	土坑	1基	瓦など		
長山遺跡							
94-1	—	中世	落ち込み	1	土師器・瓦器など	当遺跡初の調査。 段丘開発の開始次期を推定する資料を獲得。	
			溝	3条			
94-2	—	不明	耕作痕・杭群				
			ピット	1	—		
			土坑	1基			
前田池遺跡	—	不明	落ち込み	1	瓦器など	当遺跡初の調査。 微地形を復元する資料の獲得。	
幡代遺跡							
94-2	集落	近世	ピット	1	瓦・陶磁器など	近世遺構範囲の拡がりを確認。	
			土坑	3基			
			落ち込み	1			
94-3	—	不明	—		—		
94-4	—	不明	—		—		
94-5	—	不明	—		—		
岡中遺跡							
94-1	—	中世	—		瓦など	寺域を推定する資料の獲得。 土地利用の変遷を確認。	
94-2	—	不明	—		—		
本田池遺跡	—	中世	溝	1条	—	大規模な溝を検出。	
			鋤溝・土坑	多数			
中小路西遺跡	—	中世	ピット	1	瓦器碗・土師器など	段丘の開発過程を知る資料。	
			溝	1条			
			耕作痕	多数			
岡田遺跡							
94-1	—	中世	落ち込み	1	瓦・土師器・青磁碗など	遺跡内における遺構の広がりを確認するとともに、出土遺物等から遺跡の範囲を推定する新データの獲得。	
94-2	—	中世	落ち込み	1	瓦・土師器		
94-3	—	中世	落ち込み	1	敲石（採集遺物）など		
94-4	—	不明	落ち込み	1	瓦質羽釜など		
94-5	—	不明	—		—		
93-3	—	不明	—		—		
大苗代遺跡	—	不明	—		土師器など		
兎田遺跡	—	不明	—		—		

